
沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(V)

—— 宮古諸島編 ——

2005年(平成17)3月
沖縄県立埋蔵文化財センター

序

本報告書は文化庁から国庫補助を受けた沖縄県戦争遺跡詳細分布調査のうち、平成15年～16年度に実施した宮古諸島地区における成果をまとめたものであります。

本県は去る沖縄戦において県内各地で多くの一般市民を巻き込んだ激しい戦闘が展開され、多数の尊い命や財産が奪われました。沖縄諸島及び宮古・八重山諸島の島々にはこの戦争によって、多くの構造物や遺構などが残されています。

平成10年度より開始された戦争遺跡詳細分布調査のなかで、本報告書は一昨年「北部編」、昨年「那覇市及び周辺離島編」に続くものであります。

全県的な詳細分布調査の成果は、戦争遺跡を文化財として保存検討するための資料として、また、諸開発事業との協議調整や歴史・平和教育としての活用に資するための基礎資料として役立つものと考えています。

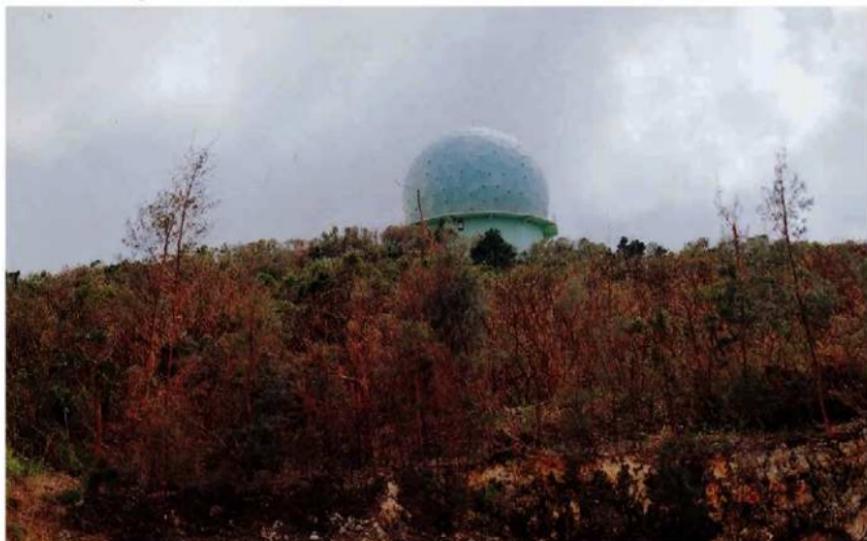
本報告書が文化財保護思想の普及啓発や地域文化財への関心、並びに沖縄県の歴史に対する理解と認識を深めるために、多方面にご活用いただければ幸いに存じます。

末尾になりましたが、現地調査並びに報告書作成にあたり、多大なるご指導ご協力を賜りました文化庁をはじめ、関係市町村教育委員会などの各位に対して深く感謝申し上げます。

2005年（平成17）3月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所 長 安里 嗣淳

調査概要写真①



野原岳遠景（上野村野原）



トゥリバー浜特攻艇秘匿壕 遠景（平良市久貝）

調査概要写真②



ヌーザランミ特攻艇秘匿壕 壕内部（平良市狩俣）



ヌーザランミ特攻艇秘匿壕 壕入口（平良市狩俣）

調査概要写真③



旧日本陸軍中飛行場戦闘指揮所内部（上野村野原）



旧日本陸軍中飛行場戦闘指揮所入口（上野村野原）

調査概要写真④



大嶽城跡公園東側壕群 壕入口（上野村野原）



大嶽城跡公園東側壕群 カマド跡（上野村野原）

調査概要写真⑤



東保茶根の戦争遺跡群 交通壕（城辺町友利）



東保茶根の戦争遺跡群 弾薬庫壕（城辺町友利）

調査概要写真⑥



荷川取海岸秘匿壕群 壕内部（平良市荷川取）



盛加越の海岸通信隊壕 排気孔（平良市東仲宗根）

調査概要写真⑦



アーリヤマの戦争遺跡群 発電機壕入口（城辺町長山）



アーリヤマの戦争遺跡群 発電機壕内部（城辺町長山）

調査概要写真⑧



二重越の地下塚群 塚入口（平良市東仲宗根）



二重越の地下塚群 古墓利用の塚（平良市東仲宗根）

目 次

序
巻頭図版
例 言

第Ⅰ章 調査の概要	
第1節. 調査体制	1
第2節. 調査経過	3
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	
第1節. 地理的環境	4
第2節. 歴史的環境	7
第Ⅲ章 宮古諸島地区の沖繩戦	
第1節. 第32軍の編成と宮古作戦	8
第2節. 宮古諸島地区の沖繩戦の展開	9
第3節. 宮古諸島地区の沖繩戦の特徴	9
第Ⅳ章 各市町村における戦争遺跡	
第1節. 平良市	
1. 那底の地下壕	15
2. 大浜の特攻艇秘匿壕群	16
3. トゥリバー浜特攻艇秘匿壕群	19
4. バイナガマビーチの機関銃壕	21
5. 久松の機関銃壕	23
6. 荷川取海岸秘匿壕群・ウブドゥマリーヤ特攻艇秘匿壕群	25
7. 盛加越の海軍通信隊壕	29
8. 海軍第313設営隊の地下壕群	30
9. 二重越の地下壕群	35
10. 宮原の地下壕群	38
11. ピンフ嶺野戦重火器砲壕・トーチカ	40
12. 大原の陣地壕	42
13. 白原井の地下壕	43
14. スーザランミ特攻艇秘匿壕	44
15. 宮古南静園の避難壕	46
16. 宮古南静園の重火器砲壕	48
第2節. 下地町	
1. チフサアブ	52
2. 来間の山砲陣地壕	53
3. 東御嶽のタコ壺と銃座	54
第3節. 上野村	
1. 旧日本陸軍中飛行場戦闘指揮所	56
野原岳・大嶽城跡公園戦争遺跡群	58
2. 野原岳頂上の電波探知機壕	59
3. タキグスバルの地下壕群	61
4. ツガガの地下壕群	64
5. 大嶽城跡公園西側壕群・トーチカ	66
6. 大嶽城跡公園東側壕群	68
7. 野原岳北側発電施設壕	70
8. 御真影奉護壕	72
9. トゥクルアブ	74
10. タカシカパーの機関銃壕	75
11. 新里の機関銃壕	76

第4節	城辺町	
	6. 東保茶根の戦争遺跡群	78
	11. 下里添の野戦重火器秘匿壕	82
	16. アーリヤマの戦争遺跡群	84
	18. 吉野海岸の壕	87
	22. ミルク嶺の地下壕群	88
第5節	伊良部町	
	2. 国仲の避難壕	92
	3. 佐良浜の避難壕	92
	4. カンギダツ壕・カヤフヤ壕	94
	5. 牧山陣地壕	96
第6節	多良間村	
	1. シュガーガー・ウスヌカー	100
	2. 塩川御嶽のトンバラ	100
	3. ヤマトゥビイトゥトンバラ	101
	4. アマガー	101
第V章	結語	105

目次

第1図	琉球列島の位置	5
第2図	調査対象位置図	6
第3図	宮古島地区防禦配備図	10
第4図	特攻艇秘匿壕分布図	18
第5図	壕①②平面図及び断面図	18
第6図	特攻艇秘匿壕分布図	20
第7図	壕⑬⑭⑮平面図	20
第8図	壕断面図及び銃眼立面図	21
第9図	機関銃壕・バイナガマビーチ周辺地形図	22
第10図	荷川取ウブドゥマーリヤ特攻艇秘匿壕周辺図	26
第11図	I壕分布図	26
第12図	II壕分布図	26
第13図	III壕分布図	26
第14図	壕平面図	27
第15図	壕平面図	28
第16図	旧日本海軍第313設営隊壕配置図	31
第17図	壕平面図	32
第18図	壕平面図	33
第19図	壕平面図	34
第20図	壕平面図	36
第21図	戦時中の二重越周辺状況	37
第22図	壕配置図	38
第23図	壕①②③平面図	38
第24図	野戦重火器砲壕平面図	41
第25図	白原井の地下壕平面図	43
第26図	ヌーザランミ特攻艇秘匿壕周辺地形図	45
第27図	ヌーザランミ特攻艇秘匿壕平面図	45
第28図	重火器砲壕平面図	48

第29図	平面図	56
第30図	野原岳周辺の戦争遺跡群配置図	58
第31図	レーダー北側の電波探知機壕平面図及び入口立面図	60
第32図	壕⑧平面図	61
第33図	壕平面図	62
第34図	壕平面図	65
第35図	壕平面図	67
第36図	壕平面図	69
第37図	平面図及び立面図	70
第38図	平面図及び断面図	73
第39図	トゥクルアップ平面図及び断面図	74
第40図	友利東保茶根戦争遺跡群配置図	79
第41図	壕平面図	79
第42図	弾薬庫平面図及び弾薬庫入口立面図	80
第43図	東の砲台から弾薬庫を結ぶ交通壕平面図	80
第44図	平面図及び立面図	82
第45図	アーリヤマ周辺の戦争遺跡配置図：①発電機壕 ②トーチカ ③貯水池	85
第46図	発電機壕平面図及び断面図	85
第47図	ミルク嶺の地下壕群配置図	89
第48図	壕平面図	89
第49図	牧山陣地壕平面図	97
第50図	地下水流域の境界及び流動方向	106
第51図	明治10年頃のマラリア地帯	106
第52図	宮古諸島地質図	107

表 目 次

第1表	宮古諸島地区の人口・世帯数・面積	4
第2表	宮古諸島地区の戦争遺跡表	12

例 言

- 1 本報告書は、平成15～16年度に実施した戦争遺跡詳細分布調査（宮古諸島地区）成果を収録したものである。
- 2 本事業は、文化庁からの補助を受け、沖縄県教育委員会が行ったものである。調査は県立埋蔵文化財センターが主体となって実施した。
- 3 執筆者は次のとおりである。また、編集作業は山本正昭を中心に伊波直樹の協力を得て行った。

山本 正昭 第Ⅰ章、第Ⅳ章 第Ⅴ章

伊波 直樹 第Ⅱ章

吉浜 忍 第Ⅲ章

- 4 本報告書に使用した地形図は、国土地理院(平成6年12月1日)発行の25,000分1を複製、転用した。
- 5 附図（遺跡分布図）には、踏査で確認されている戦争に関連する戦前期の記念碑等も戦争遺跡としてプロットした。
- 6 本調査において、宮古諸島地区各市町村教育委員会、宮古の自然と文化を考える会及び関係者等の協力のもと、円滑な調査を実施することができた。特に記して感謝申し上げます。
- 7 本調査で得られた実測図、写真などの資料はすべて沖縄県立埋蔵文化財センターに保管してある。
- 8 本報告書第Ⅳ章の各遺跡の種別と形態は次のとおりである。

種別：住民避難、陣地、記念碑等、砲台、トーチカ、交通関係、秘匿壕、監視哨、

銃座、指揮所、不明、その他

形態：自然壕、人工壕、建造物、構築物、不明、その他

※本報告書では、主として軍事目的に建築または土木工事を行った構造物を構築物とし、軍事目的以外のものを建造物とした。

第 I 章 調査の概要

第 1 節. 調査体制

現地調査（平成15年度）から資料整理及び報告書の刊行（平成16年度）まで、下記の体制で実施した。また、宮古諸島地区の各市町村教育委員会、宮古の自然と文化を考える会及び関係者からの協力を随時得ることができた。

a 2003年度（平成15）の調査体制

事業主体・・・沖縄県教育委員会	
教育長	山内彰
県教育庁文化課課長	日越国昭
〃 課長補佐	上地泰順、大城慧
〃 記念物係長	島袋洋
〃 〃 専門員	中山晋
調査主体・・・沖縄県立埋蔵文化財センター	
所長	安里嗣淳
調査事務	
副所長兼庶務課課長	安富祖英紀
庶務課主任	比嘉美佐子
〃 主事	西江幸枝
調査総括	
調査課課長	盛本勲
調査員	
調査課主事	川元哲哉
〃 専門員	山本正昭
調査補助員	
文化財調査嘱託員	伊波直樹、金城達、久貝弥嗣、矢澤秀雄

b 2004年度（平成16）の調査体制

事業主体・・・沖縄県教育委員会	
教育長	山内彰
県教育庁文化課課長	名嘉政修
〃 課長補佐	上地泰順、千木良芳範
〃 記念物係長	島袋洋
〃 〃 専門員	中山晋
調査主体・・・沖縄県立埋蔵文化財センター	
所長	安里嗣淳
調査事務	
副所長兼庶務課課長	赤嶺正幸
庶務課主任	比嘉美佐子
〃 主事	西江幸枝

調査総括

調査課課長

盛本 勲

調査員

専門員

山本正昭

c 委嘱調査員

調査員として以下の方々を委嘱し調査を実施した。

沖縄国際大学総合文化学部助教授	吉浜忍	(平成15年度)
琉球大学法文学部教授	池田榮史	〃
城辺町教育委員会生涯学習課課長補佐	下地和宏	〃
平良市文化財保護審議委員会委員長	友利忠勇	〃

d 調査指導及び調査協力

久貝勝義	平良市総合博物館館長	
渡久山章	琉球大学教授	
仲宗根將二	宮古郷土史研究会会長	
平野長伴	宮古の自然と文化を考える会会長	
宮里光男	宮古南静園入所者自治会会長	
与那覇哲義	琉球大学農学部名誉教授	
岡本恵昭	祥雲寺住職	
小椋祐子	平良市総合博物館学芸員	
砂辺和正	平良市教育委員会社会教育課文化係係長	
和田卓也	〃	非常勤
宮城ゆりか	〃	
砂川智男	上野村教育委員会教育課主事	
川満邦弘	下地町教育委員会教育課社会教育係主事	
湧川絢子	伊良部町教育委員会社会教育課主事	
羽地直樹	多良間村教育委員会主事	
嘉手苺徹	沖縄県文化振興会公文書管理部 史料編纂室主任専門員	

e 聞き取り調査協力者

久貝愛子	宮古の自然と文化を考える会会員
久貝善誠	宮古の自然と文化を考える会会員
霧生藤吉郎	宮古島慰霊碑保存会会長
黒島定雄	宮古南静園入所者
与那覇次郎	宮古南静園入所者
下地玄鹿	宮古南静園入所者
久貝雅邦	上野村文化財保護審議委員会委員
下地清勇	城辺町字友利在住
砂川正昭	上野村字野原在住
与座勇吉	平良市久貝在住

現場調査として以下の方々のご協力をいただいた。

池間進也、下地常男、下地雅繁、平良恵典、立津義康、宮城秀政、饒平名淳也

資料整理の際、以下の方々のご協力をいただいた。

新垣ますみ、佐藤明美、宮城利恵子、奥古田愛

第2節. 調査経過

今回の分布調査は、1998年度（平成10）から開始された本事業のうち、宮古諸島地区6市町村を調査対象にしたものである。2003年度（平成15）に遺跡の分布状況やその範囲確認を行うため、表面踏査を主体に実測調査、聞き取り調査などを行い、2004年度（平成16）にその資料整理及び補足調査を実施した。年度ごとの概要は以下のとおりである。

—2003年度（平成15）—

戦争遺跡詳細分布調査要項に基づき、4人の調査員を委嘱し、1～2回の現地調査及び調査員会議を開催した。

これまで宮古諸島地区については、大系的な戦争遺跡数についての把握がなされていなかったことから、市町村教育委員会を經由して各自治体に戦争遺跡に関するアンケートを送付した。

それらの回答及び事前に当センターが把握していた遺跡情報をもとに、戦争遺跡の所在確認、遺構図作成、聞き取り調査を実施し、宮古諸島地区において約66カ所の戦争遺跡を確認することができた。

—2004年度（平成16）—

2003年度（平成15）の調査成果の資料整理を行った。特に聞き取り調査を実施した戦争遺跡については、その内容を各市町村教育委員会文化財担当課及び地域史担当者と共に現場確認を実施し、戦争遺跡の情報の補填を行った。特に必要な戦争遺跡についての遺構図測量を補足調査として実施した。

また、宮古諸島地区における戦争遺跡研究者と戦争遺跡の遺構の保存状況、希少価値、役割・歴史的背景などを議論し、本報告書の内容及び編集に反映させた。

第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

第1節. 地理的環境

本報告書における調査対象地域である宮古諸島地区とは、宮古郡に属する6市町村（平良市・下地町・上野村・城辺町・伊良部町・多良間村）を指すものである。ここでは戦争遺跡の分布状況を確認できる局で、主に宮古島・伊良部島・多良間島についての概要を述べることにする。

宮古島は沖縄本島那覇市の南西約290kmに位置する、周囲約130kmの規模を持つ宮古諸島最大の島であり、伊良部島・下地島・米間島・池間島・大神島に取り巻かれるように立地する。所属市町村として平良市・下地町・上野村・城辺町を有する。島の形はほぼ三角形で、隆起珊瑚礁の琉球石灰岩に覆われた概ね平坦な台地を呈し、最も高い地点で海拔115mとなっている。宮古島を構成している地層は、第三期中新世～第四期の島尻層群（泥岩、砂質泥岩、砂岩）と、それを不整合に覆う更新世中後期の琉球層群（基底礫岩、珊瑚石灰岩、砂質石灰岩、泥質石灰岩）からなる。土壌は琉球石灰岩を母材とする島尻マージのほか、一部にジャーガル・沖積土壌が見られ、弱アルカリ性かまたは中性で、石灰岩の破片が混入した石質粘土や、そのほか数種の粘土が広範囲に分布している（第52図）。平坦な土地であるため農耕地に適し、サトウキビや葉タバコの栽培を主とする農業が産業の中心である。また宮古島を印象付けるものとして、1985年（昭和60）から行われているトライアスロン大会の開催地としても知られている。

伊良部島は宮古島の西方約4kmに位置する周囲約26kmの島であり、宮古諸島では二番目に大きい。島の西隣には面積9.54km²の下地島を有し、伊良部町を形成している。地形は北西―南東方向に長軸を持つ楕円形状をなし、北東から南西にかけて緩やかに傾斜する低平な地形となっている。最も高い地点は南東端付近の断層崖状の牧山で海拔88.8mとなっており、北東海岸の急崖は、断層で形成されたものである。地質は第四紀更新世の琉球石灰岩で構成されており、河川は見られない。土壌は琉球石灰岩を母材とする島尻マージが中心となっている。島内の土地利用では農地が広い面積を占め、サトウキビや花卉栽培が見られる。漁業では佐良浜漁港を拠点とするカツオ漁が知られている。また交通面では宮古島との間に架橋計画がある。

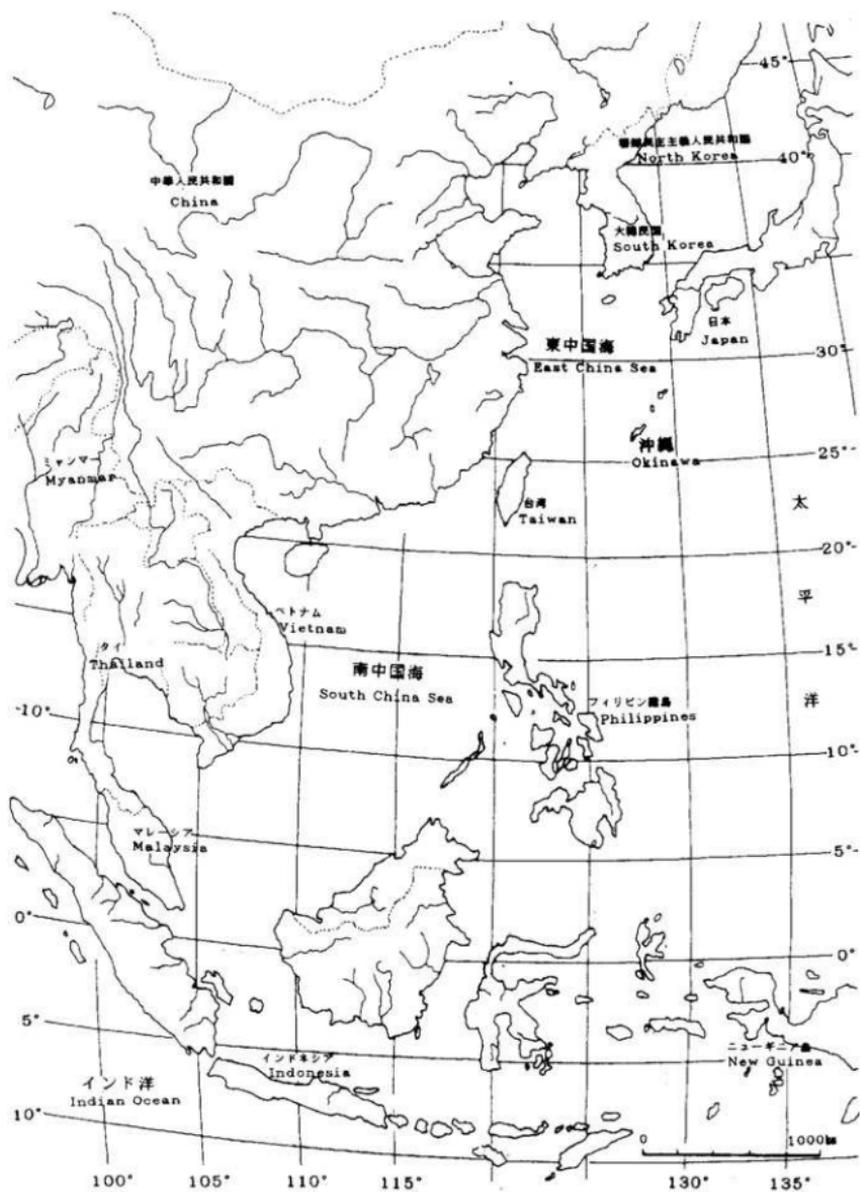
多良間島は宮古島の南西約67kmに位置する。周囲約20km、東西約8km、南北約6kmの楕円形状の島である。また多良間島の北約7.5kmには水納島を有し、多良間村を形成している。島全体は標高8～15mの平坦な地形を示し、最も高い地点で北側にある海拔34mの丘陵（八重山遠見台）である。島の地質は大部分が第四紀更新世の琉球石灰岩によって構成されており、河川は見られない。土壌は伊良部島同様島尻マージが中心となっている。島の北側に集落は立地され、土地利用では農地としてサトウキビ畑が大半を占め、島の南東と南西に牛の放牧場がある。

第1表 宮古諸島地区の人口・世帯数・面積

市町村名	人口(人)	世帯数(世帯)	面積(km ²)
平良市	34,041	13,395	64.95
下地町	3,198	1,126	23.66
城辺町	6,997	2,758	57.60
上野村	3,250	1,127	18.98
伊良部町	6,444	2,365	39.20
多良間村	1,370	584	21.91
宮古地区計	55,300	21,355	226.30

(注) 人口及び世帯数については、県企画開発部総計課「沖縄県人口移動報告書」による

(注) 面積については国土交通省国土地理院「平成15年全国都道府県市区町村別面積調」による



第1図 琉球列島の位置

第2節. 歴史的環境

この節では本調査地区である宮古諸島地区を、先史時代から現代に至るまでの歴史的環境について述べることにする。なお、戦時中の状況においては、第Ⅲ章で述べることにする。

宮古諸島は南西に位置する八重山諸島・与那国島を含むいわゆる先島諸島に属する。その歴史は先史時代において南琉球圏と呼ばれ、本土の縄文・弥生文化の影響を受けている北琉球圏（奄美・沖縄諸島）とは異なり、台湾や東南アジアなど南方諸地域に影響を受けている文化ではないかと考えられている。このため現研究段階において、南琉球圏の時期区分は仮の先島編年が用いられ、前期・後期に区分される。先島先史時代前期は約4000～2500年前、同後期は2500～1100年前とみなされている。宮古諸島の場合、前期の遺跡は多良間島に1カ所、後期は宮古島東部に4カ所確認されている。

宮古諸島が沖縄本島を中心とする北琉球圏との関係を持ち始めるのは、遺跡の出土遺物などにより12世紀頃だといわれているが、政治的に統一されていくのは14世紀末だとみなされている。当時沖縄本島では三山（南山・中山・北山）時代が形成されていたが、宮古島の統治者であった与那覇勢頭豊見親が1390年中山に初めて朝貢し、中山王の服属となる。それから約100年後の1500年に起こった八重山の豪族「オヤケ・アハチ」の討伐には、中山軍の従軍として当時の宮古の統治者であった仲宗根豊見親が加わり、討伐に成功する。仲宗根豊見親の時代には蔵元（王府時代の地方政庁）が開設されるが、しだいに整備・強化され、1879年（明治12）の廃藩置県までの間、島統治の中心として機能していくことになる。

1609年の薩摩侵攻による琉球支配から1879年（明治12）の廃藩置県までに亘る270年間は、琉球王国における近世期にあたる。宮古島においても1629年首里王府が二年交替の在番役人を常駐させ、従前の在在役人による間接統治から、三頭（大首里大屋子）を頂点とする直接統治へと変わっていった。薩摩藩は宮古島で検地をした結果、石高を定め、これに応じた年齢別に課される人頭税を徴求するようになり、1902年（明治35）に廃止されるまで適用された。また近世期には大津波・暴風雨や旱魃にたびたび襲われ、その直後の飢饉等、災害に関する記録が多く残されている。1771年に石垣島近海を震源とする地震の影響で、宮古・八重山諸島を襲ったいわゆる「明和の大津波」では、宮古諸島の12村（宮国・新里・砂川・友利・池間・前里・伊良部・仲地・佐和田・仲筋・塩川・水納）が波に押し流されるなどの被害を受け、2548人の死者を出している。

沖縄の近代は、琉球王国が廃され琉球藩を経て沖縄県となった1879年（明治12）に始まるとされる。沖縄県内では数度の行政区画の変更が行われるが、宮古島では同年に在番が廃止され、代わって沖縄県宮古島役所が設置された後、1896年（明治29）の沖縄県郡編成法による宮古郡の制定、1908年（明治41）の沖縄県及島嶼町村制施行で、近世以前からの行政単位であった間切（平良・下地・砂川）と島（多良間）が廃止され、宮古郡は平良・下地・城辺・伊良部の四村となる。5年後の1913年（大正2）には多良間島の三つの字が平良村から分村し、多良間村となる。1924年（大正13）には平良村が町制を施行する。

第二次世界大戦後の1947年（昭和22）には、平良町が市制施行。同年城辺町が町制施行。48年下地村から宮国・新里・野原の三字と嘉手苺の一部が分離、上野村となった。49年下地村が町制施行。82年には伊良部村が町制施行。現在の宮古郡の形となる。2002年（平成14）4月、6市町村合併を視野に宮古市町村合併協議会が発足、2005年（平成17）4月の合併に向けて準備が進められている。

第三章 宮古諸島地区の沖縄戦

沖縄戦といえば、一般的には沖縄本島を想起しがちだが、本島以外の島々にも地上戦闘戦はなかったものの、沖縄本島とは様相を異にする沖縄戦があった。即ち、体験者の数だけ違う沖縄戦があるように、地域には「地域の沖縄戦」があり、沖縄戦は多様な顔をもっている。

宮古諸島地区の沖縄戦は、米軍上陸の地上戦闘はなかったが、米軍の空襲や艦砲射撃は激しく、そのため被弾死する軍民は少なくない。それ以上に日本軍約3万人、住民約6万人が食糧難に陥り、栄養失調死やマラリア罹患死が被弾死より多い。さらに戦後の宮古諸島地区では軍民の収容所生活がなく、自活生活が続き、食糧難に拍車がかかる。とくに住民は餓死寸前の状態であった。

宮古諸島地区の戦争遺跡は保存良好なものが多い。とくに日本軍の陣地や施設などの構造物は多彩である。第32軍が沖縄本島で放棄した水際決戦作戦が宮古諸島地区ではとられたため、この作戦が概観できる戦争遺跡が多く残っている。

第1節 第32軍の編成と宮古作戦

1944年(昭和19)3月22日に創設された第32軍の首脳らは宮古諸島地区を視察した。その結果、平坦な地形が航空基地に最適であると判断し、既設の海軍飛行場の他に陸軍中飛行場と陸軍西飛行場の建設を命じた。早くも同年5月には第205飛行場大隊や要塞建築第8中隊が宮古島に派遣され、飛行場建設に着手した。さらに先島守備隊として、独立混成第45旅団(当初主力は宮古、一部は八重山に配置されたが8月に八重山に移動)、第28師団、独立混成第59旅団、独立混成第60旅団、騎兵第28連隊、野戦重砲第1連隊第1大隊、戦車第27連隊第3中隊などの陸軍部隊が夏までに続々と配置された。また、海軍飛行場防衛と海軍砲台建設のために海軍警備隊も配置された。

1945年(昭和20)になると、陸軍は①型特攻艇の海上挺進第4戦隊、海軍も特攻艇部隊の震洋第41戦隊が配置された。宮古には約3万人の将兵のひしめきあい、住民は飛行場や陣地建設の徴用・食糧の供出・家屋の提供などを強いられるようになった。

宮古の日本軍は水際決戦作戦をとった。即ち敵上陸地点に兵力を集中し、一挙に敵を壊滅させる作戦であった。仮に敵の上陸を許したならば、野原岳周辺の複郭陣地において持久作戦を展開することも計画していた。そのためには敵上陸地点を地形上から判断して、平良港、下村宮国～嘉手苧、白川湾の三方面と予想し、それぞれの地点に水際陣地・水上特攻基地・海軍砲台などを構築し、兵力を集中配備した。

このことを第32軍首脳の下で策定された「宮古島防禦作戦大綱」(以下「作戦大綱」と略)から具体的に紹介する。「作戦大綱」の「方針」では、東地区・中地区・南地区・北地区の4地区と海軍地区の防衛担当を区分し、重点を北地区と南地区においた〔「宮古島地区防禦配備図」(第3図)〕。また、「方針」には、「有力部隊ヲ以テ水際ヲ堅固ニ占領シ努メテ水際ニ敵ヲ撃滅ス」と記されている通り、水際決戦が作戦の主眼ではあるが、「努メテ」の表現でも分かるように、もし敵に上陸を許したならば「主陣地ヨリスル挺身斬込戦闘ニヨリ敵戦力ヲ漸減シ」、そして「周到準備セラレタル主陣地帯ニ誘致シ敵ニ殲滅的攻撃ヲ与ヘテ破潰ス」としている。さらに敵が主陣地を占領したならば「複郭の陣地ニ拠リ最後ノ一兵ニ至ル迄敢闘」して「敵ヲシテ飛行場ノ利用及ビ設置ヲ妨害ス」と記されている。敵上陸後はまさに沖縄本島で展開された戦略持久作戦そのものである。「作戦大綱」には、各地区部隊に対して、「方針」を具体化した戦術・戦闘方法である「戦闘指導要領」も示している。

こうした「作戦大綱」を頭にいれて宮古諸島地区の戦争遺跡を見ると、戦争遺跡それぞれの軍事的意味がよく分かる。

第2節 宮古諸島地区の沖縄戦の展開

1944年(昭和19)10月10日、米軍艦載機が宮古島を空襲した。いわゆる「十・十空襲」は南西諸島全域が空襲された。宮古島も例外ではなかった。飛行場と港に停泊していた船舶や大神島の民家(死者3人)が被害にあった。10月13日にも小規模の空襲があった。翌年の1945年(昭和20)には、1月3日、1月9日、1月11日、1月13日、1月22日、1月23日、2月6日、2月23日、3月1日、3月6日、3月9日、3月12日、と断続的に空襲された。米軍上陸必至の状況となるや、先島守備隊は戦闘司令部を野原岳に構築、軍事物資を秘匿するための地下陣地の構築が加速した。住民の疎開(本土へ900人・台湾へ8,000人が疎開、その他に伊良部島などへの郡内疎開もあった)や防空壕(避難壕)づくりも本格化した。学校にある御真影などを秘匿する壕も構築され、いよいよ軍官民あげての戦闘体制となり、沖縄戦前夜をむかえた。

3月23日、米軍艦載機の空襲が始まった。以後連日の空襲であった。空襲は飛行場・港湾・軍事施設だけでなく、平良町外にも及ぶようになり、住民の犠牲も続出した。5月4日、英太平洋艦隊による艦砲射撃が島を振るわせた。第32軍が首里を放棄し南部に撤退した5月30日、先島守備隊は第32軍の指揮下から第10方面軍(台湾軍)の直轄となった。6月に入ると、敵の上陸企図は明瞭だと判断して、伊良部島に配置してあった独立混成第59旅団主力を宮古島に移動させた。6月の空襲は連日続いたが、7月になると空襲は少なくなった。

沖縄戦が終結した情報が入ると、先島守備隊は「宮古島軍民自活態勢確立策」をたて、食糧生産・確保のため軍民あげて自活強化に取り組んだ。この頃、小動物が地上からすべて消えたといわれるように飢えが蔓延した。栄養失調やマラリアも蔓延した。軍紀は緩み、住民と軍の食糧問題をめぐるトラブルも耐えなかった。

8月23日、納見敏郎中将(師団長)らが嘉手納の米軍司令部で停戦協定に調印。25日、先島の部隊に対して戦闘行為停止命令が出され、翌26日、米軍海兵隊が宮古島に進駐し、宮古島測候所(現・宮古島地方気象台)広場で武装解除、集められた武器は海中投棄され、重火器などは爆破された。31日、野原岳戦闘指令所において軍旗が奉焼された。9月7日、嘉手納の米軍第10軍司令部前広場において、陸軍を代表して納見中将が参加し、降伏調印書に署名した。BC戦犯に指名された納見中将は12月11日、自決。宮古で戦死した将兵は2,569人、その殆どが戦病死であった。戦死者の数もさきながら戦死率も沖縄本島に比べて低い。戦死原因も被弾死は少ない。

将兵の復員は10月20日から始まり、翌年の1946年(昭和21)1月に一応終了した。復員数は23,931人であった。復員兵を乗せた船は狩俣に建設された仮棧橋から出航し、宮古島をあとにした。

第3節 宮古諸島地区の沖縄戦の特徴

宮古諸島地区の沖縄戦は沖縄本島とはその様相が違う。以下、3点にしぼってその特徴を紹介する。

第一点は、沖縄本島の約8分の1の面積にしかすぎない宮古島に約3万人の将兵がいたことである。兵備の密度は沖縄本島の中南部に匹敵するほど高い。しかも第32軍指揮下の殆どの兵種の部隊が配備されていた。その理由は、第32軍が米軍の宮古島上陸を想定していたことにある。事実、米軍の沖縄侵攻作戦計画であるアイスバーグ作戦では、第三段階での宮古島占領(第一段階は沖縄本島占領、第二段階は伊江島占領)を計画していたが、実際は第一段階・第二段階を実施したのみで第三段階の展開はなかった。従って3万人の将兵がほぼ無傷のまま残された。

第二点は、住民の戦死者3,000余人だが、数と戦死率は沖縄本島よりかなり低いということである。しかし、数が少ないといっても戦争によって尊い命を奪われたことは確かである。しかもその殆どが栄養失調死・マラリア罹患死である。空襲や艦砲射撃の恐怖に荷え、死と隣合わせの日々であったことも沖縄本島と変わらない。地上戦闘の恐怖はなかったものの、飢えという恐怖に襲われた。戦争が終わっても、住民を収容する難民収容所がなく、米軍からの食糧の配給もない状況において、飢えは加速し、栄養失調死やマラリア罹患死は増加した。

第三点は宮古諸島地区に配備された日本軍の戦後の有り様である。沖縄本島では戦場で捕虜となり、捕虜収容所に収容されることが一般的だが、宮古諸島地区では組織的に武装解除して降伏している。さらに、復員するまで、慰霊塔の建立、戦後の政治・軍事情報や所在部隊の動向を内容とした情報誌の発行、という沖縄本島ではみられない日本軍の戦後があった。



第3図 宮古島地区防禦配備図 (先島群島作戦 宮古篇より一部改変)

第Ⅳ章 各市町村における戦争遺跡

平良市

各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態	各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
1	那底の地下壕	平良市	下里	不明	人工壕	9	二重越の地下壕群	平良市	東仲宗根	障地壕	人工壕
2	大浜の特攻艇秘匿壕群	平良市	久貝	秘匿壕	人工壕	10	宮原の地下壕群	平良市	宮原	障地壕	人工壕
3	トゥリバー浜特攻艇秘匿壕群	平良市	久貝	秘匿壕	人工壕・自然壕	11	ピンフ嶺野戦重火器砲壕・トーチカ	平良市	西里	障地壕	人工壕
4	バイナゴマビーチの機関銃壕	平良市	下里	機関銃壕	人工壕	12	大原の障地壕	平良市	西里	障地壕	人工壕
5	久松の機関銃壕	平良市	久松	機関銃壕	人工壕	13	白原井の地下壕	平良市	東仲宗根	避難壕	人工壕
6	荷川取海岸秘匿壕群・ウブドゥーリヤ特攻艇秘匿壕群	平良市	荷川取	秘匿壕	人工壕	14	ヌーザランミ特攻艇秘匿壕	平良市	狩俣	秘匿壕	人工壕
7	盛加越の海岸通信壕	平良市	東仲宗根	通信壕	人工壕	15	宮古南静園の避難壕	平良市	島尻	避難壕	自然壕
8	海軍第313設置隊の地下壕群	平良市	東仲宗根	障地壕	人工壕	16	宮古南静園の重火器砲壕	平良市	島尻	重火器砲	人工壕

下地町

各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態	各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
1	チフサブ	下地町	来間	避難壕	自然壕	3	東御殿のタコ壺と銃座	下地町	来間	タコ壺・銃座	建造物
2	来間の山砲障地壕	下地町	来間	山砲壕	人工壕	4	ツヌジ御殿の忠魂碑	下地町	洲津	記念碑等	建造物

上野村

各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態	各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
1	旧日本陸軍中飛行場戦闘指揮所	上野村	野原	戦闘指揮所	建造物	7	野原岳北側発電施設	上野村	野原	発電機壕	人工壕
2	野原岳頂上の電波探知機壕	上野村	野原(自衛隊基地内)	電波探知機壕	人工壕	8	御真影奉護壕	上野村	野原	奉護壕	人工壕
3	タキグスバルの地下壕群	上野村	野原	障地壕	人工壕	9	トゥクルアブ	上野村	宮国	避難壕	自然壕
4	ツガオーの地下壕群	上野村	野原	障地壕	人工壕	10	タカシカバの機関銃壕	上野村	宮国	機関銃壕	人工壕
5	大嶽城跡公園西側の壕群・トーチカ	上野村	野原	障地壕・人工壕・構築物	人工壕	11	新里の機関銃壕	上野村	新里	機関銃壕	人工壕
6	大嶽城跡公園東側壕群	上野村	野原	障地壕	人工壕						

城辺町

各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態	各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
1	ウブアブ	城辺町	友利	避難壕	自然壕	14	イサガヌアブ	城辺町	比嘉	避難壕	自然壕
2	ピンダッドック	城辺町	友利	避難壕	自然壕	15	自然壕	城辺町	友利	避難壕	人工壕
3	キィキヤガー	城辺町	友利	避難壕	自然壕	16	アーリヤマの戦争遺跡群	城辺町	長山	障地壕・トーチカ	建造物
4	カーラ	城辺町	友利	避難壕	自然壕	17	自然壕	城辺町	ムイコシ	避難壕	自然壕
5	アブチャー	城辺町	友利	避難壕	自然壕	18	吉野海岸の壕	城辺町	吉野	壕	人工壕
6	東保茶根の戦争遺跡群	城辺町	友利	秘匿壕・砲台	人工壕・その他	19	兵隊壕	城辺町	吉野	障地壕	自然壕
7	フカスタブ	城辺町	保良	避難壕	自然壕	20	クスヌトツソミヤ	城辺町	砂川	その他	自然壕
8	チビビニアブ	城辺町	保良	避難壕	自然壕	21	砲台	城辺町	長北	砲台	人工壕
9	キヤマ壕	城辺町	保良	避難壕	自然壕	22	ミルク嶺の地下壕群	城辺町	西里添	障地壕	人工壕
10	ナナカサブ	城辺町	保良	避難壕	自然壕	23	兵隊壕	城辺町	福中	障地壕	建造物
11	下里派の野戦重火器秘匿壕	城辺町	下里派	秘匿壕	人工壕	24	福里公園の忠魂碑	城辺町	福里	記念碑等	建造物
12	ムムクローヤ	城辺町	下里派	避難壕	自然壕	25	ウンヌヤ	城辺町	皆福	避難壕	自然壕
13	インヌチアブ	城辺町	比嘉	避難壕	自然壕	26	グンガマヤ	城辺町	ムイコシ	避難壕	自然壕

伊良部町

各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態	各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
1	伊良部の忠魂碑	伊良部町	伊良部	記念碑等	建造物	4	カンギダツ壕・カヤフヤ壕	伊良部町	下地島	秘匿壕	自然壕
2	国仲の避難壕	伊良部町	国仲	避難壕	人工壕	5	牧山障地壕	伊良部町	佐良浜	障地壕	人工壕
3	佐良浜の避難壕	伊良部町	佐良浜	避難壕	人工壕						

多良間村

各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態	各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
1	シュガー・ウスヌカー	多良間村	塩川	避難壕	自然壕	3	ヤマトビイトウトンバラ	多良間村	仲岳	避難壕	自然壕
2	塩川御殿のトンバラ	多良間村	塩川	避難壕	自然壕	4	アマガー	多良間村	仲岳	御真影奉護壕	自然壕

第2表 宮古諸島地区の戦争遺跡表

※トーンは本報告書掲載戦争遺跡

第 1 節. 平良市

1. 那底の地下壕

所在地：平良市下里

形態：人工壕

種別：不明

現状：残存状況は良好。

保存状況：飲食店の敷地内に放置。

築造者：不明

築造年月日：1944年（昭和19）頃

戦時中の使用状況：陣地壕か

遺構：壕



概要

字下里と字西里の境にある飲食店の裏手に小尾根が残り、その基部に壕口が見られる。この小尾根は野原岳から続く尾根の北端にあたる。出入口は南北に2ヶ所あり、内部でコの字状に繋がる。南側の出入口は産廃物によって半分以上埋まり、西へ13.7m進むと北へ折れる。更に北へ9.5m進むと東へ折れ、東に9.5m進むと北側の出入口へ至る。北側の出入口周辺は湿地帯となっている。南北の出入口は壁、天井は粗く削られているが、壕の奥の方は壁が丁寧に削られている。床は戦後に流れ込んだと思われる土砂が堆積している。

当該壕がどのような目的で設置されたのか、今回の調査では明らかにならなかったが、すぐ南側にある鏡原小学校裏手の丘陵には多くの壕が設置されていたことから、これら一連の壕群であった可能性が高い。戦後、すぐ東側を走る県道78号線が拡張された際に尾根そのものが削られ、また削られた石灰岩は工事資材として利用されている。当該壕から南に延びる尾根の基部の踏査を行ったが、戦後の盛土や採石によって、戦前の状況を把握するには至らなかった。かつて大浜に駐屯した陸軍海上挺進基地第30大隊が1945年（昭和20）、この周辺に移動しており、それに伴う壕の可能性が指摘できる。因みに陸軍海上挺進基地第30大隊は、約700名の福岡・長崎県出身者から構成されていた。



遠景（南東から）



壕内部

2. 大浜の特攻艇秘匿壕群

所在地：平良市久貝

立地（標高）：3m

形態：人工壕

種別：秘匿壕

現状：一部、開口部が埋没

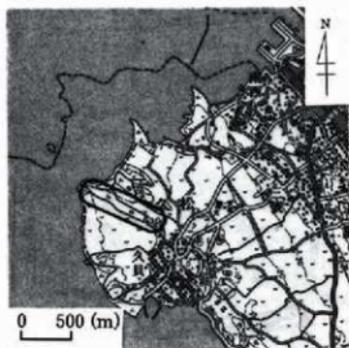
保存状況：大浜脇に放置

築造者：海上挺進基地第30大隊

築造年月日：1945年（昭和20）頃

戦時中の使用状況：特攻艇の秘匿壕として
利用

主な遺構：壕、レール跡



概要

トゥリパー浜の東側には現在、久貝地区の漁港があるが、その西側に特攻艇秘匿壕の開口部が19カ所、確認されている。全て石灰岩を掘り込んでおり、自然壕を可能な限り利用しているものや、人工的に掘り込まれたものなど千差万別である。現在は産業廃棄物や土砂の流入等で入口が覆われ、開口部が殆ど埋没しているものも見られるため、実際はより多くの秘匿壕がこの場所につくられていた可能性が高い。

殆どの壕の開口部は北東側に向き、内部は平面形が一直線状となるもの、「コ」や「H」、「ム」状となるものが見られる。内部の加工は粗く、床面は海側に向かって緩やかに傾斜している。壕口は幅2.5～3mで高さは2～3mとなる。一部、特攻艇を積載した台車のレールを設置した際の敷石が残る（第5図）。

またこれら秘匿壕が設置される丘陵の南東側、現在の久松集落近くに人為的に掘り込んだ横穴や竪穴を多数確認することができた。これらは先の秘匿壕とは規模や構造を異にしていることから避難壕と考えられる。また自然壕もこの周辺には多く見られる。

沖縄戦時には海上挺進基地第30大隊の特攻艇が当該壕に秘匿される予定であったが、奄美近海で全滅されたため使用されずに終戦を迎えている。



遠景（北西から）



壕口（北から）

現在は漁港拡張の際に護岸が構築され、周辺は埋め立て地となっている。壕口周辺は現在、荒地となっているが、漁港拡張前は東側へと海水が入り込む小さい入り江となっていた。よって、かつては壕口の近くまで海水が迫っており、格納している特攻艇はすぐに出撃できるようになっていた。

近年、伊良部架橋に伴う道路建設によって、海側の2カ所が消滅する計画が持ち上がっている。



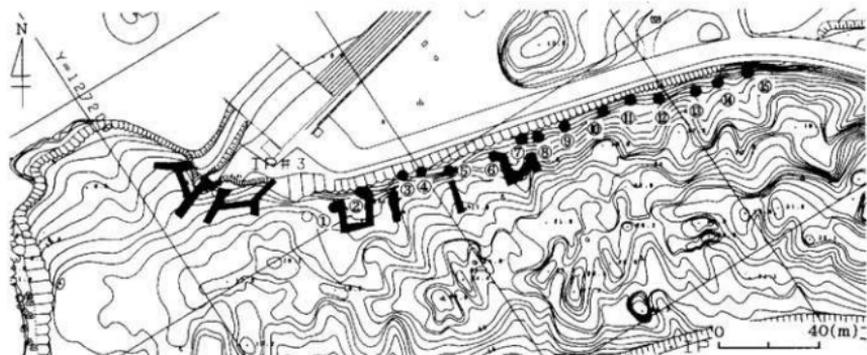
壕⑤



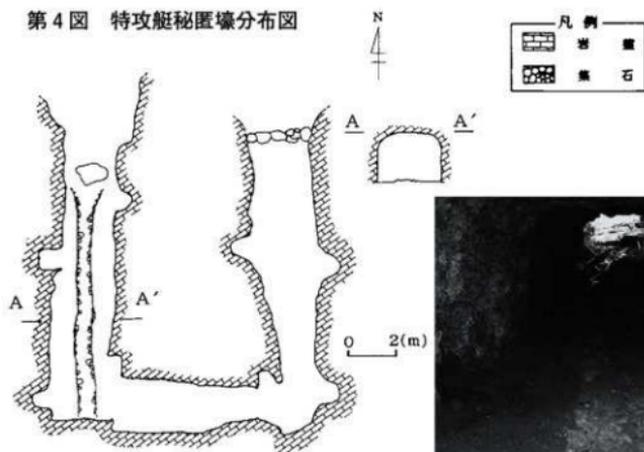
壕⑦



避難壕



第4図 特攻艇秘匿壕分布図



第5図 壕①②平面図及び断面図



壕①②内レール痕



壕①



壕④

3. トゥリバー浜特攻艇秘匿壕群

所在地：平良市久貝

立地（標高）：1～3m

形態：人工壕、自然壕

種別：秘匿壕

現状：残存状況は良好。

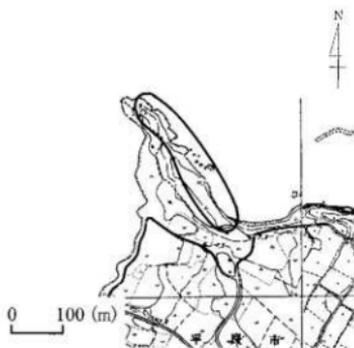
保存状況：トゥリバー浜臨に放置

築造者：旧日本海軍沿岸警備隊

築造年月日：1945年（昭和20）頃

戦時中の使用状況：特攻艇の秘匿壕として
利用

主な遺構：壕



概要

トゥリバー浜の東側にある小半島：通称スキラ崎、の東側の付け根から岬の先端近くまで19カ所確認されている。付近一帯は平良港コースタル・リゾート計画の一環で埋め立て造成中であり、旧状は失われつつある。

これらの壕は石灰岩に刻まれた海蝕洞のように見えるが、内部は広く、奥行が20m近く掘り込まれているものも見られる。連続して壕を配置させてその数は15ヶ所に及ぶ。中には海蝕洞を利用したものも見られるが、それらの大半は石灰岩を削って奥行を深くしている。壕口は殆ど海に迫っており、壕間の連絡は干潮時に限られる。床は平坦に削平され、海側に向かって緩やかに傾斜しているのが見て取れる。全ての壕が東、あるいは北東方向に開口している。現在は産業廃棄物が入口を覆い、開口部は半分近く埋没しているものも見られるが、残存状況は極めて良い壕も見られる。一方で、現在埋め立てが行われているため、岬の付け根辺りでは壕の掘削が進行しているため、入口が殆ど埋没しかかっている状況が見られる。

かつてこの場所に秘匿した水上特攻艇は別名「人間魚雷」と呼ばれ、米軍上陸予定地に配備されていた。夜間、上陸用舟艇・敵艦艇に隊員と共に体当たり攻撃するという戦争末期に旧日本軍が開発した兵器である。ペニア板の全長5m、排水量1.4トン、乗員1人で艇首に250kg爆弾を装備している。また最高

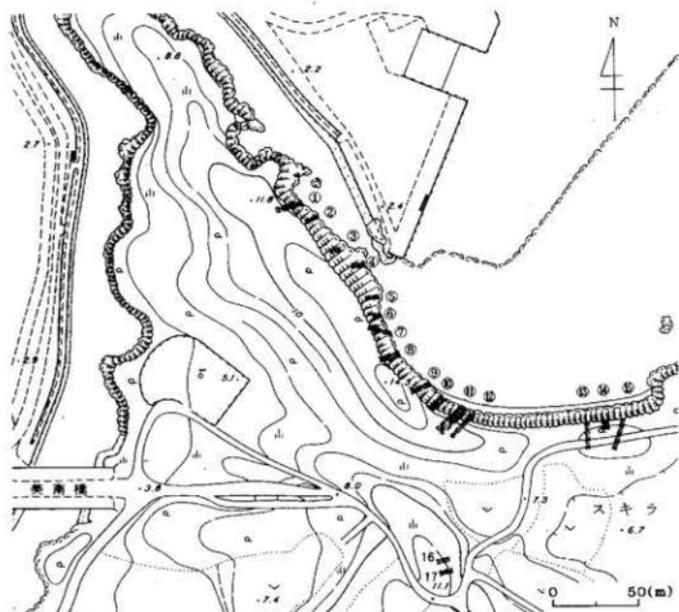


遠景（北から）

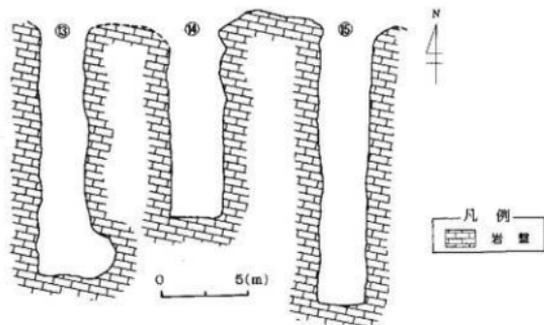


壕①内部

時速23ノットができるように設計されている。乗員は皆16、7歳の若者で出撃時には人力で海上まで運び出された。終戦直前には当該地において海上挺進基地第30戦隊が配備される予定であった。



第6図 特攻艇秘匿壕分布図



第7図 壕⑬⑭⑮平面図

4. パイナガマビーチの機関銃壕

所在地：平良市下里

立地（標高）：1m

形態：人工壕

種別：機関銃壕

現状：残存状況は良好。

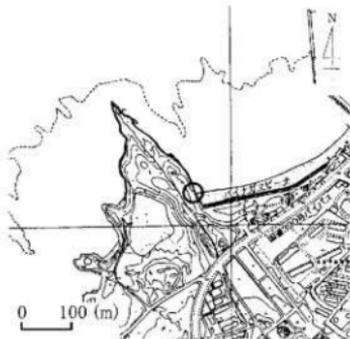
保存状況：パイナガマビーチ脇に放置

築造者：旧日本海軍沿岸警備隊

築造年月日：1945年（昭和20）頃

戦時中の使用状況：陣地壕として利用

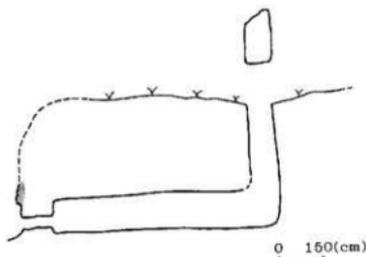
主な遺構：壕、銃眼



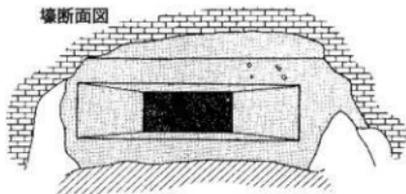
概要

パイナガマビーチの東側には海側に突出した小半島：長崎半島があり、その西側付け根あたり、砂浜が途切れる部分に所在する。セメントで固められた銃眼を1カ所、確認することができる。銃眼の大きさは縦15cm、横40cmで石灰岩塊内部を削り貫いて坑道をつくり、銃眼の部分のみセメントで構築されている。銃眼の奥行は2mと長く、坑道は上部に開口部が見られる。壕入口は0.8×1.3mの不定形で、坑道は4.1mの縦穴と7.6mの横穴から成る。坑道の壁面には階段等が見られないため、内部へは梯子を使って出入りしていたものと想定される。内部は狭く、一人が通過できる程度の広さである。満潮時には銃眼下まで海水が来る。

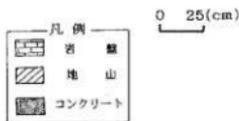
平良港とその周辺は米軍上陸予想地点とされた地域であり、海岸線には水際障害物を設置、水際撃滅戦用の防衛線が敷かれていた。東側にはトゥリバー浜の特攻艇秘匿壕が近接しており、更に東側には大浜の特攻艇秘匿壕が見られる。おそらく当該壕は、パイナガマビーチに上陸してくる米軍を迎え撃つための施設として構築されたものと考えられる。この機関銃壕と関連して近くに砲台2基が設置されていたが、戦後、撤去されて現在はその痕跡



壕断面図



銃眼立面図



第8図 壕断面図及び銃眼立面図

を窺うことはできない。

戦時中の平良港一帯は海面に機雷や水中障害物が設置され、当該壕周辺のように上陸するのに適した浜の際には、水際陣地が構築された。主に速射砲、迫撃砲、機関砲などの重火器を配置し、敵上陸の際には沿岸砲台や内陸からの支援火力を得て一気に水際で壊滅させる計画であった。



遠景 (北から)



銃眼



第9図 機関銃壕・パイナガマビーチ周辺地形図

5. 久松の機関銃壕

所在地：平良市久松

立地（標高）：2～3m

形態：人工壕

種別：機関銃壕

現状：周辺は埋め立てが進む

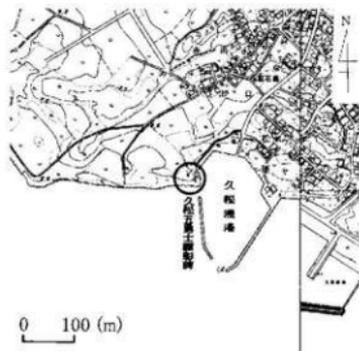
保存状況：内部は一部崩れるが、残存状況は良好。

築造者：旧日本海軍沿岸警備隊

築造年月日：1944年（昭和19）頃

戦時中の使用状況：周辺沿岸警備か

主な遺構：壕、銃眼、コンクリート壁



概要

久松五勇士を称える記念碑の西側は芝生が貼られた緩斜面となっており、その下方に機関銃壕が南北に2基設置されている。

南側の壕は入口部分は現在は雑木等で埋まっているが、1×0.5mの岩盤を粗く削り出して造っているのが窺える。入口は狭いが内部へ入ると広く、岩盤を粗く削っている。壕の内部には現在も当時のガラス瓶等が散乱している。銃眼は西側と南側の2ヶ所に配置され、一つはコンクリートで壁、天井を頭丈に覆い、うつ伏せになって機関銃が撃てるように、コンクリート造りの台が銃眼近くに設置されている。現在、外側は埋没しているが銃眼は西向き、則ち海側を向いている。もう一つは南側に銃眼が向き、先と同様に周囲をコンクリートで覆う。異なる点は爆風除けと思われる高さ1.5m、幅1m、厚さ15cmのコンクリートの壁が銃眼の手前に配されている。更に北西方向へ壕は続いていく。崩落が著しかったため奥へ進入することはできなかったが、殆ど人為的に手を加えた痕跡はなく、自然壕を利用していることが窺えた。北側の壕は壕口部分が破壊されており、大きく西側へ口を開ける。床面が流土で埋まっており、天井



遠景（北西から）



壕口

近くまで達していることから内部へ進入することができなかった。但し、内部を外側から窺う限り自然壕を利用していることが確認された。

この機関銃壕の西側はかつての海岸線であり、現在は周辺の埋め立てが進められているため、当時の面影は見られない。バイナガマビーチに見られる機関銃壕と規模や構造が類似していることから、機能を同じくした施設と解することができる。大浜からバイナガマビーチ、そして平良港においては海軍沿岸警備隊が1944年（昭和19）から翌45年にかけてトーチカや砲台、特攻艇の秘匿壕を構築しており、当該壕もこれらと連携する形で配置されていたものと想定される。この機関銃壕は聞き取り調査の中で確認された遺跡で今回、初めて報告するものである。



内部



北側壕口

6. 荷川取海岸秘匿壕群・ウブドウマーリヤ 特攻艇秘匿壕群

所在地：平良市荷川取

立地（標高）：0～10m

形態：人工壕

種別：秘匿壕

現状：残存状況は良好。

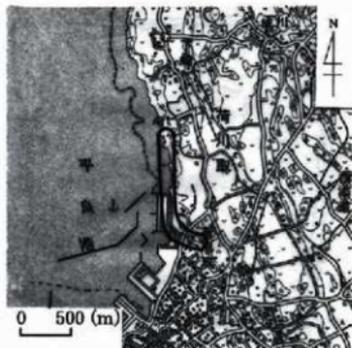
保存状況：埋め立て工事並びに道路設置によって破壊を受ける。一部は林内並びに沖縄電力第二発電所敷地内に放置。

築造者：海上挺進基地30大隊

築造年月日：1944年（昭和19）頃

戦時中の使用状況：特攻艇の秘匿壕として利用

主な遺構：壕の掘削痕



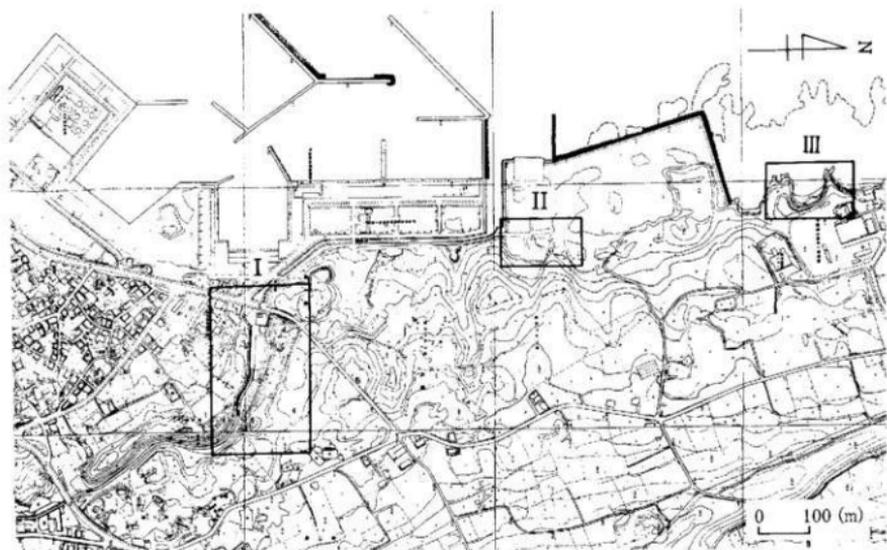
概要

荷川取漁港東側の谷部から荷川取海岸にかけて特攻艇の秘匿壕が現在も残る。谷部に掘られた壕は北側斜面に9ヶ所、南側斜面に7ヶ所と計16ヶ所確認することができた。内部は平均幅3m内外で天井や壁面を粗く削り込んでいる。一部、北側に「く」や「コ」の字状となるものがあるが、殆どが直線状に掘られている。それらの壕が向かい合う中央は谷底状となっている。かつては雨水が流れ込んで小川となり荷川取海岸へ流れ込んでいたことから、特攻艇を秘匿し、迅速に出撃するのに適した地形となっていた。最大規模を有する壕でも奥行25mとあまり規模が大きくないことから、この周辺の壕はあくまで特攻艇を格納するのが主な目的であったと思われる。戦後は各地が養鰻場となり、後に埋め立てられ、現在は一部、荷川取公園として市民の憩いの場となっている。

この谷地から北へ約600mの海岸にも特攻艇の秘匿壕が見られる。現在は海岸埋め立てのために地形改変が著しいが、現在も壕が2ヶ所残る。入口は崩落が激しく、産廃物で殆ど埋まっている状態である。内部は壁、天井が粗く削られており、規模は先の谷部の壕と大差無い。聞き取りによると、埋め立て以前は周辺は砂浜が広がっており、先の2壕の北側に巨大な壕が残っていた。近年の道路工事による掘削によって跡形もなく消滅したとのことであった。

そして、現在の沖縄電力第二発電所敷地に面した沿岸部にも8ヶ所の壕が残る。海蝕洞を利用したと思われる壕もある一方で、大規模に掘り込まれた壕も見られる。最も規模の大きい壕では奥行約31m、幅3.1、高さ2.1mを測り、海側に向かって緩やかに床面が傾斜する。また入口近くには特攻艇を積載した台車を前後させたと思われる、床面を凹状に加工したレール跡が6.3m程の長さで残っている。潮が満潮の際には壕内部にまで海水が入る。

これら荷川取海岸周辺に見られる壕は現在、上記の3ヶ所で見ることができる。かつてはこの沿岸部に多くの壕が残っていたとの聞き取りが得られ、戦後の海岸埋め立てによって破壊、若しくは埋没したとのことである。荷川取沿岸に掘られたこれらの特攻艇秘匿壕は旧日本陸軍船舶隊、及び海上挺進基地第30大隊



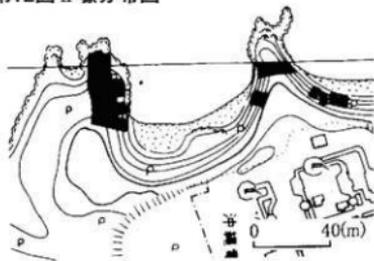
第10図 荷川取ウブドゥマーリヤ特攻艇秘匿壕周辺図



第11図 I 壕分布図



第12図 II 壕分布図



第13図 III 壕分布図

が造営したとされ、平良港方面に米軍が上陸することを想定していたのは勿論のこと、対岸の伊良部島には一個旅団が守備することから、米軍による正面攻撃される恐れがないという特攻艇を秘匿する上での地理的優位性を有していた。構築の際には当初、火薬を使用して掘削を行っていたが、火薬が底を尽きると人力で十字鍬や円匙を使用して掘り込んだとされている。構築後は、今井好房大尉が指揮する第二中隊がこの場所に陣地を構築している。

これらの壕には①型特攻艇が配備され、有事に備えて出撃する予定であったとされる。②型特攻艇は全長1.8m、高さ1m、長さ5.6mで、荷川取にある個々の秘匿壕の何れにも十分格納することができる。壕は一部、掘削途中のものも見られることから、未完成で放置された壕がいくつかあったものと考えられる。聞き取りによると、荷川取海岸周辺には47隻の舟艇を秘匿、待機していたとのことである。



第14図 壕平面図



遠景（東から）



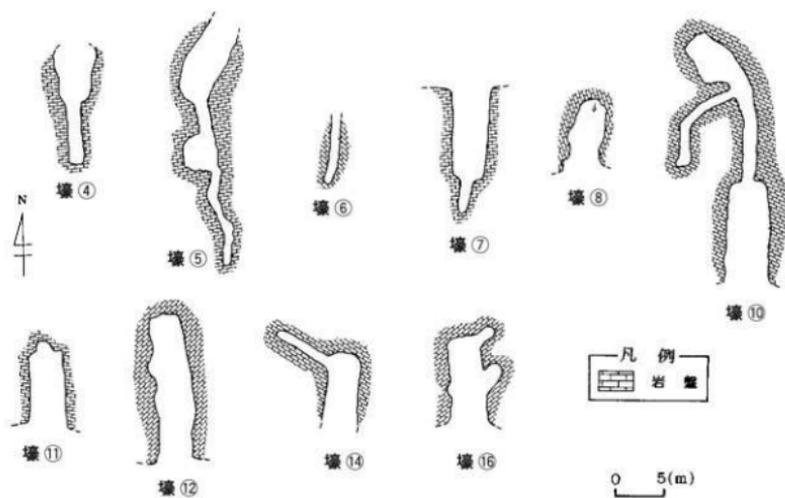
壕①



壕②



壕③



第15图 坑平面图



坑 5 内部



坑 12



坑 15



坑 17

7. 盛加越の海軍通信隊壕

所在地：平良市東仲宗根

立地（標高）：18m

形態：人工壕

種別：通信隊壕

現状：残存状況は良好。

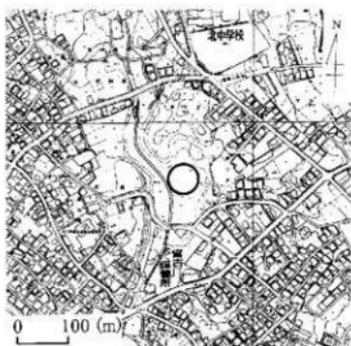
保存状況：盛加越公園内に現地保存

築造者：旧日本軍海軍通信隊

築造年月日：1945年（昭和20）頃

戦時中の使用状況：戦時中に通信隊の壕として利用

主な遺構：壕、コンクリート造りの部屋、
コンクリート造りの排気孔



概要

現在の東仲宗根小字テラフグにある盛加越公園内に、コンクリート造りの煙突が3本立っている場所がある。地表面では1.5mの高さを有し、幅0.9mの孔が内部へと繋がっている。その場所にはかつての海軍通信隊の地下壕があり、先の煙突は排気孔として利用されていた。内部は東西方向に造られており、全面コンクリート造りで、4畳半～6畳程の部屋を3つ繋げた構造となっていた。また出入口は左右に2カ所、設けられていた。現在は公園整備時に唯一、内部へ出入りすることができた排気孔が塞がれて、僅かに埋没しかかった開口部から中を窺うにすぎない。

この周辺は公園整備前、古墓が多数分布する谷地形を呈していた。1995年（平成7）の1月に盛加越公園設置に伴う周辺の試掘調査が平良市教育委員会によって実施され、艦砲弾の破片と思われる遺物が確認されている。当初、この壕は盛加越公園設置計画では取り壊す予定であったが、平良市文化財保護審議委員会による保存要請により、内部を閉鎖する形で公園内に現地保存がなされるに至った。

当時、この壕内においてはモールス信号の受信や飛行機の離発着に必要な気象状況の観測等が行われていた。なお、この壕の東側にある市立北中学校や南東側の宮古病院周辺には、相当数の兵舎が設置されていた。



遠景（南から）



排気孔

8. 海軍第313設営隊の地下壕群

所在地：平良市東仲宗根

立地（標高）：25～45m

形態：人工壕

種別：陣地壕

現状：一部崩落が見られるが概ね残存状況は良好。

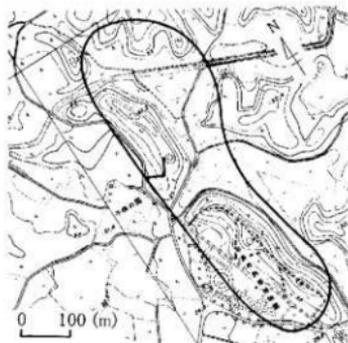
保存状況：平良市植物園並びに宮古少年自然の家敷地内に保存。

築造者：旧日本海軍第313設営隊

築造年月日：1944年（昭和19）10月頃

戦時中の使用状況：海軍第313設営隊の陣地壕

主な遺構：壕、塹壕

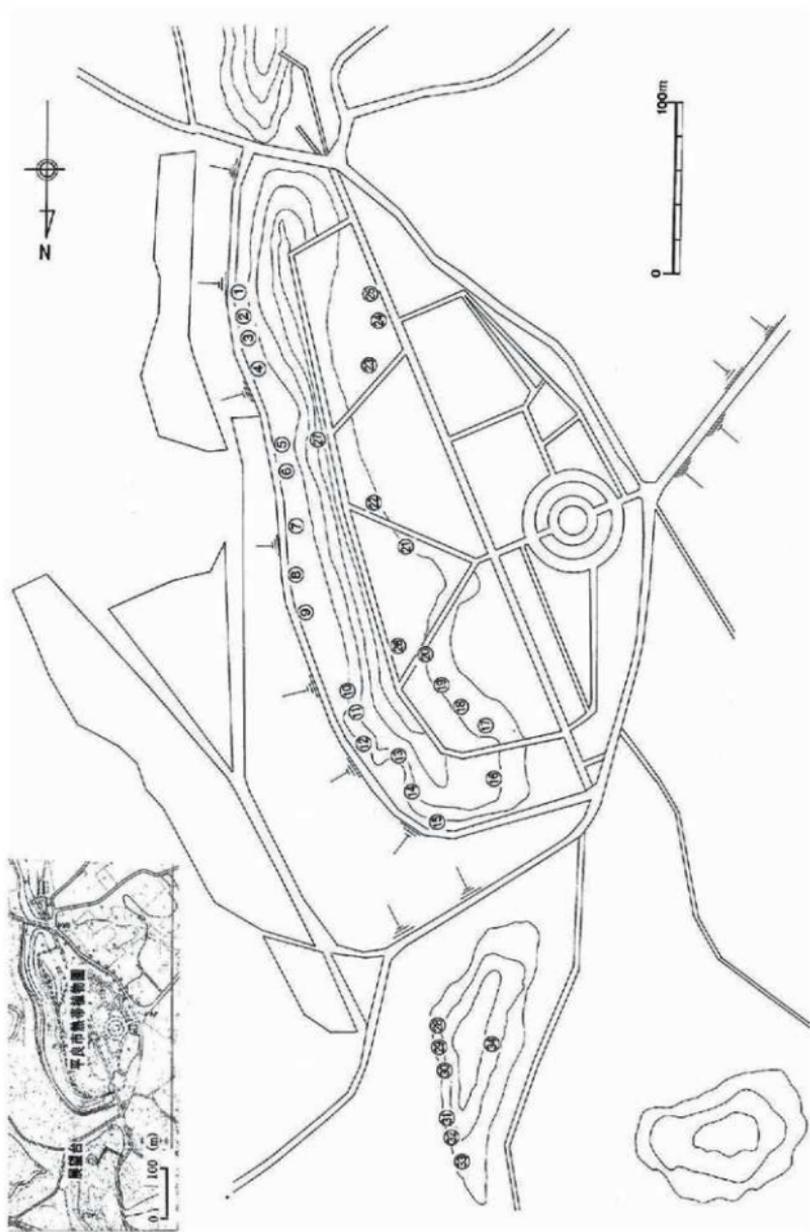


概要

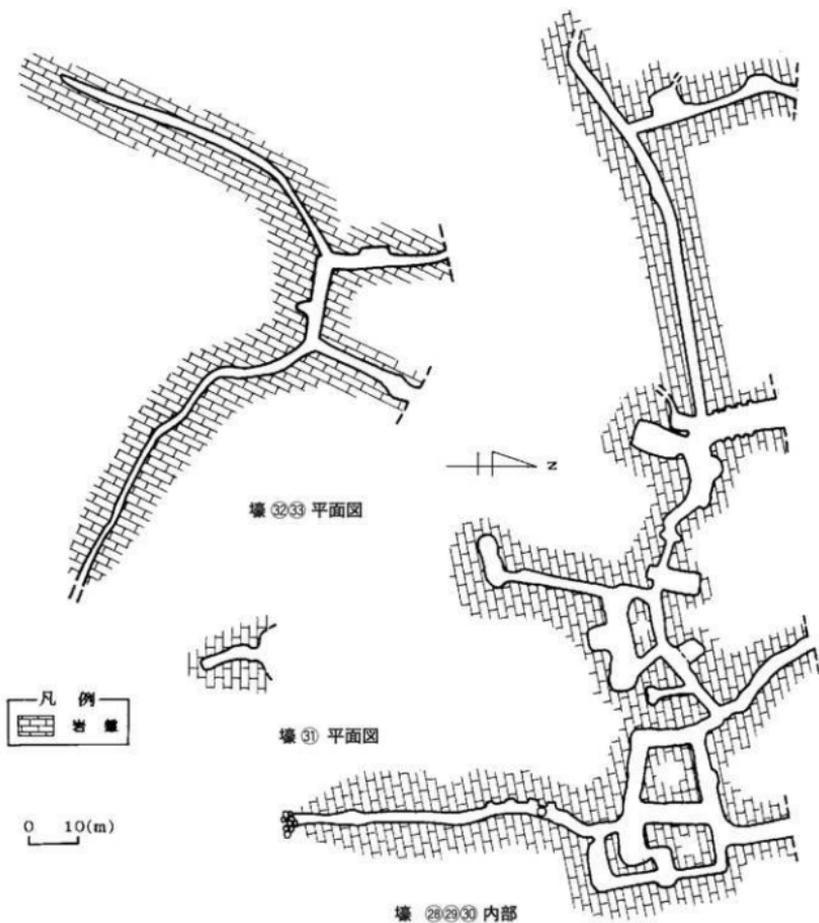
平良市植物園の北側、東西方向に連なる丘陵の麓に34カ所の壕口が見られる。その西隣、宮古少年自然の家敷地内にある低丘陵にも6カ所の壕口が見られ、広範囲にわたって多数の壕が設置されている。これらの壕は全て石灰岩を掘削して構築しており、Ⅰ：入口から一直線に掘り込まれているもの、Ⅱ：内部が分岐しており、出入口が数カ所あるもの、Ⅲ：内部が複雑に分岐し、小部屋が設置されるものと分類することができる。

Ⅰは壕⑤、⑬、⑮、⑰、⑲が比定される。左右にやや折れる壕が多く見られ、概ね長さは長いもので30m、短いものでは7mと幅がある。Ⅱは壕②、③、④、⑤、⑥、⑦、⑧、⑨が比定される。とくに②、③、④、⑤は4つの壕口を有しており、当該壕軍の中で唯一、丘陵を東西に貫通して掘っている。壕の幅は最大で約7m、高さは約2.5mとかなりの規模を有している。他の壕は壕口が2つ、幅は最大でも2m前後と規模的には小さい。Ⅲは大規模なものが多く、③、④、⑨、⑪、⑫、⑬、⑲、⑳、㉑、㉒、㉓が比定される。当該壕群の中でも最大規模とされる⑲、㉑、㉒は総延長約500mを有しており、床に枕木を嵌めた痕が残る発電室や、空気孔を有する小部屋といった空間が5カ所見られる。これらの空気孔の1つと考えられる孔が頂上にある展望台のすぐ下に見ることができる。通路には当時、使用したと思われるガラス瓶が散乱している場所も見られ、麻袋の型が付いたコンクリート塊も散乱しているのが確認された。壕口近くには部材を詰め込んだと思われる蛇腹状の痕跡が壁に見られ、内部の壁、天井は丁寧に削り出されている。また壁を棚状に掘り込んだ部分も見られる。小部屋を有する壕は概ね内部を丁寧に削り込んでおり、部屋は通路片側を掘り込んで削り出すものと、通路を分岐させてその奥に部屋を設置するものが見られる。この壕は更に南側へ続くが、途中で落盤しているために最奥部は確認できなかった。宮古島においてこれほどの規模に匹敵する壕は無く、且つ埋没している部分も見られるため、更に規模が広がる可能性がある。聞き取り調査においても、この壕に関する詳細な情報を得ることができなかった。⑩、⑫、⑬は天井、壁の崩落が著しいが、壕の原形を良好に保っている。主となる通路から分岐して小部屋を設置しているのが特徴的である。

海軍第313設営隊（以下、設営隊）は1944年（昭和19）10月に、宮古島内において軍事作戦に係る陣地を構

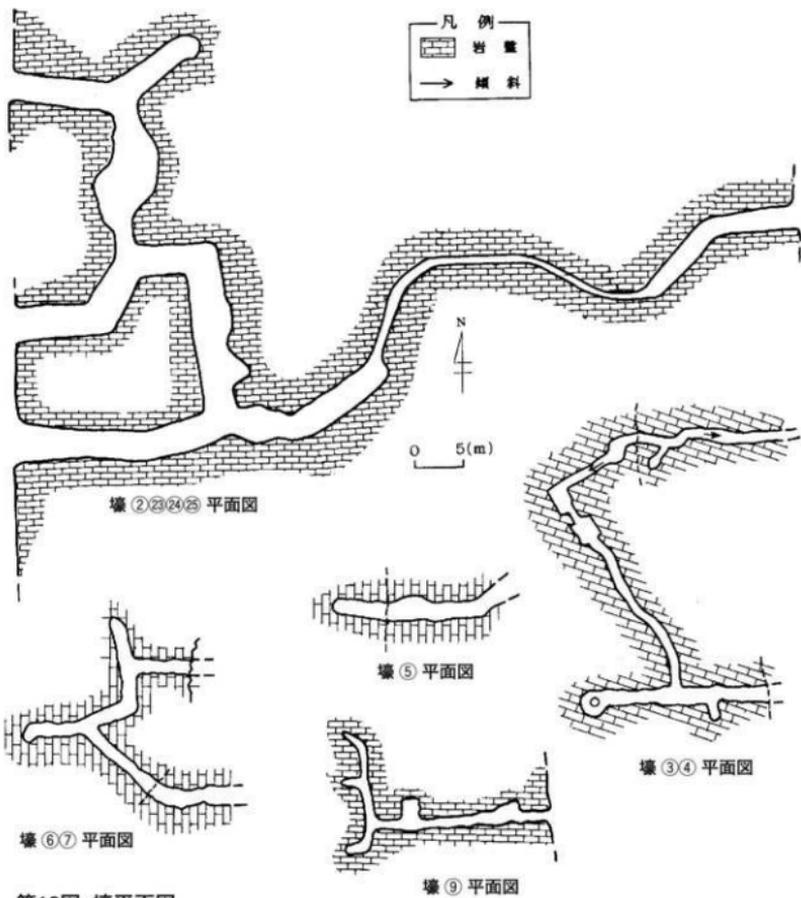


第16図 旧日本海軍第313設営隊壕配置図



第17図 壕平面図

築している。その際に大野山林にあるこの独立丘陵の地下に当該壕群は構築された。当時、設営隊は火柴並びにコンプレッサーを旧日本陸軍が壕構築の際に供与していることから、当該壕群構築の際にもこれらを使用して構築したと考えられる。陣地構築を担当したのは設営隊の中でも大下海軍技術少尉が統括する第2中隊第1小隊であり、壕構築の専門集団であったことから、当該壕群の中に規模の大きいものが見られ、且つ内部が複雑に造られている壕が多く見られるのも首肯されるところである。



第18图 坑平面图



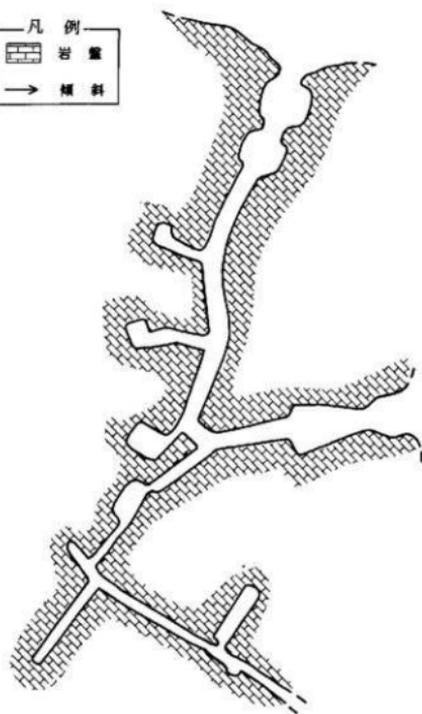
空气孔



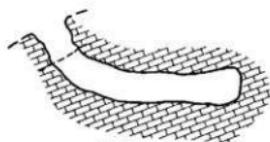
坑口埋没状况



坑 ⑬ 内部



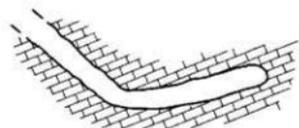
壕 ①②③ 平面图



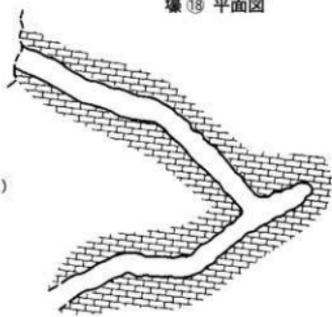
壕 ⑮ 平面图



壕 ⑯ 平面图



壕 ⑱ 平面图



壕 ㉑㉒ 平面图

0 5(m)

第19图 壕平面图



壕 ② ③ ④ ⑤ 内部



壕 ⑨



壕 ⑥

9. 二重越の地下壕群

所在地：平良市東仲宗根

立地（標高）：30～45m

形態：人工壕

種別：陣地壕

現状：一部崩落が見られるが概ね残存状況は良好。

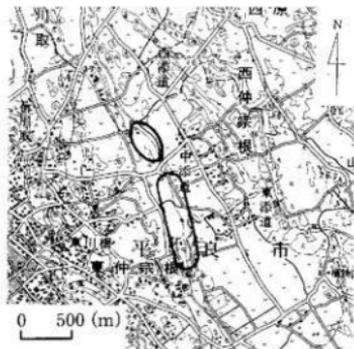
保存状況：周辺は林野となる

築造者：海軍沿岸警備隊・北台湾航空隊

築造年月日：1944年（昭和19）頃

戦時中の使用状況：陣地壕として利用

主な遺構：壕、石積み



概要

東仲宗根小字二重越にある崖周辺に点在している。その範囲は農業センターからNHKテレビ電波塔辺りまで点在しており、明らかに人工的に掘られた壕は10カ所確認することができた。奥行5m程の小規模なものもあれば、最も規模の大きいもので幅3m、高さ2.5m、5つの壕口を結ぶものがある。

最大規模の壕は平良市民球場の裏手に所在している（第20図）。東西軸の壕が5つ平行して掘り、その間に1、2本の連結道を設置している。入口付近には小部屋が見られる。一部崩落している部分も見られるが全体的に残存状況は良好である。

また、この北側にも2つの壕口を結ぶ同規模の壕が見られるが、内部の崩落が著しい。なお、規模の大きい壕は天井、壁面が丁寧に削り出されている。

現在のNHKテレビ電波塔下辺りにも2つの壕口を結ぶ、平面形がコの字型となる壕が見られる。奥には小部屋を一つ見ることができる。

この崖面一帯には古墓が造られており、それを壕として利用した痕跡も見ることができる。墓室の壁面を加工して小部屋を設けていたり、内部に葉莢や薬瓶、ビール瓶、缶詰が散乱している壕も多く見られた。これらの古墓は平良町民の避難壕として利用されており、現在は殆どが空墓となっている。

二重越の崖面には古墓を合わせて35カ所、壕を確認することができた。これらは主に①奥行きが無い小規模な壕、②複数の壕口を結ぶ大規模な壕、③古墓を利用した壕と3種類に大別することができる。

かつてこの周辺には海軍沿岸警備隊・北台湾海軍航空隊が陣地を敷いており、それらの陣地壕と考えられる。戦没将兵を祀る豊旗の塔～平良市民球場周辺の崖下には北台湾海軍航空隊が、その北側には海軍沿岸警備隊が陣地を敷いており、大規模な壕は前者の陣地壕に比定することができる。聞き取り調査では、二重越崖上にある浄水場近くに砲台が設置されていたとある。因みに北台湾海軍航空隊の宮古島における活動は航空電波管制であったとされる。



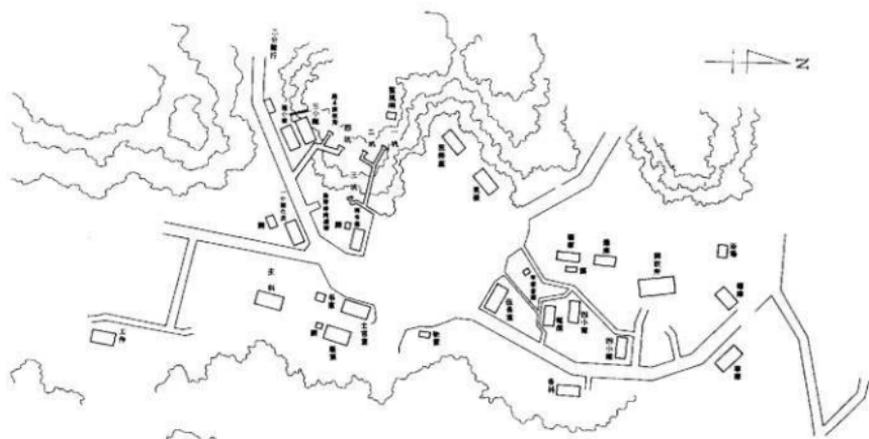
第20図 壕平面図



遠景 (南東から)



壕内部



第21図 戦争中の二重越周辺状況（霧生桐吉郎資料を再トレース）



古墓利用の避難壕入口



古墓利用の避難壕内部

10. 宮原の地下壕群

所在地：平良市宮原

立地（標高）：50m

形態：人工壕

種別：陣地壕か

現状：一部崩落が見られる。

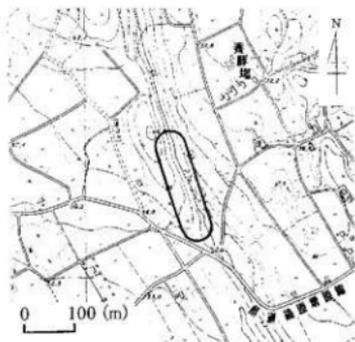
保存状況：周辺は宅地、採掘場となる。

築造者：旧日本軍

築造年月日：1944年（昭和19）頃

戦時中の使用状況：山砲を配置

主な遺構：壕



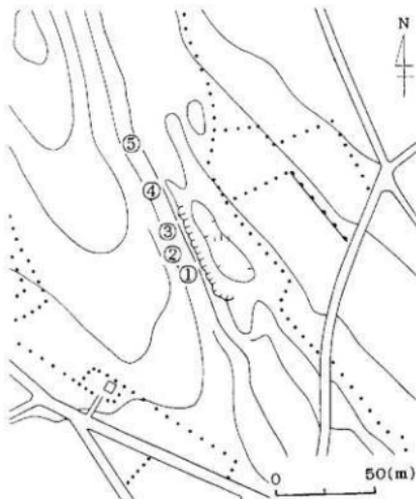
概要

今回、新たに確認された戦争遺跡。現在の宮原集落の西側、野原越集落との境界にあたる段丘崖に掘り込まれた人工壕。崖は北西—南東方向に約700m延びており、その北端は完全に切り崩されている。壕の東側は石灰岩の採掘場と産業廃棄物の捨て場となっており、西側は宅地になっていることから旧地形が失われつつある。

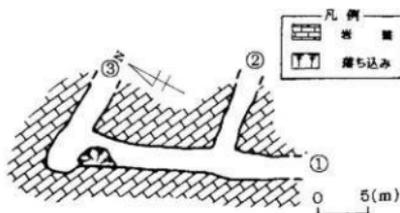
確認した壕口は5カ所であり、うち3カ所は内部で繋がる。最も大規模な壕では高さ3m近く、幅は2mであり、壕口周辺の崩落は著しい。内部は天井、壁を粗く削りだしているが、場所によって丁寧に削られている部分も見られる。壕口のすぐ外側は落ち込みが見られ、昇降は困難となっている。おそらく戦後の地形変化が行われていることが考えられる。

前述の壕のすぐ北側に壕口を2カ所で見ることができ、何れも奥行は5m内外と浅く、天井、壁の成形は粗い。壕口は共に高さ、幅が2m内外であり内部も狭い。内部は一部崩落が見られる。

『宮古島地区防衛配備図』（第3図）には宮原と野原越の中間辺りに75耗山砲陣地の印が見られることから、当該壕がこれに相当するものと指摘される。



第22図 壕配置図



第23図 壕①②③平面図



遠景（南から）



壕口①



壕口①、②、③内部

11. ピンフ嶺野戦重火器砲壕・トーチカ

所在地：平良市西原

立地（標高）：80m

形態：人工壕

種別：陣地壕

現状：一部、崩落が見られるが残存状況は良好。

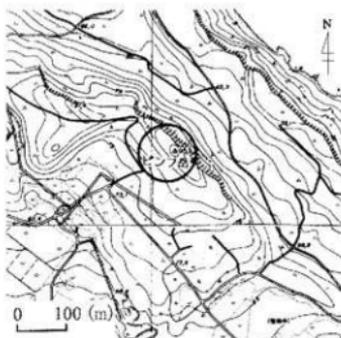
保存状況：ピンフ嶺の直下に放置。荒地に放置。

築造者：海上挺身隊第4戦隊

築造年月日：1944年（昭和19）頃

戦時中の使用状況：陣地壕として利用

主な遺構：トーチカ、壕、階段、竪穴



概要

宮古島では野原岳に次ぐ最高地点であるピンフ嶺（標高96m）の中腹に、南北約50mの地下壕が石灰岩を掘り込んでつくられている。入口の幅は約3mで高さ2.4m、床は平坦で壁や天井にはツルハシ等の工具痕が見られ、整形は粗い。天井はドーム状に掘り込まれており、内部は屈曲しながらピンフ嶺北側へ出る。途中、東西に分岐する小部屋が4カ所見ることができ、何れも奥行は2～3m程である。北側開口部はコンクリートで壁や天井は補強されており、重火器を配置するのに容易な形態となっている。外側は登坂不可能な石灰岩の急崖となっている。北側開口部から内部へ少し入ったところに西側へ分岐する通路がある。コンクリート造りの階段が17段設置されており、着弾地等を確認するための窓へ通じる。聞き取りからこの壕にはキャタピラの付属した重火器砲が出入りしていたとある。

この壕の直上、ピンフ嶺ファームポンドの南側にトーチカが上下に2基残る。共に直径約1mの円筒型を呈し、銃眼が2つ、出入口が1カ所見られる、コンクリート造りの構築



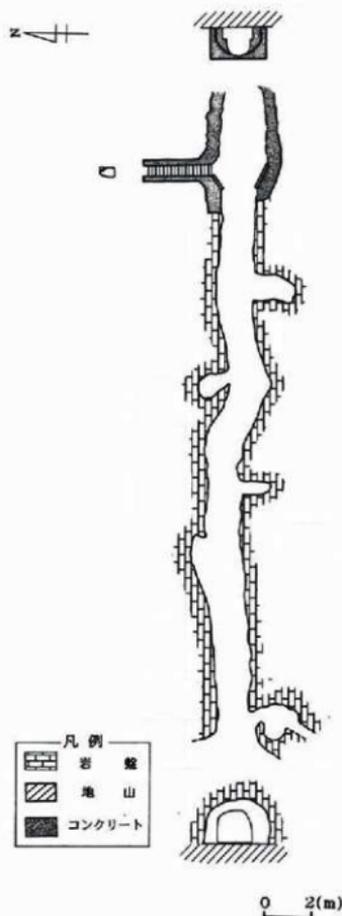
ピンフ嶺遠景（南西から）



野戦重火器砲壕内部の階段

物である。内部は狭く、一人一人が入れる程度の広さである。下側のものは現在、下草に埋もれており、単独で配置される。上側のものは石灰岩塊の頂上部に配置されており、トーチカに至る石段やその北側には直径約1mの竪穴等の付属施設が見られる。更に北側はファームボンド設置の際に地形が改変され、旧状を窺うことはできない。

かつてピンフ嶺の北東側に見られる海岸一帯を米軍上陸予想地点とされていたことから、この嶺に急遽、陣地が構えられた。韓半島から強制連行されてきた軍夫や、近隣の福山集落在住の少年達がこの陣地壕掘りに駆り出されている。軍夫達は朝夕に「アリラン」を歌っていたことから、当該壕近くの泉を「アリランガー」と呼称していた。



東側トーチカの銃眼と入口



西側トーチカの銃眼と入口



トーチカ背後の竪穴

第24図 野戦重火器砲壕平面図

12. 大原の陣地壕

所在地：平良市西里

立地（標高）：20～25m

形態：人工壕

種別：陣地壕

現状：残存状況は良好。

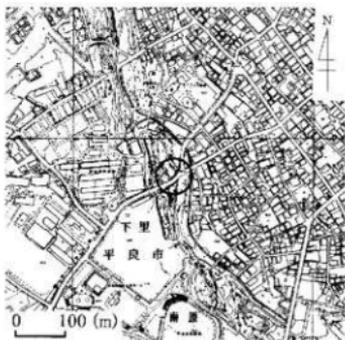
保存状況：県道192線の切り通しに口を開けている。

築造者：近隣住民

築造年月日：1944年（昭和19）頃

戦時中の使用状況：避難壕として利用

主な遺構：壕



概要

県立宮古農林高等学校東側の丘陵を横断する形で県道192号線平良久松港線が通っているが、その両側切り通し面に壕の口をそれぞれ見て取ることができる。かつて県道が整備される以前は幅の狭い丘越えの道であったようで、その途中で戦時中、旧日本軍が陣地を構築したと云われている。

開口部は南東方向へ掘り込まれる壕と、北西方向へ掘り込まれる壕の2カ所確認することができ、何れも現在は産業廃棄物の放置によって荒れている。南東側は埋没しており最も奥部は確認することができなかったが、途中で東側に折れている。壕の幅は約1.8mで高さは約1.3mを測る。北西側は約12m程掘り込まれており、奥は古墓の墓室に至る。途中で東側に方向を変えており、平面形はL字状となる。側壁には杭木の痕跡と思われる窪みが6カ所認められる。壕の幅は約2mで高さは約1.3mを測る。因みにこの壕の所在する丘陵一帯は古墓が点在しており、南西側にかつて兵舎が設置されていた。

現在、周辺は住宅街となっているが、かつては鬱蒼とした森が広がっていた。この陣地壕が分布する低丘陵を「サザラビザ」「サザランミ」と地元では称している。



遠景



壕内部

13. 白原井の地下壕

所在地：平良市東仲宗根

立地（標高）：30m

形態：人工壕

種別：避難壕

現状：残存状況は良好。

保存状況：白原川の井戸近くに放置。

築造者：平良町住民

築造年月日：1944年（昭和19）頃

戦時中の使用状況：平良町民の避難壕

主な遺構：壕、石積み

概要

東添道集落の東側に広がる畑の中に白原井（シラバリガー）と呼ばれる井戸があり、その脇に壕が掘り込まれている。井戸は降り井で周囲を土留めの石積みで囲う。この石積みを一部穿って壕がつくられる。壕口は1m四方と狭く、約7m程進むと内部は広くなる。入口のみ丁寧に掘り込んでおり、内部には灯り取りが壁に見ることができる。奥の方は自然壕をそのまま利用しており、2つの広い空間が見られる。壁には高さ1m弱の石積みを壁に沿うようにして立ち上げている。更に奥へ進むと別の壕口へ出るが、現在は産廃物で塞がれており出入りはできない。この壕口の脇には自然壕の口が見えるが崩落が著しく、内部の確認を行うことはできなかった。

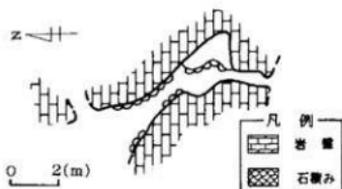
白原井は明治年間に日本本土から来た井戸掘り職人によって造営され、戦時中は平良町民の避難場所となった。この周辺は空襲の際に避難してくる町民が多いたようで、当該壕は平良町内の空襲が激しくなる1944年（昭和19）10月以降に構築されたと考えられる。



壕口



壕内部 石積遺構



第25図 白原井の地下壕平面図

14. ヌーザランミ特攻艇秘匿壕

所在地：平良市狩俣

形態：人工壕

立地（標高）：15m

種別：秘匿壕

現状：残存状況はかなり良好であるが塹壕は農道によって一部破壊される。

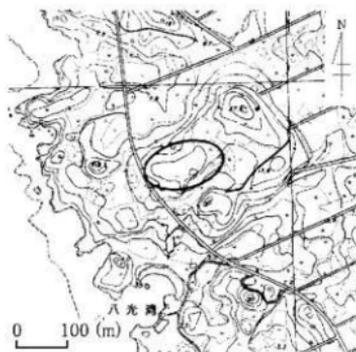
保存状況：林野内に放置。

築造者：旧日本海軍第2中隊第1小隊第1及び第2分隊、震洋隊特攻隊員、狩俣・島尻地区の勤皇隊隊員

築造年月日：1945年（昭和20）1月28日～4月末

戦時中の使用状況：震洋隊の特攻艇を秘匿。

主な遺構：壕、塹壕



概要

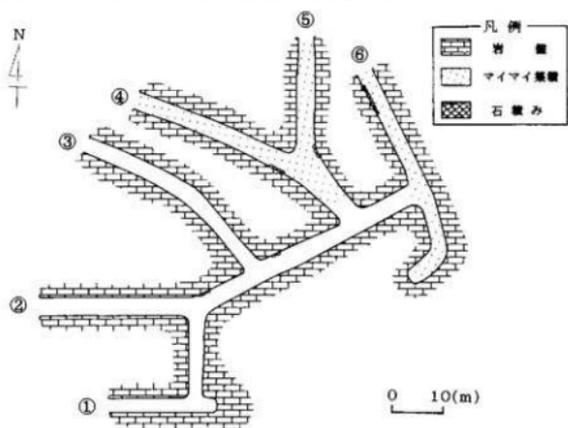
宮古島の北、狩俣集落の西側の海岸近くにヌーザランミと呼ばれる小丘陵があり、その地下に壕が掘られている。入口は現在、雑木で覆われており進入するのが困難であるが、壕口は6ヶ所見られ、内部で全て繋がっている（第27図）。壕口は北側に4、西側に2つ向いている。どの壕口も規模は幅3.5m、高さ2.5mと一定しており、天井はドーム状となる。また西側の壕口外側は特攻艇を出し入れするために、壕口と同じ幅のU字溝が10m程掘り込まれている。全ての壕は直線構造となっており、蛇行せず屈折して内部で繋がっている。直線の長さは平均して20mでほぼ同じ幅、高さで奥へ続く。壕の総延長は300m近くで規模はかなり大きい。天井は一部崩落している部分も見られるが、殆ど崩れは見られない。壕口から隣接する八光湾までレールが付設されていたようでレールは常時、擬装されており、レールの上には特攻艇を積んだ台車が常備されていた。有事の際には、台車ごと手押しで当該壕から八光湾（第26図）まで運搬し出撃する計画であった。壕口から20m程一直線状の塹壕が残っており、天井は草木等で擬装していた。格納されていた特攻艇は41隻で壕内には電灯が設置されていた。また壕構築時にはコンプレッサー、削岩機、火薬を使用して岩盤を掘削したということであり、壁や天井は現在のように岩盤が剥き出しの状態ではなく、木組みがなされていた。因みに当該壕に格納しきれない特攻艇もあったようで、それらは周辺のアドン林内に秘匿していたとのことである。

かつて旧日本海軍は米軍上陸を想定して、この地点に第41震洋隊（八木部隊）を配置させた。八木部隊は約180名で構成されており、1945年（昭和20）2月29日に平良港へ入港している。

この壕の近くには兵士が詰めていた仮小屋や発電室、製塩所、見張台、地下燃料庫などが配置されていた。またそれら以外の土地で芋、タバコを栽培していた。現在は壕以外、痕跡を窺うことができない。戦後は蝸牛の養殖場として一部、利用されていたようで、北側壕口周辺に貝殻が大量に散乱している。



第26図 ニューザランミ特攻艇秘匿壕周辺地形図



第27図 ニューザランミ特攻艇秘匿壕平面図



壕口①



壕口③



壕内部



壕口⑤



壕口⑥

15. 宮古南静園の避難壕

所在地：平良市島尻

立地（標高）：10m

形態：自然壕

種別：避難壕か

現状：壁、天井部分に一部崩落が見られる。

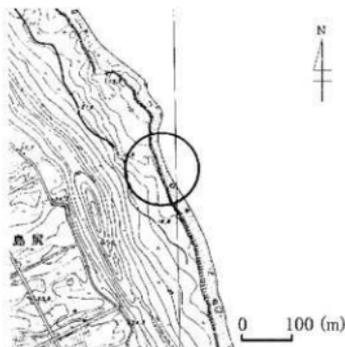
保存状況：海岸沿いの急崖に口を開けている。

築造者：宮古南静園入所者

築造年月日：1945年（昭和20）4月頃

戦時中の使用状況：宮古南静園入所者の避難壕

主な遺構：石敷き、灯り取り跡



概要

現在の宮古南静園北側海岸沿いに自然壕がいくつか見られる。それらの最も大きいものは「ヌスドゥガマ」と呼ばれ、かつての海賊がこの自然壕を住処として各地を荒らしていたという伝承を有している。1945年（昭和20）3月に宮古南静園の入所者は、園裏手の松林内にあった避難壕を旧日本軍に強制立ち退きさせられ、この地の自然壕に移ってきた。移った以前は風葬墓として利用されていたようで、人骨が納められていたのを当時の入所者が確認している。干潮時以外は宮古南静園に至る海岸沿いの浜は水没し、陸の孤島となる。1945年（昭和20）4～8月までの約4ヶ月間、殆どこの壕と周辺で生活していた。その理由はこの壕が旧日本軍に見つかるとまた強制退去させられるからであると云われている。壕の入口は幅約10m、高さ2.2mで奥行は約34mを測る。現在は壕口が大きく開いているが、戦時中においては、入口部分はアダン等で偽装し、内部を見通せないようにしていた。また入口近くに扁平な石を敷き、その上に板を置いて更にその上に莫産を敷いて居間になっていた。加えて居間の近くに小屋を一枚建てていた。現在も石が敷かれた状態で現地に残る。この石敷きの奥には地表面を掘り込んだ部分が見られる。かつてそこで炊事を行っていたという。更に奥はそのまま自然壕



ヌスドゥガマ遠景



ヌスドゥガマ内部

として続いており、壁面に燭台と思われる柵状の加工が見られる。

この「ヌスドゥガマ」から北へ約100mの地点に炊事場として利用した塚が現在も残る。規模はそれ程大きくなく、崖面にある岩の裂け目にできた塚である。奥は狭くなりながら上方へ抜けていると云われており、炊事の際に煙突代わりになったとされている。更に北側にも避難塚が1つあったと云われているが今回は確認することができなかった。



ヌスドゥガマ入口近くの石敷



ヌスドゥガマ内に散乱する木片



調理場跡

16. 宮古南静園の重火器砲壕

所在地：平良市島尻

立地（標高）：4m

形態：人工壕

種別：重火器砲壕

現状：残存状況は良好

保存状況：海岸沿いの急崖に口を開けている。

築造者：旧日本軍

築造年月日：1944年（昭和19）頃

戦時中の使用状況：機関銃壕として利用。

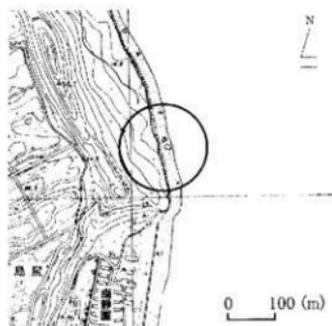
主な遺構：壕

概要

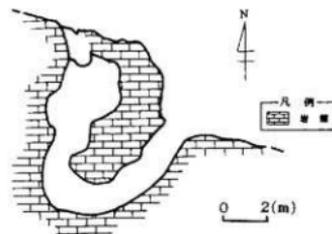
宮古南静園北側に舟揚場として現在、利用されている浜がある。その北側に隣接して、平面形がU字状に掘り込む陣地壕が砂浜より約2m上方に見て取ることができる。壕内は産業廃棄物が置かれているものの崩落等は少なく、残存状況は極めて良好である。人工的に石灰岩を削り貫いてつくられており、規模はそれ程大きくない。

東西に各々開口部が設けられ内部で繋がる。東側の開口部は幅・高さ共に1.5mで入ってすぐ広い空間となる、また床は平坦に削平しており、この場所に発電器を設置していた。そこを抜けると幅は0.8～1m、高さは約1.5mの狭道となり西側の開口部へ至る。西側の開口部は幅1m、高さ0.8mでかつて機関銃が設置されていた。

旧日本軍（以下、軍）は南静園東側の浜を米軍上陸地点と想定していた。軍は大野山林から木を運び出して浜に障害用の杭として並べ、それらに鋼線を張り機雷を設置した。東側の開口部近くに設置されていた発電器は機雷の発火用のものであった。結果的に米軍上陸は無かったためこの壕は使用されることは無かったが、先の宮古南静園入所者の避難壕を強制退去させた行為やこの陣地壕の構築等から、軍が宮古南静園東側に広がる浜一帯を重要地点として認識していたことを窺い知ることができる。



壕遺景



第28図 重火器砲壕平面図



東側壕口



発電機設置場所



壕内部

第 2 節. 下地町

1. チフサアブ

所在地：下地町来間

立地（標高）：17m

形態：自然壕

種別：避難壕

現状：残存状況は良好。

保存状況：一部、崩落が見られる。

築造者：一

築造年月日：昭和初め頃に入口部分を構築

戦時中の使用状況：来間島住民の避難壕として利用

主な遺構：コンクリート造りの壕口



概要

来間島東側海岸と来間集落との間にある石灰岩崖下に形成された自然壕。来間島山砲陣地壕から北へ約100mの場所にある。

壕は下方へ落ち込んでいき、入口も下り道の途中に設けられている。入口は東側に向かって開口しており、開口部はコンクリートで造られている。縦0.9m×横0.5mの長方形のコンクリートで固められた入口が設けられている。この入口の扉と思われるコンクリートの板が内部の入口近くに放置されている。昭和の初め頃に来間島から石灰岩を用材として切り出していた時期があり、この場所は火薬の保管場所として利用されていた。その時にコンクリートで入口が造られたとある。

内部は広く、おおよそ200名が入れる程の大きさである。床は東から西側に向かって傾斜しており、入口からかなりの土砂が流入している。最奥部は横穴がいくつか見られるが、全て自然の鍾乳石から成っている。別名「千人ガマ」と呼称される。

戦時中は、来間島の住民が西側崖上にある遠見台近くを通る古道を下って、この壕まで避難したとある。現在、その道は利用されおらず、下草で覆われており僅かにその痕跡が窺われる程度である。



来間島東海岸遠景（南東から）



コンクリート造りの壕口

2. 来間の山砲陣地壕

所在地：下地町来間

立地（標高）：20m

形態：人工壕

種別：山砲壕

現状：残存状況は良好。

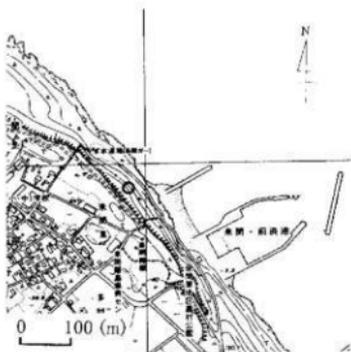
保存状況：山中に放置。

築造者：旧日本軍

築造年月日：1944年（昭和19）頃

戦時中の使用状況：内部に山砲を設置

主な遺構：壕、銃眼



概 要

チフサブから約100m南東に位置する、石灰岩塊の内部を列り貫いた人工壕。現在では2カ所が確認されており、何れも東側にコンクリートで固められた銃眼が開いている。現状においては雑木で覆われて視界が悪いが、かつては雑木を刈っていたため、宮古島南西部を広く見渡すことができたようである。

2カ所共に内部はおおよそ4m四方の広さで、側壁には燭台と思われる棚や、部材を嵌め込んだ痕と思われる溝が走っている。床面には約1mの長さで素堀りの溝を見ることができる。入口は西側に開口しており、造りは雑である。入口に至るまでに鍵の手状に右折する造りとなっている。

この壕近くには来間島展望台から下る古道が近くを通っていることから、来間集落との関係が窺える。西側周辺には平坦に造成した広場が展開しており、かつて旧日本軍の施設があったとされている。当時、来間島には120名の軍隊が配置されていたとあり、この山砲壕とその周辺は何らかの関わりがあるものと考えられる。因みに来間島展望台の真下に重火機等の武器を隠していたとの聞き取りが得られている。



南側山砲壕内部から銃眼を見る



北側山砲壕外側から銃眼を見る

3. 東御嶽のタコ壺と銃座

所在地：下地町来間

立地（標高）：40m

形態：タコ壺、銃座

種別：タコ壺、銃座

現状：残存状況は良好。

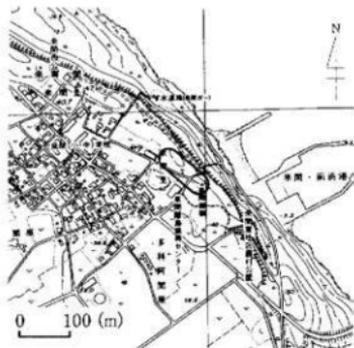
保存状況：御嶽内に放置。

築造者：旧日本軍

築造年月日：1944年（昭和19）頃か

戦時中の使用状況：沿岸警備隊が内部に山砲を設置する。

主な遺構：竪穴、銃座



概要

来間集落の東側には東御嶽がある。集落の発祥地として来間島民に崇められており、現在も重要な行事はこの場所で執り行われるが、戦時には御嶽周辺にタコ壺や銃眼が配置されていた。その場所や配置数は不明であるが、現在は東御嶽入口にある鳥居の西側にタコ壺が1基のみ残っている。雑木等で埋まっているが、とくに崩れは見られない。現状では直径1m、深さ50cmの竪穴となっている。この鳥居から北へ50mの場所にヤマトウガンと呼ばれる御嶽があり、その入口に東一西軸の銃眼が1基見られる。一枚岩を真ん中で縦に割って約3cmほどの隙間をつくっている。その間から銃口を出し、西側にある道路方向に発砲することができる。一枚岩は人一人ようやく隠れることができる程度の大きさである。この銃眼から更に北側には石積みの遠見台があり、宮古島東海岸の眺望が利く。そのため、戦時には住民がこの場所から敵機の襲来に備えて監視したという証言が得られている。また、遠見台脇から住民避難壕の子ブサアブに至る古道があったとされる。



東御嶽遠景（南から）



銃座

第 3 節. 上野村

1. 旧日本陸軍中飛行場戦闘指揮所

所在地：上野村野原

立地（標高）：53m

形態：建造物

種別：戦闘指揮所

現状：北側が崩れる。

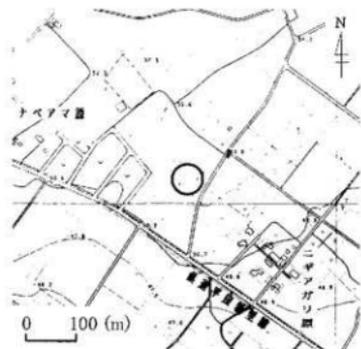
保存状況：林野内に放置。

築造者：旧日本陸軍、野原集落住民

築造年月日：1944年（昭和19）6月着工、11月完成

戦時中の使用状況：旧日本陸軍管轄中飛行場の戦闘指揮所、山内小隊が居住。

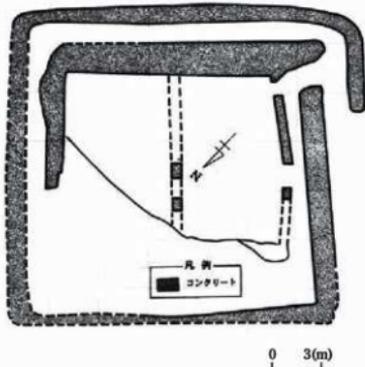
主な遺構：鉄筋コンクリート造りの柱、壁、屋根



概要

野原集落の南西側、現在は周辺が畑地となっており、一部、林野が残されている。その中に旧日本陸軍中飛行場戦闘指揮所跡がある。現在は15m×15mの範囲で鉄筋コンクリートの壁や、高さ3mのところに屋根が残っている。中央に二本の柱が残り、天井も約50cmの厚みを有しており頑強な造りとなっている。最も外側は通路となっており、かつては藁や草木、土で全体を覆って擬装していたようである。入口は幅1m前後、高さ2mと狭く、一人一人通過できる程度の幅である。建物の内部には破壊された際のコンクリート片が散乱しており、壁には部材を嵌め込んだと思われる孔がいくつも見られる。北側から西側にかけて大きく崩れている。壁には格子状の溝が確認されるが、これは戦後のスクラップ回収の際に鉄筋を取り出すためにコンクリートから剥がし取った痕跡である。

旧日本陸軍中飛行場は1944年（昭和19）10月5日に突貫工事で完成している。1700mと1400mの2本の滑走路と6000mの誘導路そして、25基の掩体壕が設置されていた。戦闘指揮所もこの頃に構築されたと考えられる。当時の使用状況であるが、歩兵第3連隊本部直轄の山内小隊が当該戦闘指揮所に居住したとある。山内小隊は中飛行場第一滑走路と第二滑走路の交差点に配置され、敵機に対して東西滑走路の西から連日対空射撃を行っていた。1945年（昭和20）3月以降空襲が激しくなる、当該戦闘指揮所近くに軍旗を守るための壕が掘られたとのことである。



第29図 平面図



入口付近



内部廊下



内部部屋

野原岳・大嶽城跡 公園戦争遺跡群

標高108mの野原岳から南の大嶽城跡公園まで38基の壕、3基のトーチカ、3基のコンクリート造りの電波探知機壕を現在見ることがができる。野原岳は宮古島の中央に位置し、且つ宮古島で最も高い山であることから宮古島四周の眺望が利く。1944年（昭和19）になると旧日本軍が本格的に陣地や兵舎を建設し始め、周辺の様子は一変した。また戦略的に重要な地点であることから野原岳東麓に司令部壕も設置され、その東隣には軍関係の兵舎が立ち並んでいた。宮古地域でも広範囲に旧日本陸軍の諸施設が配置されており、当該地域を代表する戦争遺跡と言える。戦後、壕内の部材は周辺住民の手によって持ち出され、野原岳頂上周辺は米軍の電波基地として接収されている。本土復帰後に米軍から自衛隊へ移管し、現在に至る。野原岳・大嶽城跡公園の東麓は戦後に始まった採石によって旧地形が失われつつある。本報告では周辺の戦争遺跡の分布から便宜的に7遺跡に分けて報告していく。

持ち出され、野原岳頂上周辺は米軍の電波基地として接収されている。本土復帰後に米軍から自衛隊へ移管し、現在に至る。野原岳・大嶽城跡公園の東麓は戦後に始まった採石によって旧地形が失われつつある。本報告では周辺の戦争遺跡の分布から便宜的に7遺跡に分けて報告していく。



第30図 野原岳周辺の戦争遺跡群配置図



野原岳遠景（北から）



納見中将自決の地

2. 野原岳頂上の電波探知機壕

所在地：上野村野原

立地（標高）：100～105m

形態：人工壕

種別：電波探知機壕

現状：残存状況は良好。

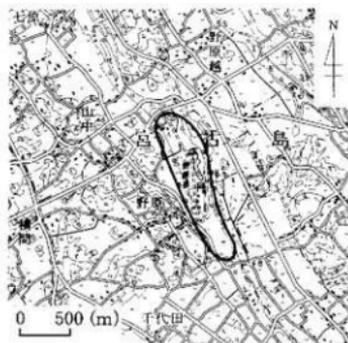
保存状況：資材置き場として一部は利用されている。

築造者：旧日本陸軍

築造年月日：1944年（昭和19）頃

戦時中の使用状況：電波探知機を設置

主な遺構：鉄筋コンクリート造りの壕



概要

野原岳（標高108m）の頂上付近、現在の航空自衛隊宮古島分屯基地内にコンクリート造りの壕が2基、残存している。現在の自衛隊レーダー施設北側に1基（陸軍）、その南西側（海軍）にも1基残存している。共に半円筒型の建物を2つ並べ、その中間を通路で繋ぐ鉄筋コンクリート造り、半地下式の施設である。

レーダー施設北側の壕は北側に開口しており、外側入口近くにコンクリート造りの遮蔽物を設けている。その大きさは高さ2.3m、幅4mとなっている。開口部は幅3m、高さ3.3mで奥行は7.3mとなっている。壁に弾痕が見られる以外、残存状況は極めて良好である。

レーダー施設南西側の壕は東側に開口しており、北側のものとは遮蔽物が見られない以外は形態、規模共にほぼ同じである。天井が一部、抜け落ちているものの、崩落などは見られない。この壕も壁に無数の弾痕が見られる。現在は航空自衛隊の資材置き場として利用されている。

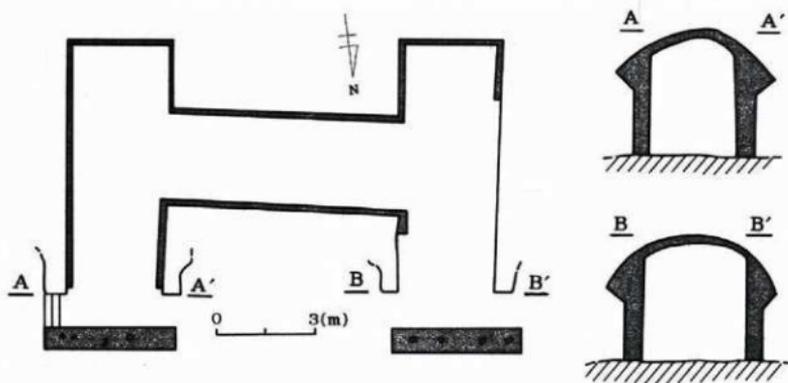
野原岳は宮古島のほぼ中心に位置し、周囲に高い山地が見られないことから宮古島内四方の眺望が利く。この立地条件を活かして旧日本軍のヤグラ型の野戦警戒器、即ち野戦乙警戒機と呼ばれる電波探知機が1944年（昭和19）に2基設けられた。



レーダー北側電波探知機壕外観



レーダー北側電波探知機壕内部



第31図 レーダー北側の電波探知機壕平面図及び入口立面図



レーダー南西側電波探知機壕外観



レーダー南西側電波探知機壕内部

3. タキグスバルの地下壕群

所在地：上野村野原

立地（標高）：75m

形態：人工壕

種別：陣地壕

現状：北側と南側が崩落。

保存状況：林野内に放置。

築造者：要塞建築勤務第8中隊、野原

集落住民

築造年月日：1944年（昭和19）6月着工、11月

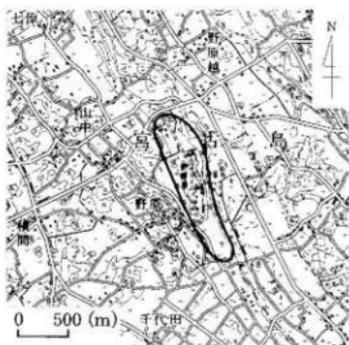
完成

戦時中の使用状況：旧日本陸軍司令部壕等

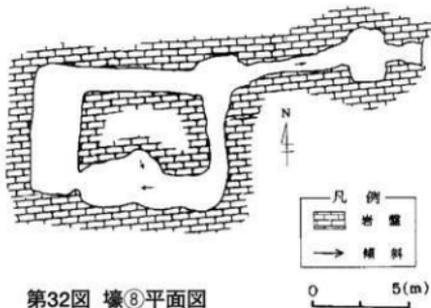
主な遺構：壕、石積み、溝

概要

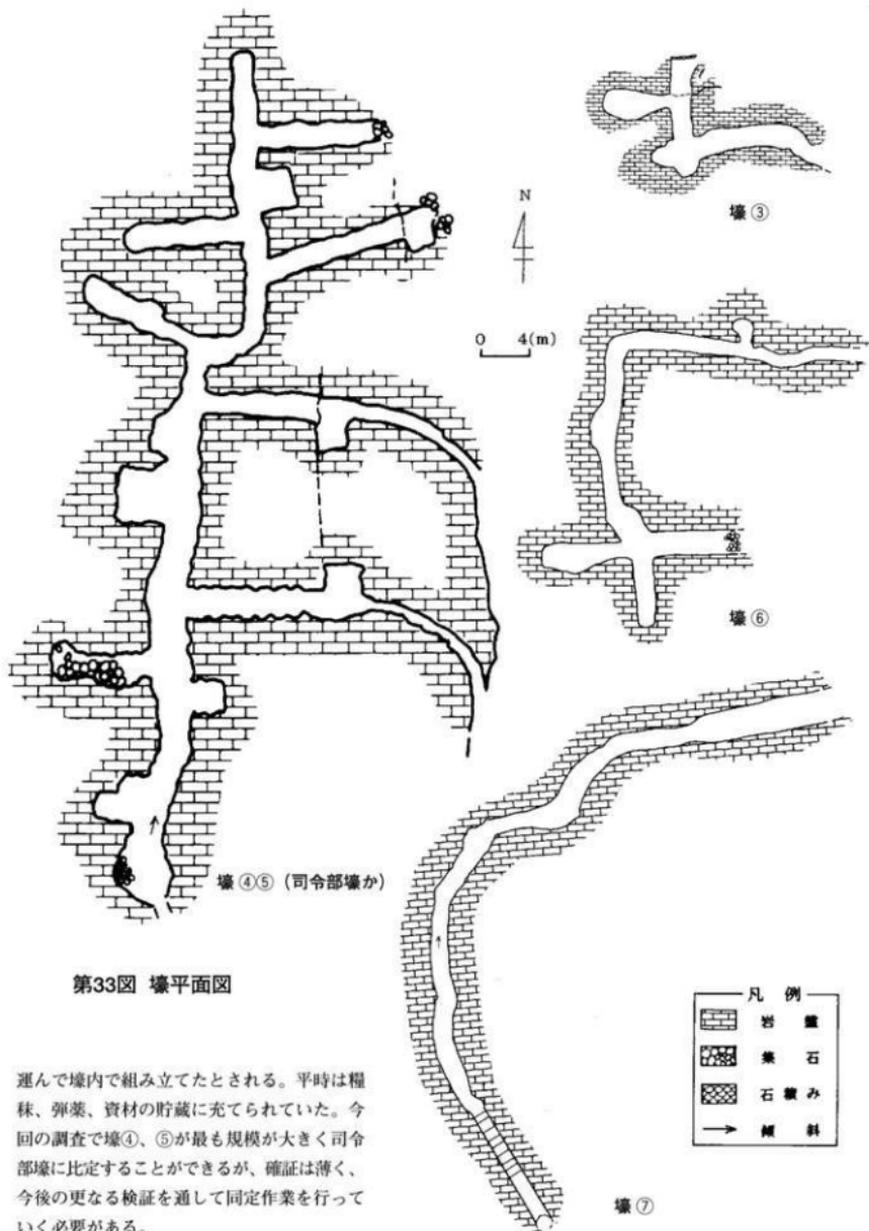
野原岳の東側一帯に総計12基の壕を現在、確認することができる。全て石灰岩を削り込んで掘られた壕で東側に口を開ける。一部、採石によって破壊されている壕も見られる。中でも壕④、⑤（第33図）は最大規模を有する壕で総延長80mとなり、壕内は崩落が著しく全容を把握することができなかった。この周辺には司令部壕を構築したという記録があり、規模や位置関係から当該壕に比定される。壕の幅は約2mで壁を掘り込んで小部屋を造っている。壁面には宮古島各地から運んできた松材を嵌めたとと思われる凹凸が見られ、松材の一部が残存している。全ての壕口の南側には小部屋が設置されており、壕口から外側にかけては深さ3mの羨道となり北側へ屈曲する。この壕を掘った際の廃土が羨道の入口近くに堆積している。この壕以外にも階段を有する壕⑦（第33図）や内部に部屋を設置させる壕、壕口に石積みを使用して誘導路をつくる壕等を確認することができる。聞き取り調査ではこの周辺に司令部壕があるということで、「ヒタチ」と呼んでいた。1945年（昭和20）2月16日に師団司令部を宮古高等女学校から野原岳頂上へ移動した。その際に司令部壕も使用されたようで、内部には作戦室、司令部要員の居住区、発電室といった施設を揃えた堅固な壕であったとされる。また、要員数百名が収容できる程の広さを有しており、構築の際には宮古高等女学校校舎の木材を



壕④、⑤内部



第32図 壕⑧平面図



運んで壕内で組み立てたとされる。平時は糧秣、弾薬、資材の貯蔵に充てられていた。今回の調査で壕④、⑤が最も規模が大きく司令部壕に比定することができるが、確証は薄く、今後の更なる検証を通して同定作業を行っていく必要がある。



壕④、⑤壕口へ至る羨道



壕④、⑤壕口



壕④、⑤内に残る松材

4. ツガガーの地下壕群

所在地：上野村野原

立地（標高）：80m

形態：人工壕

種別：陣地壕

現状：林内に放置。

保存状況：林野内に放置。

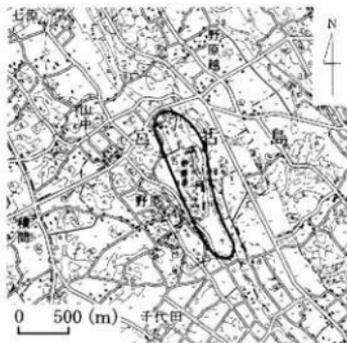
築造者：旧日本陸軍

築造年月日：1944年（昭和19）頃

戦時中の使用状況：戦車部隊姫野隊が使用。

旧日本軍の水浴場にご利用される。

主な遺構：壕、コンクリート床



概要

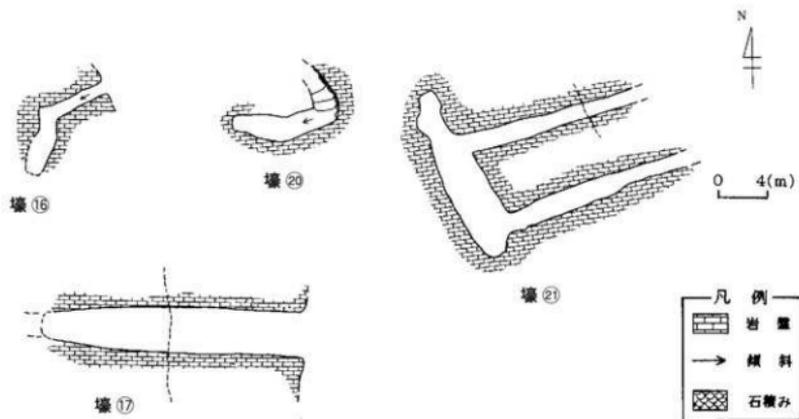
大嶽城跡公園と野原岳の中間西麓にツガガーと呼ばれる井戸があり、その周辺に15基の壕が見られる。ツガガーは野原集落の生活用水として戦前から使われていた井戸で、沖縄戦時に旧日本陸軍によって接収され、周辺をコンクリートで固められて改修された。井戸の前にはテントを張って、水が湧き出る場所で軍の上層部が度々訪れて水浴びを行っていたようである。排水は木の桶が西側の貯水池まで伸びていたようで、コンクリート造りの貯水池が現在も畑の中に残っている。かつて水量が豊富であったが、陸軍による改修以降は水量が減じたとのことであった。このツガガーの脇には、途中で中止したという奥行約10m前後の未完成の壕が見られる。またツガガーの南北にも大小の壕が構築されたようで、北側には戦後、「ヒメノ」と落書きされた壕⑬が見られる。「姫野隊」と呼ばれる戦車部隊がこの周辺に陣地を構えていたようで、この壕は姫野隊に関係する壕と思われる。壕の幅は4m、高さ2.5mで同規模の壕が4基並んで構築されているのが確認できる。このように規模と配置状況から戦車壕であるとのことをご教示を友利恵勇氏と齋生藤吉郎氏から得た。ツガガー近くには戦車壕があったとの地元の証言からも、これらの壕が戦車壕である蓋然性は高い。



ツガガー



ツガガー脇の壕



第34図 壕平面図



壕 18 内部



ツガガー下の貯水地



壕前の石積み



壕 23 内部

5. 大嶽城跡公園西側壕群・トーチカ

所在地：上野村野原

立地（標高）：80m

形態：人工壕、構築物

種別：陣地壕、トーチカ

現状：残存状況は良好

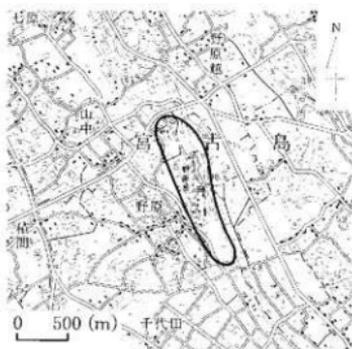
保存状況：大嶽城跡公園内に放置。

築造者：旧日本陸軍歩兵第3連隊か

築造年月日：1945年（昭和20）2月頃

戦時中の使用状況：歩兵第3連隊の陣地壕
並びにその関連施設か

主な遺構：壕、トーチカ



概 要

大嶽城跡公園にある展望台の西側、第35図に見られる壕②と壕③の2基の壕である。何れも奥行は10m前後と規模はそれ程大きくなく、石灰岩を粗く削り込んでいる。壕口は広く奥へと床面が傾斜している。一帯は公園整備がなされており、旧状がかなり失われている。この大嶽城跡公園の頂上に展望台が有り、その北側に隣接してトーチカが南北に3基並んで見ることができる。先の壕とは直線距離で約30mで、両施設の関連性が位置の上からでは指摘できる。トーチカの銃眼はそれぞれ西、北側に向いている。何れも岩盤を削り抜いた中にコンクリートを流し込んでおり、内部の高さは約2mで2、3人が入ることができる空間を創り出している。南側にあるトーチカは屋根が壊されており、内部の様子が解る。それぞれは高さ1.8mで岩盤を四角に加工している点は共通している。

現在の大嶽城跡公園の西側にある駐車場や運動場一帯に、歩兵第3連隊が1945年（昭和20）2月に陣地を現在、歩兵第3連隊の碑が立つ野原岳の北西麓から移転している。かつての中飛行場を一望できる平場に歩兵第3連隊が詰める簡易な建物が立ち並んでいたようで、当該壕もその規模から歩兵第3連隊に關係する施設、即ち避難壕若しくは物資貯蔵用の壕であった蓋然性が高い。トーチカは先の陣地と関わる施設であったと考えられる。

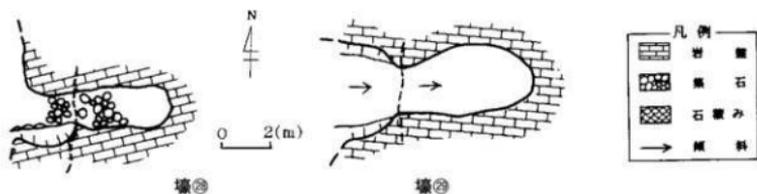


北側トーチカ全景



北側トーチカコンクリート壁

霧生桐吉郎氏によると位置としては中飛行場を眼下に見据える位置であるため、戦略的にとても重要であったということである。



第35図 壕平面図



南側トーチカ内部



北側トーチカ銃眼



南側トーチカ銃眼



北側トーチカ内部



壕②内部



壕②壕口

6. 大嶽城跡公園東側壕群

所在地：上野村野原

立地（標高）：80m

形態：人工壕

種別：陣地壕

現状：完全に埋没している壕も見られる。

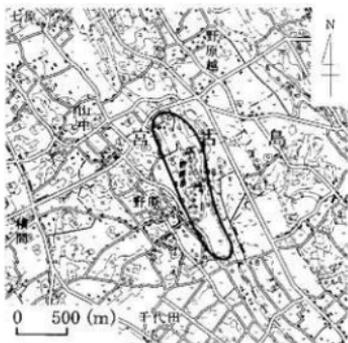
保存状況：林野内に放置。

築造者：旧日本陸軍

築造年月日：1944年（昭和19）頃

戦時中の使用状況：戦車秘匿壕、病院壕か。

主な遺構：壕、井戸



概要

大嶽城跡公園の東側一帯に壕が掘られており、現在は大小10基程確認することができる。また近年、埋没した壕と思われる溝状の落ち込みもいくつか見られる。特徴的な壕としては幅約4mの壕が並んで配置されていることから、聞き取り証言と併せて戦車壕がいくつか配置されていたものと考えられる。また大嶽城跡公園の南側に病院壕があったとの聞き取り証言を得、踏査した結果、総延長約100mの大規模な壕⑳、㉑（第36図）を確認することができた。内部は幅3m内外の主洞が南西軸に伸びて、途中で3本程の支洞が見られる。小部屋が配置されている支洞があり、薬品の瓶が散乱している空間も見られた。壕口は東側と南東側にあり、東側は斬壕となって更に東側へ伸びていく。去る2003年（平成15）9月12日に宮古島を直撃した台風14号によって一帯の土砂が流れてしまい、小規模な壕のいくつかは壕口が完全に埋没している。

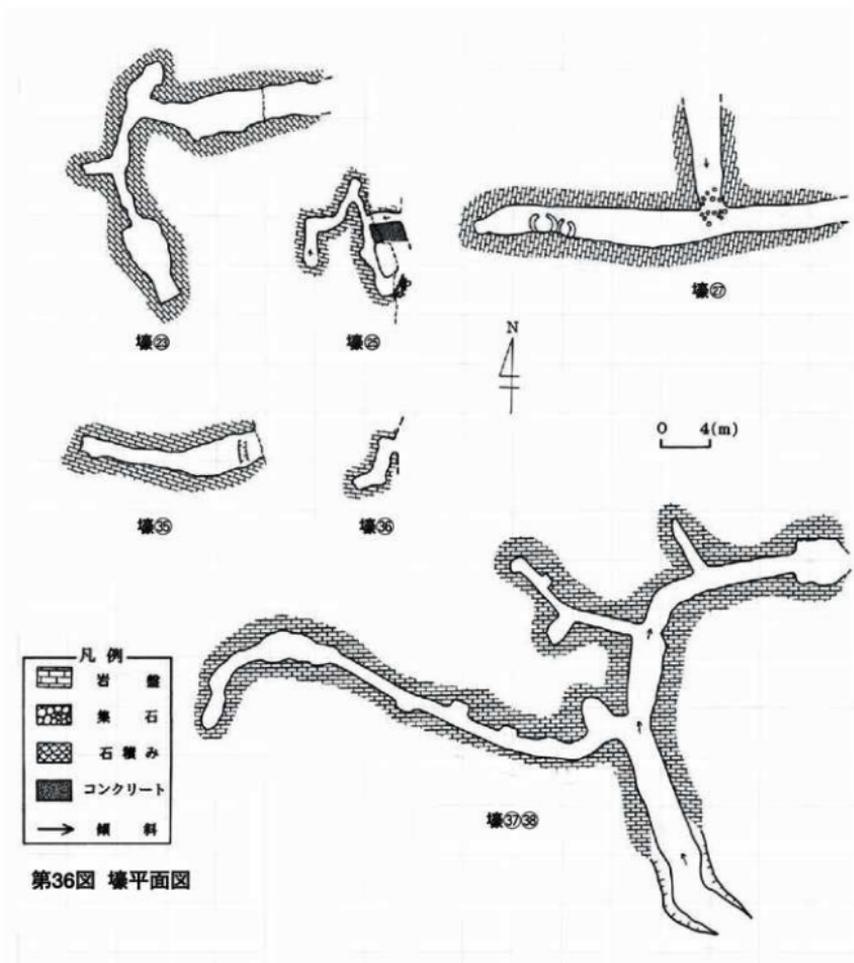
これらの壕群の詳しい用途については不明であるが、タキグスバルの壕群やツガガーの壕群のように野原岳や大嶽城跡公園東側の麓に立地していることから、旧日本陸軍司令部に関連する壕であったと思われる。ツガガー壕群とも隣接し、各壕の規模も類似していることから、連携して使用されたことが想定される。



大嶽城跡公園遠景（西から）



壕㉑灯り取り



壕②内のカマド跡



壕③④内の遺物



壕⑤

7. 野原岳北側発電施設壕

所在地：上野村野原

立地（標高）：85m

形態：人工壕

種別：発電機壕

現状：残存状況は良好。

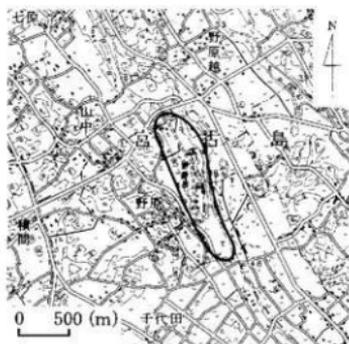
保存状況：野原岳斜面地に放置。

築造者：旧日本軍

築造年月日：1944年（昭和19）頃

戦時中の使用状況：発電機を設置

主な遺構：コンクリート床、壁、天井、孔

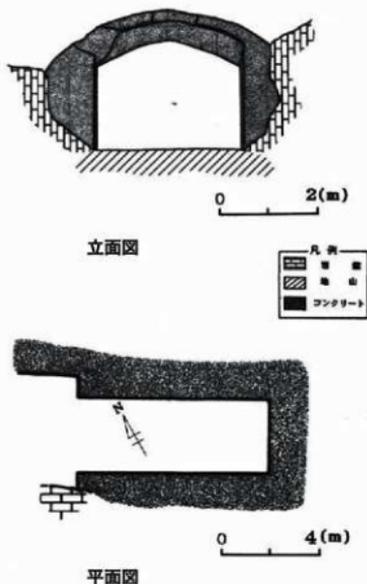


概要

野原岳の北側、現在の観光農園フルーツパーク内にコンクリート造りの、半地下式の壕が1基残る。

自衛隊施設内にある電波探知機壕と同様に、床は水平で天井がドーム型となっている。幅は3m、奥行は7.7mで平面形は一直線状となる。壁、天井に僅かながらコンクリートの剥落が見受けられるが、ほぼ当時のまま、残存している。周辺地形から石灰岩を掘り込んで輪郭を造り、壁や北西方向に開口している入口をコンクリートで固めるという構築方法が採られている。内部両側壁には電線を取り込むための孔が1ヶ所づつ設けられている。野原岳の斜面と観光農園フルーツパーク一帯の平地との設置点に設けられており、周辺は園内整備によって整地されている。

聞き取り調査から、上方の電波探知機壕へ電気を供給するために構築された発電機壕であるとされており、終戦直後、壕を残して内部の発電機は壕周辺で爆破してから撤出したとある。近くには戦前まで野原集落の住民が使用していた井戸「マエヌカー」、そして信仰の対象となっていた野原岳の霊石が現在も林内に残っている。



第37図 平面図及び立面図



遠景



外觀



內部壁面

8. 御真影奉護壕

所在地：上野村野原

立地（標高）：80m

形態：人工壕

種別：奉護壕

現状：入口が崩壊して壕内の進入は不可能。

保存状況：林野内に放置。

築造者：宮古郡内の男性教員

築造年月日：1944年（昭和19）10月

戦時中の使用状況：御真影の安置

主な遺構：壕

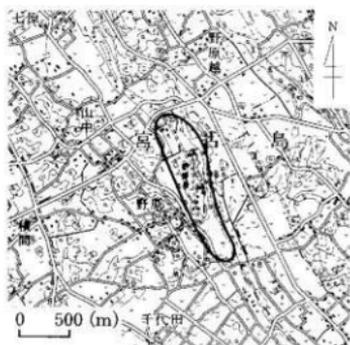
概 要

野原岳の北東側の中腹辺りに御真影奉護壕が残存する。2003年（平成15）9月12日に宮古島を直撃した台風14号によって入口部分が崩落し、内部へ進入することが不可能となった。内部は、入口部分は殆ど加工がなされておらず、奥の方は約2mの幅で石灰岩を掘り込んでいる。

1944年（昭和19）の10月10日の空襲によって、宮古郡教育会は各学校に置かれている御真影の安全について宮古支庁、軍当局と協議を行った。協議の結果、宮古郡内の国民学校に安置されている御真影を野原岳麓に疎開させることを決定した。壕の構築には郡内の国民学校教員が携わって完成を見た。奉護壕守衛は12時間交代で島内の各学校教員が勤務しており、内部には白木で組まれた神宮造りの祠がつくられ、その中に御真影を安置していた。その日、守衛に当たる者は御真影に拝礼をしてから勤務に就いたとされている。また近くに守衛室が設置されていたようで、アダン葉笹が2枚敷かれている粗末なものであったとある。

現在の壕内部を見ると、御真影を安置していたとされる窪みだけが見られる程度であり、とくに祠を建てた痕跡を見つけることはできなかった。守衛室も現状では同定することはできず、第38図の平面図のみを記録するに留まった。

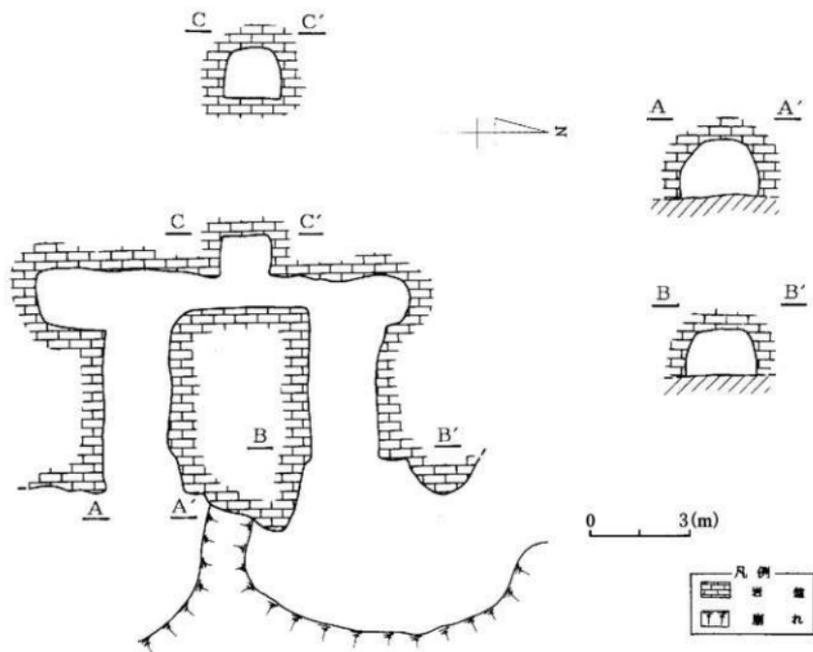
沖縄戦時の呼称は「御真影奉遷所」。



壕口近く



壕内部



第38図 平面図及び断面図



壕口



崩落後の壕口

9. トウクルアブ

所在地：上野村宮国

立地（標高）：10m

形態：自然壕

種別：避難壕

現状：残存状況は良好。

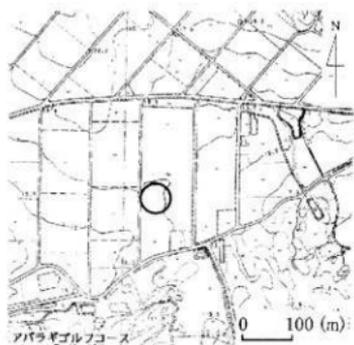
保存状況：畑内に放置。

築造者：—

築造年月日：—

戦時中の使用状況：避難壕として利用

主な遺構：壕



概 要

現在の下地町棚根と上野村宮国の境の原野に開口している自然壕。

開口部は高さ約1m、幅約3mで内部は下方へ落ち込む。一部、崩れている部分も見られ、現在、内部への進入は困難である。相当大的な石灰岩塊が内部に落ち込んでおり、人が入るための階段や道は設置されていない。内部から風が吹き出していることから相当深く、別の場所で開口しているものと考えられる。地下は塩水が染み出していることから涼しい風が吹き出ている。周辺は石灰岩があまり露頭しておらず、このような自然壕が見られるのは当該壕のみである。

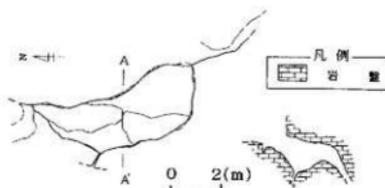
戦時中、下地村民は当該壕へ避難したとあり、石段を伝って、若しくは梯子を利用して内部へ入ったとの聞き取りが得られた。なお、内部への進入はかなり危険で、調査時には入口周辺を確認したに過ぎない。



壕口



内部



第39図 トウクルアブ平面図及び断面図

10. タカシカバーの機関銃壕

所在地：上野村宮国

立地（標高）：1～2 m

形態：人工壕

種別：機関銃壕

現状：残存状況は良好。

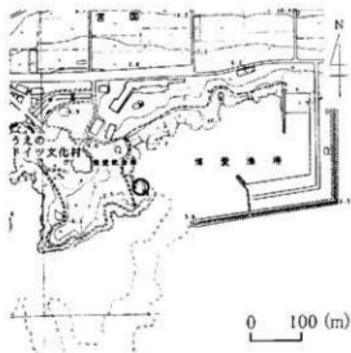
保存状況：入口部分は転石が散乱している。

築造者：旧日本軍

築造年月日：1944年（昭和19）頃

戦時中の使用状況：内部に機関銃を設置

主な遺構：壕、銃眼



概要

うえのドイツ文化村の敷地内、南側の海岸沿いに広がる岩礁の中に1基のみ残存する。石灰岩を削り貫いた機関銃壕で、入口は戦後、近隣住民が内部に入れないように石で埋めたため、石灰岩が散乱している。また、入口に誘導するための石積みも現在も残る。

入口付近は自然の空洞をそのまま利用し、奥へ進むと南東方向に幅0.5m、高さ1m、長さ約5mに亘って開削し、床面は平坦に仕上げている。銃眼は南東に向けられ、機関銃を据えたと思われる台座が残る。直径約20cmで中央に孔が開けられている。この台座周辺は丁寧に岩盤を整形しており、一部コンクリートで固められている部分も見られる。内部は狭小で人がすれ違うことも容易ではないが、2カ所程小部屋が設置されているのが確認できる。側壁には燭台として利用したと思われる棚が1カ所見られ、現在も煤が付着しているのが確認できる。この燭台は現在の入口付近につくられ、明かりを取る必要は無いと思われるが、おそらく入口周辺を偽装していたものと思われる。

東側は小さな入り江となっており、砂浜が広がる。米軍上陸に備えて、この入り江を睥睨する機関銃壕として設置したものと思われる。また、岩礁の裂け目が周囲に点在しており、その裂け目は当該壕入口に繋がっていることから、交通壕として利用していた可能性が挙げられる。



銃眼



銃眼並びに機関銃設置孔

11. 新里の機関銃壕

所在地：上野村新里

立地（標高）：1～2 m

形態：人工壕

種別：機関銃壕

現状：残存状況は良好。

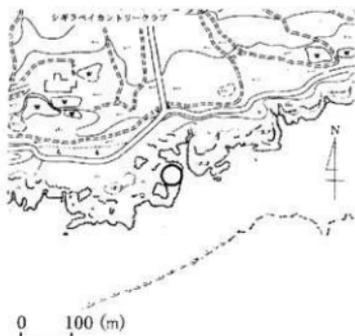
保存状況：入口部分は転石が散乱している。

築造者：旧日本軍

築造年月日：1944年（昭和19）頃

戦時中の使用状況：内部に機関銃を設置

主な遺構：壕、銃眼



概要

新里に所在するゴルフ場南側海岸沿いの岩礁に機関銃壕が残存する。石灰岩を削り抜いてつくられた機関銃壕であり、南西方向に向けて銃眼が穿たれる。上下2つの壕から構成されている。入口部分は直径約2m程の竖穴となっているが、内部は崩落、投石等で埋没しているため、内部への進入は不可能となっている。銃眼は海面近くに見られ、その構造からタカシカバの機関銃壕と同規模と想定される。機関銃壕の主な目的は、湾内に入ってくる敵を壕内に隠れて狙い撃ちするというものであり、宮古島の南海岸沿い、現在の下地町から城辺町にかけては米軍上陸を想定して、このような機関銃壕をいくつか設置していたようである。今回の調査においては、陸上からアプローチできたタカシカバの機関銃壕と当該壕の2ヶ所のみ確認することができた。今後、更に確認される可能性は高いものと思われる。



遠景（東から）



壕入口

第 4 節. 城辺町

6. 東保茶根の戦争遺跡群

所在地：城辺町友利

立地（標高）：60～80m

形態：人工壕、その他

種別：秘匿壕、砲台

現状：壕の残存状況は良好、砲台跡は基礎
まで破壊されている。

保存状況：山林の中に放置。

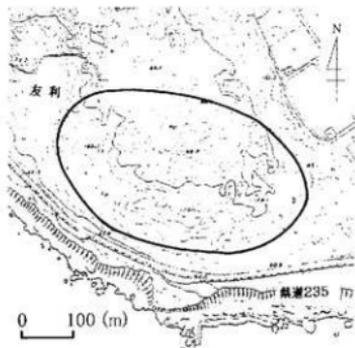
築造者：旧日本海軍・陸軍及び城辺村青年団

築造年月日：1944年（昭和19）末～45年初め頃

戦時中の使用状況：山砲を擬装、弾薬を保管。

旧日本陸軍の陣地壕

主な遺構：壕、砲台基礎、交通壕

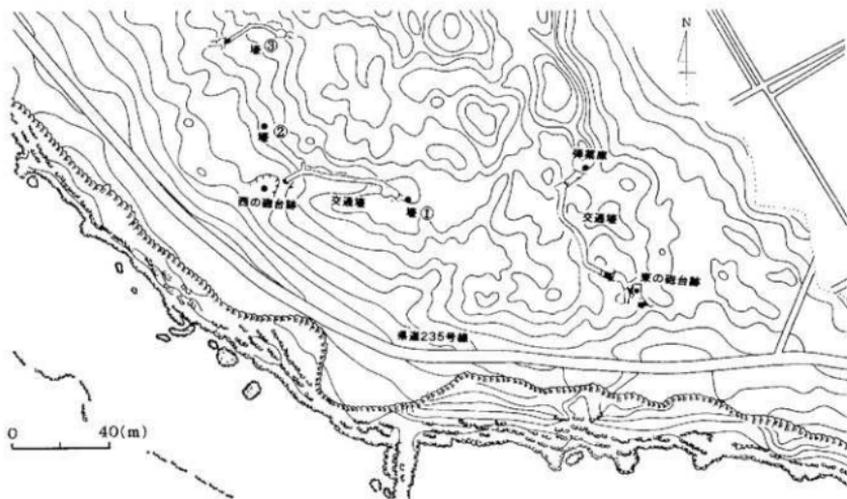


概要

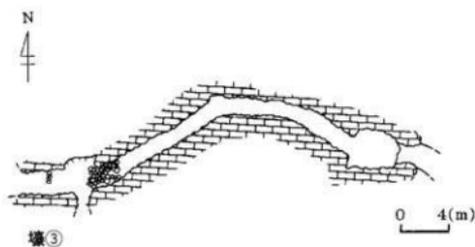
城辺町友利集落の東側に連なる低丘陵帯に陣地が1944年（昭和19）、構築された。現在は一帯が雑木で覆われているが、かつては畑で原野の各所に砲台や交通壕、弾薬庫が配備されていた。東西に砲台の跡を窺うことができ、それに連携する形で交通壕と弾薬庫、壕が造られている。近年、城辺町教育委員会によって発見された遺跡であるが、報告するのは今回が初めてである。

東の砲台は岩盤を成形した痕跡やコンクリート基礎が残っており、南側則ち、友利海岸に向けられていたことを窺うことができる。この砲台から北側に向かって交通壕が約54m伸びている。岩盤並びに地山を掘り込んで造られており、一部に壕を塞ぐように高さ約0.5mの野面積みの石積みが構築されているのを窺うことができる。全体的に砲台へ向かって傾斜しており、約3mの深さまで掘り込まれている部分もある。かつては壕を掘った際に出た、土砂や草木等で天井を覆い擬装していた。また周囲には平場が見られることから、何らかの施設が配置されていたことも想定することができる。交通壕は砲台と弾薬庫とを連絡する機能を有しており、現在もその殆どが残存している。弾薬庫は岩盤を削り抜き、入口と内部をコンクリートで覆うといったもので、入口は幅1m、高さ2m、内部は6.5×1.9m、床面もコンクリートが敷かれ、溝が周囲に廻らされている。この弾薬庫はダイナマイトを使用して岩盤を掘削しており、交通壕の脇にミキサーを設置してコンクリートを製造していたとのことである。また、完成後は弾薬の製造作業を弾薬庫内で行っており、軍関係者以外は立入禁止となっていた。

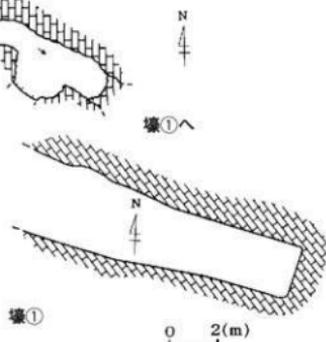
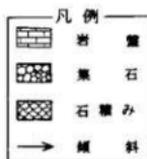
西の砲台は、現在は掘り鉢状に落ち込む地形を呈している。一部に岩盤を成形した痕跡が見られるが地形以外はほとんど痕跡を残さない。1945年（昭和20）に既にあった東の砲台を増設する形で西の砲台は構築された。砲身は南西を向いており、砲弾は上野村宮国あたりまで飛んだとのことである。東の砲台と同様に交通壕は砲台の東に接しており、岩盤、地山を掘り込んでいる。この交通壕も砲台へ向かって傾斜している。長さは約50mで壕①まで続く。この交通壕の北側に広がる平坦地は壕を掘り込んだ際に出た廃土で造成したとのことである。壕①は幅2.2～3.2m、高さは2.5m、奥行11mと規模は大きい。削岩機で岩盤を掘り込んで壕を構築していたが、完成を見ずに終戦をむかえたとのことである。



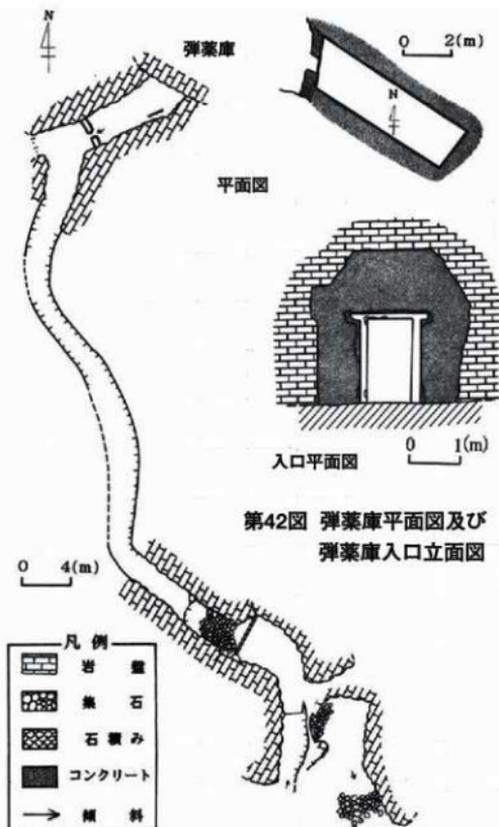
第40図 友利東保茶根戦争遺跡群配置図



東の砲台から壕を結ぶ交通壕



第41図 壕平面図



第42図 弾薬庫平面図及び
弾薬庫入口立面図



東の砲台跡



弾薬庫入口



弾薬庫内部

第43図 東の砲台から弾薬庫を結ぶ交通壕平面図

上記の砲台、交通壕、弾薬庫等は旧日本海軍独立速射砲第5大隊第1中隊が管轄しており、宮古島の南岸を防備するために配備された。構築にあたっては城辺村内の青年団が参加している。

これらの諸施設の北側には、東西に掘り込まれた地下壕が2つ程確認することができた。これらの壕は何れも岩盤を粗く掘り込んでおり、主洞のみの簡単な造りとなっていることから急造されたことが想定される。最も残りの良い壕③は長さ36mで幅約1m、西側の壕口近くは4×3mのやや広い空間を創り出しており、東側の壕口へは「く」の字状に北側へ屈曲しながら延びている。壕②は崩落が激しく、内部へ進入することは出来なかった。周辺地形は緩やかに西側へ下っており、壕も東側へ緩やかに上っていく形となる。かつては多くの壕がこの辺りに残っており、旧日本陸軍の陣地壕であるとの聞き取りを得ることができたが、詳細は不明である。



遠景（東から）



壕①内部



壕③内部

11. 下里添の野戦重火器秘匿壕

所在地：城辺町下里添

立地（標高）：60m

形態：人工壕

種別：秘匿壕

現状：残存状況は良好。

保存状況：現在は納骨堂として管理されている

築造者：野戦重砲第1連隊

築造年月日：1944年（昭和19）頃

戦時中の使用状況：15榴砲を秘匿

主な遺構：壕



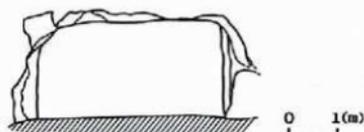
概要

現在の野原越集落と瓦原集落との間の低丘陵地下に所在する。周辺は祈念碑が建ち並び、その中心に納見敏郎師団長麾下の戦没者の納骨堂がある。1945年（昭和20）10月に納見中將が当該壕に遺骨を納めるといふ命令が下されて以降、納骨堂とされてきたが、戦時中は野戦重火器砲壕として利用されていた。現在、入口はコンクリートで塞がれており、内部への進入はできない。入口は高さ2m、幅3.8mと広いつくりになっており、かつて内部に入ったことのある霧生桐吉郎氏からの聞き取りによると、奥行は約6m程で天井並びに壁は直線状に加工されており、丁寧なつくりになっていたとある。

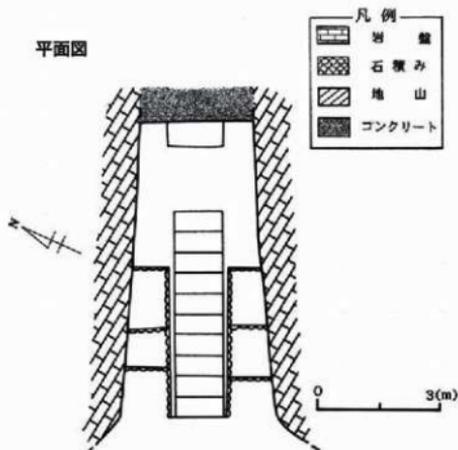
外側の入口周辺の石灰岩も垂直に削平するなどの加工痕が見られる。また壕の入口へ続く石段が10段設けられ、この両脇にはコンクリートの壁が直に立ち上げられている。これらは1963年（昭和38）4月の琉球政府による遺骨収集の際に周辺整備の一環として設置されたもので、戦時中、入口は緩やかなスロープであったとされている。

当時は野戦重砲第1連隊の15榴砲が1基、格納されており、旧日本陸軍司令部壕のある野原岳が攻撃を受けた際に壕外に出て、当該地から援護するという計画があった。

立面図



平面図



第44図 平面図及び立面図



慰霊碑群



塚入口



塚前の納骨堂

16. アーリヤマの戦争遺跡群

所在地：城辺町長山

立地（標高）：70～110m

形態：人工壕、建造物

種別：壕、トーチカ

現状：残存状況は良好。

保存状況：発電機壕は山林の中に放置。

機関銃壕、溜井戸は農園内に保存。

築造者：旧日本海軍第313設営隊第2中隊

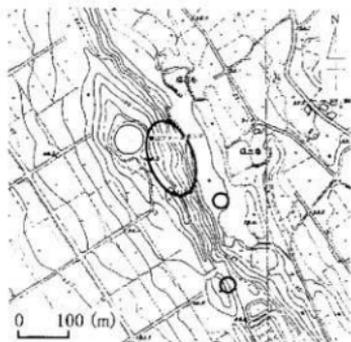
第1小隊、ビンフ地区の動皇隊

築造年月日：1944年（昭和19）11月8日～

翌年1月

戦時中の使用状況：発電機壕はレーダー用の発電機を秘匿。機関銃壕は掃射の他、見張り台としても利用。

主な遺構：壕、トーチカ、コンクリート造りの貯水池



概要

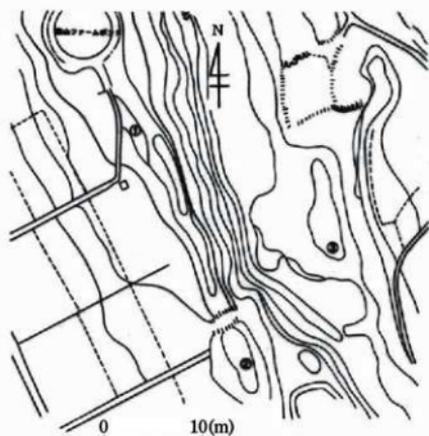
砂川と西里添の間を南北に走る丘陵上にコンクリート造りの発電機壕と、その南側にはトーチカ、丘陵の東麓には貯水池が東山ファームボンドの南側一帯に展開している。

発電機壕は長さ7m、幅2m、高さ2mで天井はアーチ形となる。この丘陵上には電波探知機の基地が設置され、電波探知機を起動させるための発電機をこの壕内に設置していた。奥には発電機から出る熱を逃がすための孔が開けられており、床には機械を設置した際に使用したと思われるコンクリート柱が現在も残っている。また壕口周辺には土を掘り込んだ北側へ折れる通路がつけられている。壕口は流土により埋没が著しいが、ほぼ完全な形で残っている。

トーチカは、宮古島南側一帯を見渡すことのできる丘陵の頂上に構築されている。岩盤を削り抜いた内部の壁、天井はコンクリートで覆っている。2人程度が入ることが出来る程の広さで高さは1.7m、50cm四方の入口が東側に取り付く。銃眼は北東側と南西側に設けられている。

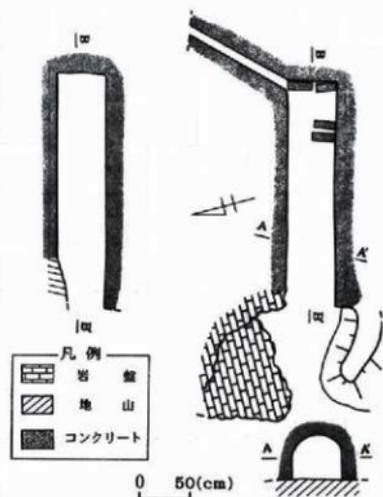
貯水池はトーチカの北東側約20mに位置している。コンクリート造りの枠で規模は約2.5m×1.5m、ほぼ完全な形で残存している。この貯水池は丘陵から流れ込んでくる雨水を溜めるために、旧日本海軍第313設営隊が構築した。現在は危険防止のため地権者によって塞がれている。

発電機壕は旧日本海軍第313設営隊の第2中隊第1小隊第1、2分隊20数名、衛生員、主計員各1名、ビンフ地区の動皇隊10数名が構築にあたった。構築の際には削岩機や火薬を使用して岩盤を削り、トラックに積んだミキサーでコンクリートを製造、内部の構築を行っている。なお、コンクリートの原料となる砂、石は宮古島北部の大浦海岸から運び入れている。発電機壕は2基構築され、他に岩盤を掘削して電源所も配置している。



第45図 アーリヤマ周辺の戦争遺跡配置図

①発電機壕 ②トーチカ ③貯水池



第46図 発電機壕平面図
及び断面図



発電機壕口



発電機壕内部



トーチカ全景（南東から）



トーチカ銃眼



貯水池

18. 吉野海岸の壕

所在地：城辺町吉野

立地（標高）：約20m

形態：人工壕

種別：壕

現状：残存状況は良好。

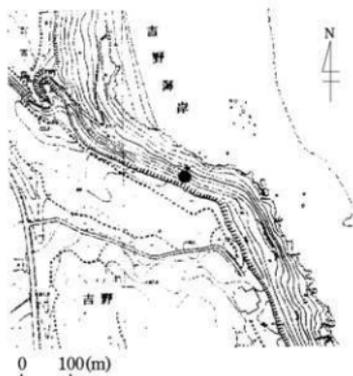
保存状況：山林の中に放置。

築造者：郷土防衛隊第209中隊

築造年月日：1944年（昭和19）11月8日～
翌年1月

戦時中の使用状況：使用せずに放置。

主な遺構：壕



概要

吉野海岸の西側に、南北方向に屹立する崖を掘り込んだ壕が1基見られる。標高約20m程の崖面にあるため、内部への進入は不可能である。高さは約2m、幅は約2.5m程である。壕口は北西方向に向いており、天井はドーム型となっている。周辺の踏査を実施したが、1基のみの確認であった。聞き取り調査によると、同様の壕が宮古島の東海岸南側に多く構築されていたということである。

壕構築に関しては、地元での防衛召集によって結成された郷土防衛隊第209中隊が東は浦底嶺から比嘉越、与那浜方面にかけて、西は久場間までの海岸線にかなりの数にのぼる壕を構築したとある。全て戦闘用の壕でタコ壺、塹壕、砲台が設置できる壕も構築するために毎日、朝から夜まで壕掘りに従事したとのことである。結果として米軍上陸はなかったため、本格的に壕が使用されることはなかった。

因みに宮古島における作戦計画を記した『宮古島戦斗教令』では、宮古島東側は断崖が海岸に迫っているため米軍上陸には不向きであり、宮古島西側に防衛の重点を据えろとの見解が記されている。



遠景（北から）



壕口（北東から）

22. ミルク嶺の地下壕群

所在地：城辺町西里添西

立地（標高）：80～90m

形態：人工壕

種別：陣地壕

現状：一部崩壊しているが、壕の残存状況は良好。

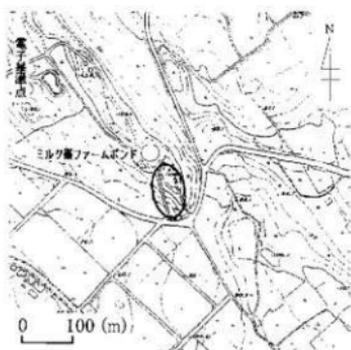
保存状況：山林の中に放置。

築造者：不明

築造年月日：1944年（昭和19）頃

戦時中の使用状況：陣地壕か

主な遺構：壕



概要

城辺町最寄集落と長山集落の境に標高90mの丘陵が南北に連なり、その一帯に壕を5基確認することができた。全て石灰岩を粗く削り込んだ壕で、最も長い壕は壕②で総延長約20m、短い壕は壕①で5m内外と多様である。丘陵の東西斜面に見られ、一部はファームボンドへ登る道路や麓の墓造成によって破壊を受けている。最も南側に位置する壕③は石灰岩塊の下部に掘り込まれているが、壕口から1mのところまで石積みによって塞がれており、内部への進入は不可能である。これらの壕は幅が広い場所でも1.5m、平均では1m弱、小部屋がいくつか設置されている壕も見られるが、複雑に内部で分岐するといったものは見られない。小規模な壕をいくつも小丘陵に掘り込んだ陣地壕といった印象を受ける。丘陵頂上からの眺望は良く、城辺町西里添から砂川まで一望の下に見渡すことができる。

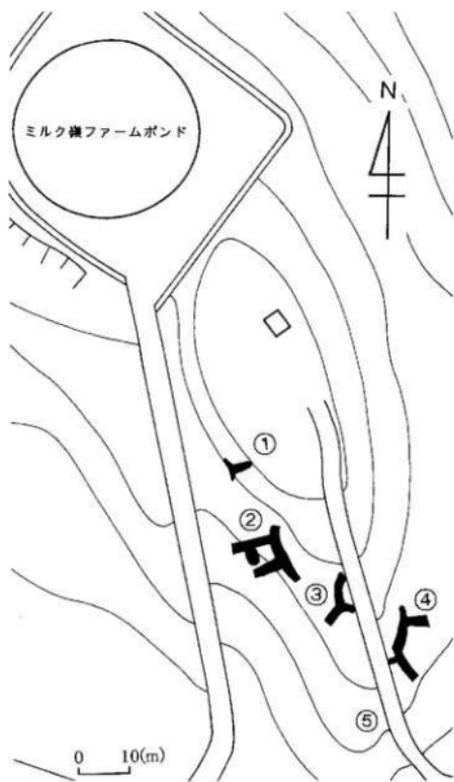
これらは今回の分布調査で初めて確認した壕群である。確認後、この一帯の壕に関する記録並びに聞き取り等を行ったが、詳細については解らなかつた。ただ、『宮古島地区防禦配備図』（第3図）では七五耗山砲陣地と十糧山砲陣地がこの周辺に配備されていることが確認できる。



ミルク嶺遠景（西から）



壕④



第47図 ミルク嶺の地下壕群配置図



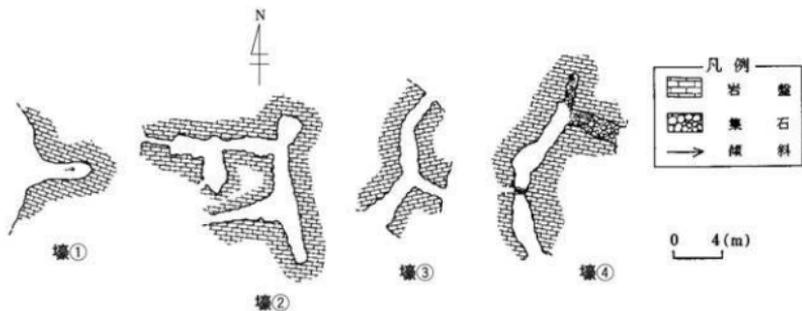
壕②内部



壕④空気孔



壕⑤内部閉塞状況



第48図 壕平面図

第 5 節. 伊良部町

伊良部町内の避難壕

戦時中の伊良部町の避難壕は、聞き取り調査などで4カ所確認することができた。そのうち2カ所を現地において確認することができた。伊良部島においてはとくに大規模な空襲はなかったが、住民は来るべき空襲に備えての避難壕を御嶽近く、畑地内、山林内に掘ったと言うことである。ここではそのような住民避難壕の概要について触れていきたい。

2. 国仲の避難壕

国仲集落の東側に広がる畑地間にある、低丘陵にかつて国仲集落在住の住民が避難壕を掘ったとされている。近年は周辺が採石場に変貌しつつある。今回の調査において2カ所を特定することができたが、実際に確認されたのは1カ所のみである。入口は殆ど埋没しており、内部へ進入することはできない。2003年（平成15）の台風14号によって完全に入口が埋没した。低丘陵の麓、畑地とほぼ同レベルに掘り込まれている。因みにこの避難壕に隣接して古墓が点在している。

またこれらとは別に国仲集落の北西側、下地島に面する海岸に、国仲集落の住民が避難のために掘った家族壕が、現在も残存しているとされている。現地は雑木が繁茂し、確認することはできなかった。



3. 佐良浜の避難壕

現在の佐良浜集落内に1カ所のみ残る。かつては佐良浜漁港に迫る崖面に数十カ所、掘り込んでいたが、戦後の漁港拡張工事や護岸工事の際にその殆どが壊された。現在残る壕は民家の裏手の崖面に掘り込まれているが、入口は廃棄物の置き場となっているため内部へ進入することはできない。外部から観察する限りでは石灰岩を掘り込んでおり、床や壁、天井は丁寧につくられている。更に複雑に折



れ曲がりながら奥へ続いていくのが確認できた。当時は石灰岩を掘り込むためにツルハシや石斧、金棒を用いたようで、構築は陣地構築等の壕掘り作業が始まった1944年（昭和19）10月頃以降と考えられる。周辺にはこのような壕がかつていくつもあり、戦後は佐良浜の子供達の遊び場となっていた。



佐良浜の避難壕遠景



佐良浜の避難壕壕口周辺



佐良浜の避難壕内部

4. カンギダツ壕・カヤフフヤ壕

所在地：伊良部町下地島

立地（標高）：0～5 m

形態：自然壕

種別：秘匿壕か

現状：壁、天井部分に一部崩落が見られる。

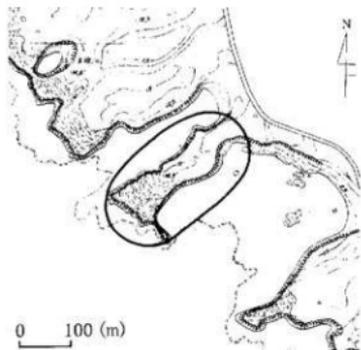
保存状況：海岸沿いの急崖に口を開けている。

築造者：独立混成第59旅団（碧部隊）

築造年月日：1944年（昭和19）頃

戦時中の使用状況：水上特攻艇を秘匿

主な遺構：壕



概要

下地島の西側の海岸、石灰岩の急崖が形成される一帯に計12基の横穴が見られる。下地島の外側を一周する村道から一望することができ、隣接する2カ所、入り江の南側崖にそれらを見ることができる。何れも海蝕によって形成された自然壕である。

かつて独立混成第59旅団（碧部隊）が伊良部島に駐屯し、米軍の上陸地点を下地島並びに伊良部島南岸周辺に想定した。それに伴って、下地島の当該地点に水上特攻艇を秘匿したとの聞き取りが得られている（宮古郷土史研究会1995）。

規模は大小、様々であり、壁や天井など人の手を加えた痕跡は見出すことはできない。奥行は深いもので20m内外、天井も高いもので7mあるものも見られた。何れも奥から手前に向かって緩やかに傾斜する。壕の入口には大小の石灰岩塊が散乱しており、また満潮時において壕の床面まで海水が達する壕は僅かであることから、全ての自然壕が特攻艇秘匿壕として利用されたのではなく、海蝕洞のいくつかを利用したものと考えられる。現状においてはどの壕が秘匿壕として利用されたか、その判別は付かない。また周辺の踏査を



カヤフフヤ壕遠景（南から）



カヤフフヤ壕内部

行ったが下地島西、南部において石灰岩の急崖が連続して見られるのは当該地点のみであり、このように海食洞が連続してみられる部分も当該地点のみである。下地島南側海岸においては散漫であるが、水上特攻艇を秘匿するのに適する海蝕洞が分布しているのを確認した。



カヤフフヤ壙遠景（北から）



カヤフフヤ壙壙口



カンギィダツ壙遠景（南から）

5. 牧山陣地壕

所在地：伊良部町字佐良浜

立地（標高）：88m

形態：人口壕

種別：陣地

現状：一部崩落が見られるが、残存状況は良好。

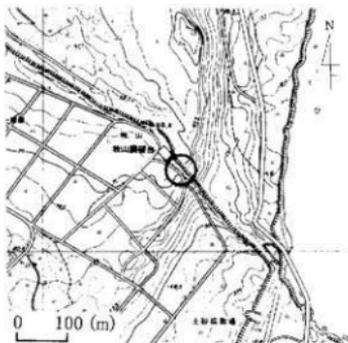
保存状況：牧山公園内遊歩道からやや離れた位置に放置。

築造者：独立混成第59旅団（碧部隊）

築造年月日：1944年（昭和19）9月頃

戦時中の使用状況：三上大尉を指揮官とする砲兵隊が駐屯。

主な遺構：壕



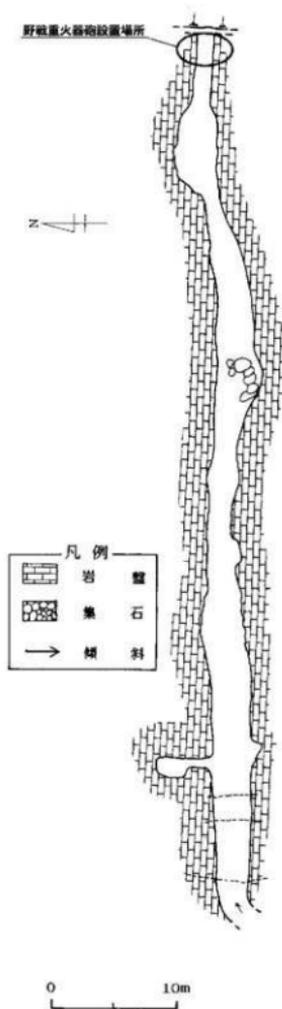
概要

伊良部島内の最高地点である牧山（標高88m）の直下に設置された陣地壕。牧山は琉球石灰岩から成っており、北東側は急崖を形成し、南西側は緩やかな傾斜面となっている。その頂上から徒歩3分程西側へ下った標高約75m付近に造られている。

かつて三上大尉を指揮官とする砲兵隊が当該地点に陣地を構え、伊良部島と宮古島間の敵機、敵艦の砲撃に備えるために壕を設置した。しかし、砲台を据える前に終戦となったため、実際に当該地点から砲撃することはなかった。『先島群島作戦』によると「伊良部島防衛は1944年（昭和19）9月以降に守備隊が配備された。長山高地（牧山）に野戦重砲15センチ、榴弾砲三門を秘匿、平良方面に上陸する敵を背後から攻撃する手はずになっていたが、集団命令により、主力は1945年（昭和20）6月初め、機帆船、舟艇等によって、宮古島平良港に転進、北地区の守備に就いた。」とある。

西から東方向へ斜り貫いており、全長72mにも及ぶ。入口の幅は約2.4m、高さは約1.7m、反対側の出口は幅1.1m、高さ約1.2mある。壕内の幅や天井の高さは一定ではなく、床面はほぼ平坦で、壁の成形は出口部分を除いて雑である。部材を嵌め込んだと思われる窪みが壁などに見て取ることが出来る。入口は南から東へスロープ状に下り、階段の一部と思われる石灰岩の段差が散見される。入口から入って左側部分には縦横1.5×2.2mの小部屋と、そこへ至る幅0.6mの狭道が設置されている。約40m進んだ地点では石灰岩の風化が進行しており、天井や壁の崩落が激しい。出口部分の造りは丁寧であることから重火器砲を設置したのと考えられる。出口はそのまま登坂不可能な断崖絶壁となるため、前方を塞ぐ木々等の障害物は無く、宮古島北部の西海岸を一望のもとに見渡すことができる。

周辺の地形から自然壕を形成する場所ではなく、また壕内部においては再石灰化が進んでいる部分が見られないことから、地下壕でよく見られる自然壕に手を加えたものではなく、一から石灰岩を掘り込んだ壕であると思われる。



第49図 牧山陣地壕平面図



野戦重火器砲設置場所



壕口



壕内部

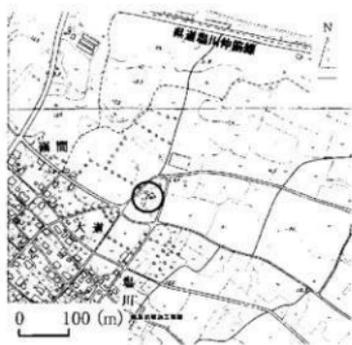
第 6 節. 多良間村

多良間村内の避難壕

戦時中、多良間島には旧日本軍による本格的な駐屯が無かったため、大規模な壕や陣地は構築されなかった。そのため、陣地構築の際に建築部材として使用される松が切り取られなかったためか、松林が島内各所に見ることができ、他の宮古諸島地区の様相とは異なる。沖縄戦時に関係する戦争遺跡としては避難壕が現在の集落周辺に4カ所、認めることができた。またこれら以外には、畑の中に竪穴を掘って上に雑草を被せるのみの簡易な避難壕が多くつくられたようであるが、現在は一つも残っていない。聞き取り調査では、畑の中に避難壕をつくることによって、仮に命を落とした場合、農作業中の誰かが見つけてくれるという理由で構築されたということである。また、八重山遠見台では沖縄戦時、飛行機や船を住民が交代で監視し、有事の際には至急、本部と連絡を取って集落にサイレンを鳴らした。

1. シュガー・ガー・ウスヌカー

字塩川、集落の中でも北東部に位置する井戸はシュガー・ガーとウスヌカーと呼ばれ、古くから飲料水や生活用水として利用されてきた。一帯は発達したドリーネとなっており、水量の豊富な湧水地である。現在もやや塩分を含む水が湧き出ている。かつては塩川集落住民の避難壕として利用されていた。内部は燻台のような加工痕は全く見られないことから、おそらく一時避難の壕として利用されたものと考えられる。内部は広く、現在でも戦前の生活用品がカー内に散乱している。



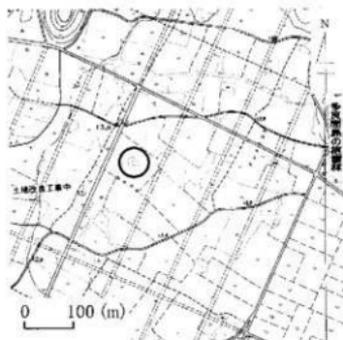
2. 塩川御嶽のトンバラ

塩川集落から東へ約1km離れた場所に塩川御嶽があり、その敷地内に石灰岩塊が2つある。それぞれの石灰岩塊下部に小さな自然壕が1ヶ所づつ見られ、戦時中の避難壕として利用していた。一部、地表面を掘り込んでおり、現在では3~4人が座って入れる程度の規模である。極めて規模が小さいため、一時避難としての壕であったものと考えられる。多良間島では大岩を方言で「トンバラ」と言い、畑にある大岩の下部を掘り込んで避難壕として利用した。中には仏壇も安置したトンバラ利用の避難壕もあった。



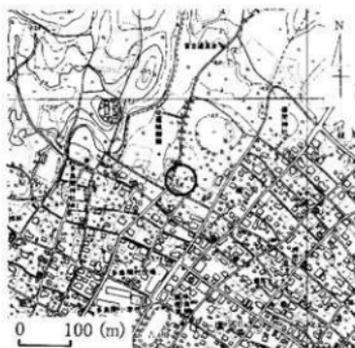
3. ヤマトウピットウトンバラ

現在の字仲筋のトゥッカバナ、多良間村立ふるさと民俗学習館南東側の畑の中に石灰岩塊が単独で見られる。その石灰岩塊の下部にある自然壕をかつて、住民の避難壕として利用していた。現在は周辺が舗場整備のため地表面がかさ上げされており、戦時中の状況とは一変している。このことによって壕の殆どが埋没しており、入口は幅1.2m、高さ0.4mと狭い。東西軸に石灰岩塊下部を貫通しており、その長さは約6m、壕の中央部分の天井は高くなっている。内部は人骨や獣骨が散乱しており、古墓であった可能性が考えられる。かつてはこのヤマトウピットウトンバラのように畑の各所にこのような石灰岩が屹立していたが、周辺の舗場整備のため、大部分が崩されたようである。



4. アマガー

現在の字仲筋仲保屋里、運城御嶽の南側にある自然壕で、内部は湧水が溜まっている。かつては多良間小学校にあった御真影を警報時に避難させたところである。1944年（昭和19）から多良間島にも警戒警報が発令されるようになり、度々アマガーに多良間国民学校の校長が御真影を抱いてこの場所に避難している。1945年（昭和20）11月2日に御真影を空襲から避けるために野原岳中腹の壕へ遷すにあたって、その役割を終える。因みに運城御嶽近くに避難壕があったとされるが、今回の調査では確認することはできなかった。





シュガーガー内部



ウスヌカー壕口



塩川御獄のトンバラ全景



塩川御獄のトンバラ壕口



ヤマトウピイトウンバラ全景
(東から)



ヤマトウピイトウンバラ近景
(南から)



アマガー全景（北西から）



アマガー壕口



八重山遠見台

第V章 結 語

平成15年度にかけて実施した宮古諸島地区の戦争遺跡詳細分布調査において所在を確認した戦争遺跡は66ヶ所であった。これら戦争遺跡は人工壕、自然壕が主として確認され、他に建造物、砲台跡、記念碑等も僅かながら確認された。各市町村毎の内訳は以下の通りである。

平良市	16ヶ所	城辺町	26ヶ所
下地町	4ヶ所	伊良部町	5ヶ所
上野村	11ヶ所	多良間村	4ヶ所

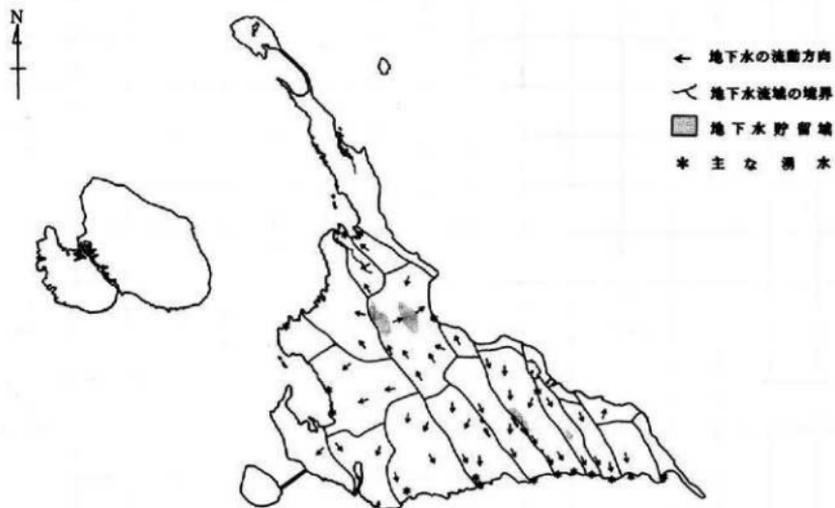
宮古諸島地区は沖縄本島地区と異なり地上戦が行われなかったため、一般的に戦争遺跡は余り分布していない印象を受ける。しかし実地調査を行った結果、沖縄本島地区と変わらない分布密度を有していることが確認された。この理由は沖縄戦時において、米軍上陸想定地域として当該地域に師団1、独立混成旅団2をはじめとする約3万の兵が配備されていたことによる。米軍上陸に備えて宮古島、伊良部島の各所に陣地壕、山砲壕、砲台といった施設が構築され、実際に使用されることは無かったものの、それらが現在に至るまで良好に残されている遺跡が数多く存在している。沖縄本島地区と比べて戦後の開発行為が進行していないことから、取り分け人工壕が一定区域に集中して分布している状況が見られた。

人工壕が集中して配置される遺跡を具体的に掲げると野原岳周辺（上野村）、平良港周辺、平良市植物園、二重越、宮原（平良市）、ミルク嶺、東保茶根（城辺町）があり、どれも低丘陵の斜面地を掘り込んで壕をいくつも配置している。

最も広範囲に壕が展開しているのは、旧日本陸軍司令部壕が設置された野原岳周辺である。宮古島のほぼ中央に位置する野原岳は沖縄戦時において戦略的に重要な拠点と目され、すぐ東側には陸軍中飛行場が、西側には司令部兵舎といったように軍の主要施設が集中して配置されていた。この周辺には38ヶ所もの地下壕、3ヶ所のトーチカ、3ヶ所の電波探知機発電機壕が見られることから、野原岳周辺が戦略的に重要な拠点として意識されていたことを、壕や構築物の異常とも思える密集度から読み取ることができる。また、県内においても野原岳周辺は、広範囲に各施設が残存している現状を見ると非常に稀であると言える。近年、当該地区において頻繁に採石が行われており、旧状が失われつつあるのが気になるところである。

野原岳周辺と同様に広範囲に戦争遺跡が残存しているのは平良港周辺で、本稿で取り上げたのはトゥリパー浜特攻艇秘匿壕群、大浜の特攻艇秘匿壕群、バイナガマビーチの機関銃壕、久松の機関銃壕、荷川取海岸秘匿壕群・ウブドゥマーリヤ特攻艇秘匿壕群がある。主に特攻艇秘匿壕が各所に残存しており、また沖縄戦時には多数の機関銃壕や砲台が配置されていたことから、戦略的に平良港が重要視されていたことは、これらの施設が広域的に配置されていたことで容易に想像がつく。戦後の市街地化並びに港湾整備によって、特攻艇秘匿壕をはじめとする多くの戦争遺跡が消滅したものの、現在も多くの遺構が現地に残されているのが確認できた。平良港周辺も近年の埋め立て工事等によって、旧状が変わりつつあるのが気になるところである。

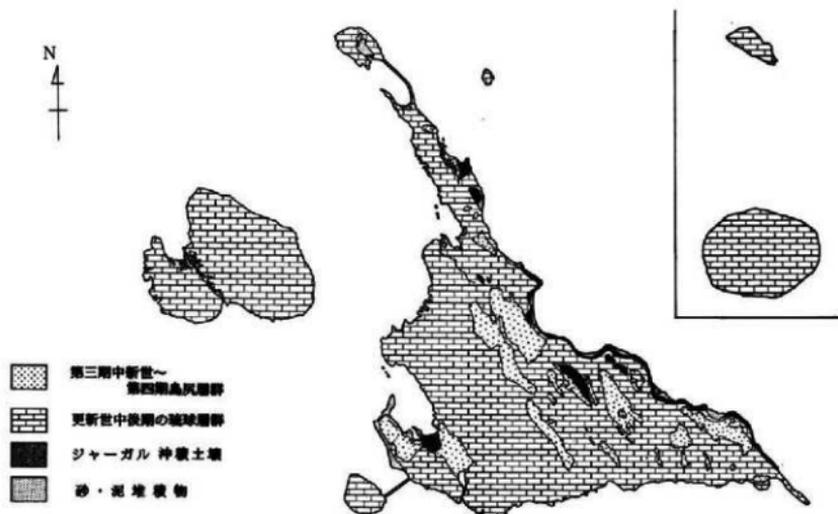
また宮古島においては壕を設置する際に生活用水の確保が重要事項となる。事実、1967年（昭和42）の下水道敷設まで、宮古島では飲料水を天水に頼っていた地域もあり、水不足は深刻な問題であった（渡久山1991）。翻って戦争遺跡が集中しているのは低丘陵周辺であり、その低丘陵は分水嶺であるという特徴が多く見られる（第50図）。このことに関連してか、壕の周辺には井戸や湧水といった水源が認められるといった特徴も見受けられる。このように水源と壕の分布の一致は偶然的なものではなく、予め地質を事前



第50図 地下水流域の境界及び流動方向（渡久山資料による）



第51図 明治10年頃のマラリア地帯（下地1983年）



第52図 宮古諸島地質図（角川書店1986年）

に調査していたものと考えることができる。一方で、水源が豊富であることはマラリアの発生地帯であるということも意味し、とくに平良市植物園北側は広大な湿原が広がるマラリア濃厚地帯であったことから、水源とマラリアの問題は表裏一体であったことが想定される（第51図）。旧日本海軍第313設営隊が旧日本海軍飛行場の北東側に隣接するこの低丘陵に陣地壕を設置したことは、マラリアによる危険性より戦略上の利点が優先されていたことを窺うことができる。旧日本軍がどのようなマラリア対策を行ったのかは解らないが、現地におけるマラリアの問題は、他の戦時体験記録からも重要事項であったものと思われる。今後の検討課題であると言える。

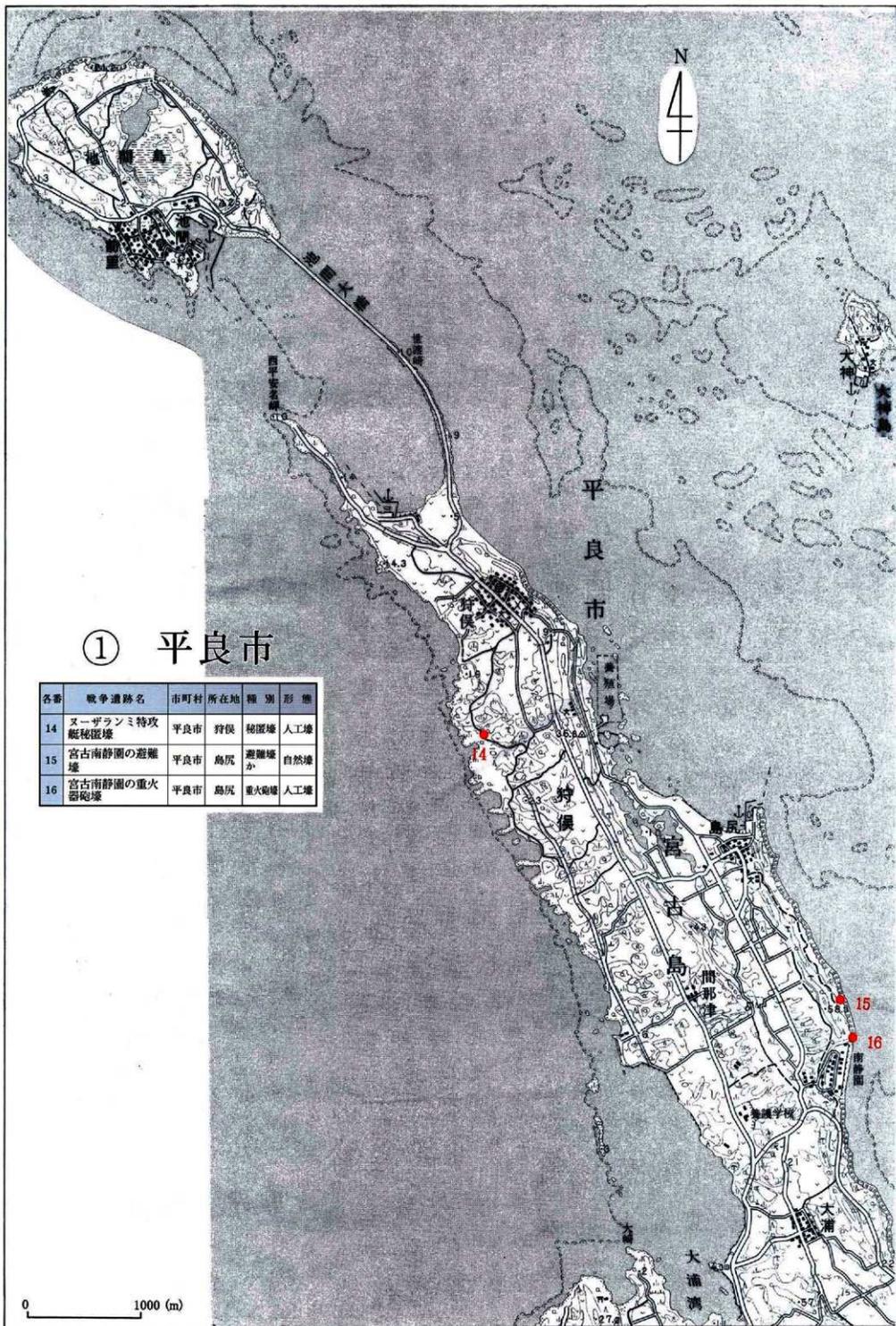
これら旧日本軍が関係する戦争遺跡以外では、住民の避難壕もいくつか確認することができた。最も残存状況が良好な遺跡は二重越にある平良町民の避難壕である。平良市街の東方に位置する標高約30m、東側崖面には近世以降から古墓が造られており、空襲が激しくなる1944年（昭和19）には避難壕として利用されていた。現在も薬瓶やインク瓶の破片、菜葉、缶詰と思われる鉄片等が墓室に散乱している古墓も見られた。また、平良町民は二重越から更に東側にある白原川にも避難壕を構築していることから、二重越以東にある集落周辺において多数の避難壕が構築されていた可能性が指摘される。これら古墓を利用した避難壕以外では、チフサブやトゥクルアブ等に見られるように自然洞穴を利用したものが多く見られた。

このことから新たに避難壕を構築するのではなく、自然洞穴や古墓といった本来あった場所や施設へ避難するといったことが一般的であったとされる。聞き取り調査では当時、国民学校で個人壕の構築方法が教えられ、個人宅に掘ったということであるが、実際の空襲を目の当たりにして以来、近くの自然壕へ避難するようになったとのことである。今回の調査では個人住宅に掘られた個人壕の確認に努めたが、殆どが埋め戻されてしまっており、残念ながら発見することはできなかった。

これまでは宮古郷土史研究会といった地元の研究会が主となって、当該地域の戦争遺跡についてまとめていたが、今回の調査において新たに報告した戦争遺跡は5遺跡に及ぶ。当初の予想以上に未確認の戦争遺跡が存在していたことが判明し、本報告書において改めて紹介することができた。しかし、本報告は限られた期間内の調査であったため今後、新たな戦争遺跡が確認されていく可能性は十分にある。当該地域において沖縄戦があった確たる証拠として戦争遺跡の価値は今後、更に高まっていくものと思われる。そのため、宮古諸島地区における戦争遺跡の実態を更に明確に把握していく必要がある。

(参考文献)

- 「沖縄戦 宮古の概要」『沖縄県史10 沖縄戦記録2』国書刊行会 1974
- 瀨名波栄『先島群島作戦』先島戦記刊行会 1975
- 『伊良部村史』伊良部村役場 1978
- 西江重樹『宮古に魅る』1981
- 『沖縄大百科事典』沖縄タイムズ社 1983
- 木崎甲子郎『琉球弧の地質誌』沖縄タイムズ社 1985
- 渡久山章『宮古島の水を訪ねて』『工業用水』第388号 1991
- 宮古郷土史研究会編『宮古の戦争』麻姑山書房 1995
- 多良間村戦時・戦後体験記編集委員会編『島びとの煙硝記録』多良間村教育委員会 1996
- 『城辺町史』第2巻戦争体験編 城辺町役場 1996
- 岡本恵昭『海上挺身隊中尾氏の公開について』『平良市総合博物館紀要』同博物館 1997
- 大城将保『第32軍の沖縄配備と全島要塞化』『沖縄戦研究Ⅱ』史料編纂室 1999
- 沖縄県立埋蔵文化財センター『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（Ⅰ）—南部編—』沖縄県立埋蔵文化財センター 2001
- 沖縄県立埋蔵文化財センター『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（Ⅱ）—中部編—』沖縄県立埋蔵文化財センター 2002
- 『沖縄県の地名』平凡社 2002
- 『村民の戦時・戦後体験記録』上野村教育委員会 2003
- 沖縄県立埋蔵文化財センター『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（Ⅲ）—北部編—』沖縄県立埋蔵文化財センター 2003
- アヲ遺跡発掘調査団『アヲ遺跡調査研究Ⅰ—沖縄県宮古島アヲ遺跡発掘調査報告—』六一書房 2003
- 沖縄県立埋蔵文化財センター『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（Ⅳ）—本島周辺離島及び那覇市編—』沖縄県立埋蔵文化財センター 2004



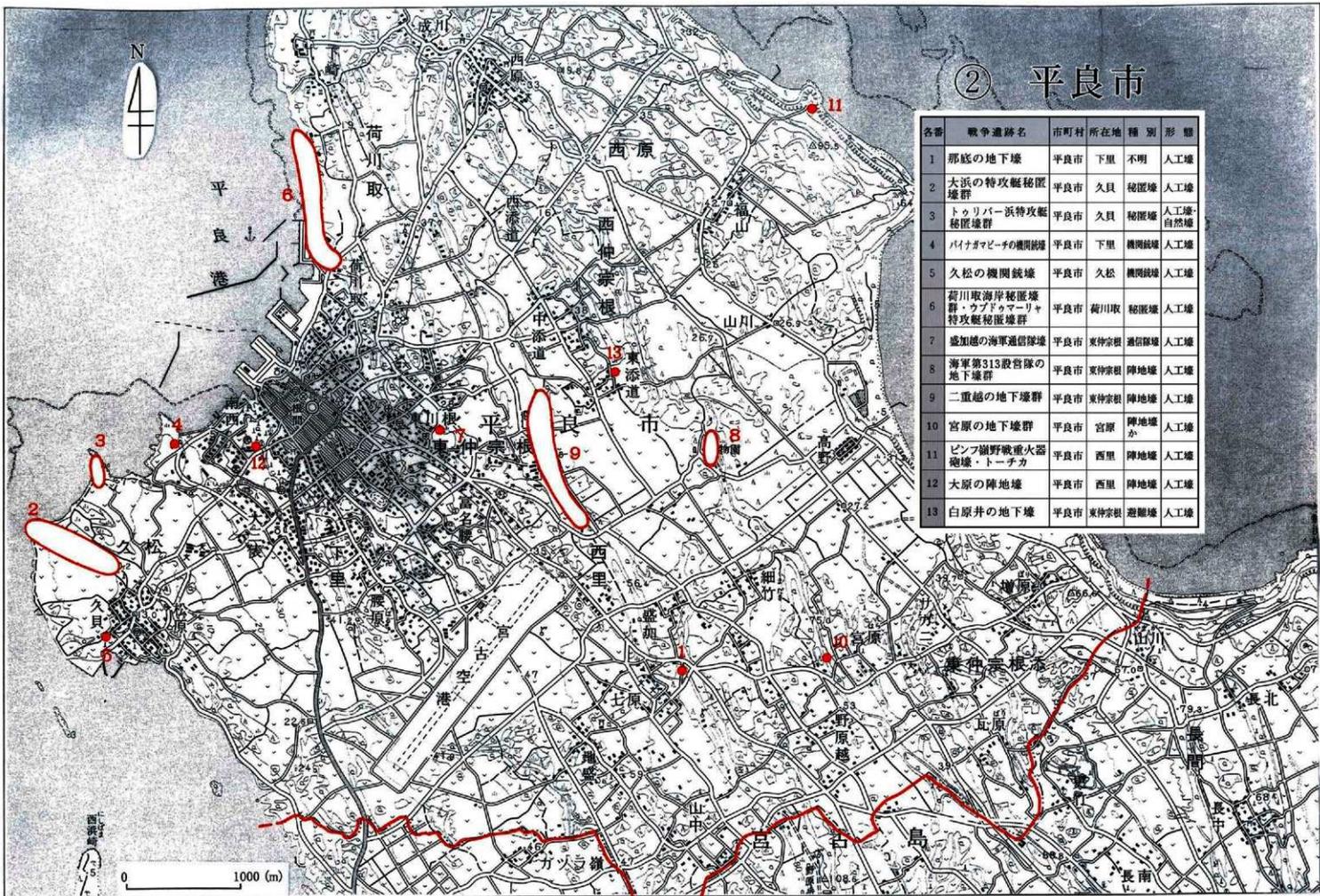
① 平良市

各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
14	ヌーザランミ特攻艇秘匿壕	平良市	狩俣	秘匿壕	人工壕
15	宮古南静園の避難壕	平良市	島尻	避難壕か	自然壕
16	宮古南静園の重火器砲壕	平良市	島尻	重火器壕	人工壕

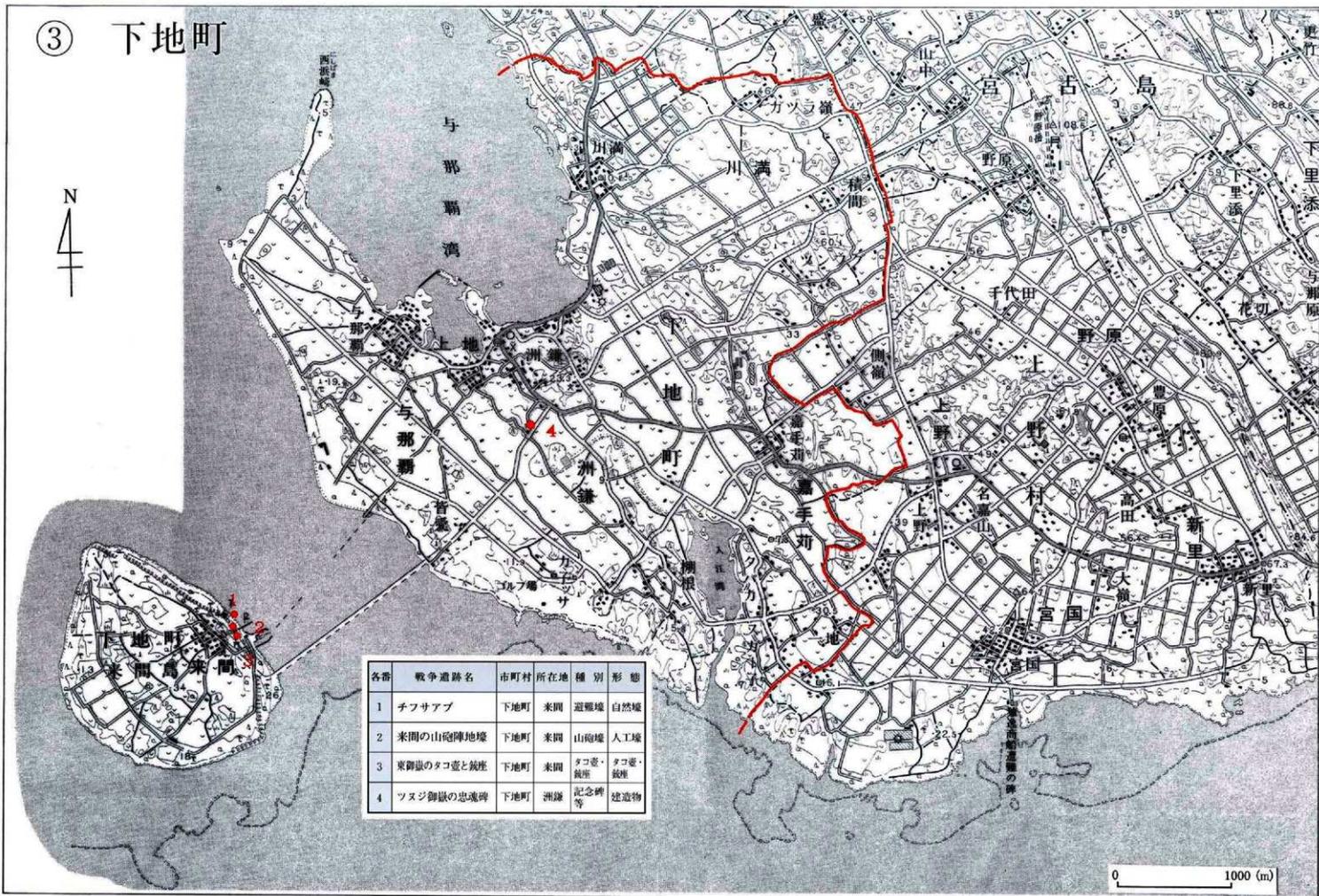
0 1000 (m)

② 平良市

番号	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
1	那底の地下壕	平良市	下里	不明	人工壕
2	大浜の特攻艇秘匿壕群	平良市	久貝	秘匿壕	人工壕
3	トゥリバー浜特攻艇秘匿壕群	平良市	久貝	秘匿壕	人工壕・自然壕
4	ハイナガマビチの機関銃壕	平良市	下里	機関銃壕	人工壕
5	久松の機関銃壕	平良市	久松	機関銃壕	人工壕
6	荷川取海岸秘匿壕群・ウブツマリア特攻艇秘匿壕群	平良市	荷川取	秘匿壕	人工壕
7	盛加越の海軍通信壕	平良市	東神宗	通信壕	人工壕
8	海軍第313設営隊の地下壕群	平良市	東神宗	陣地壕	人工壕
9	二重越の地下壕群	平良市	東神宗	陣地壕	人工壕
10	宮原の地下壕群	平良市	宮原	陣地壕	人工壕
11	ピンツ野嶺砲臺火器砲臺・トーチカ	平良市	西里	陣地壕	人工壕
12	大原の陣地壕	平良市	西里	陣地壕	人工壕
13	白原井の地下壕	平良市	東神宗	避難壕	人工壕

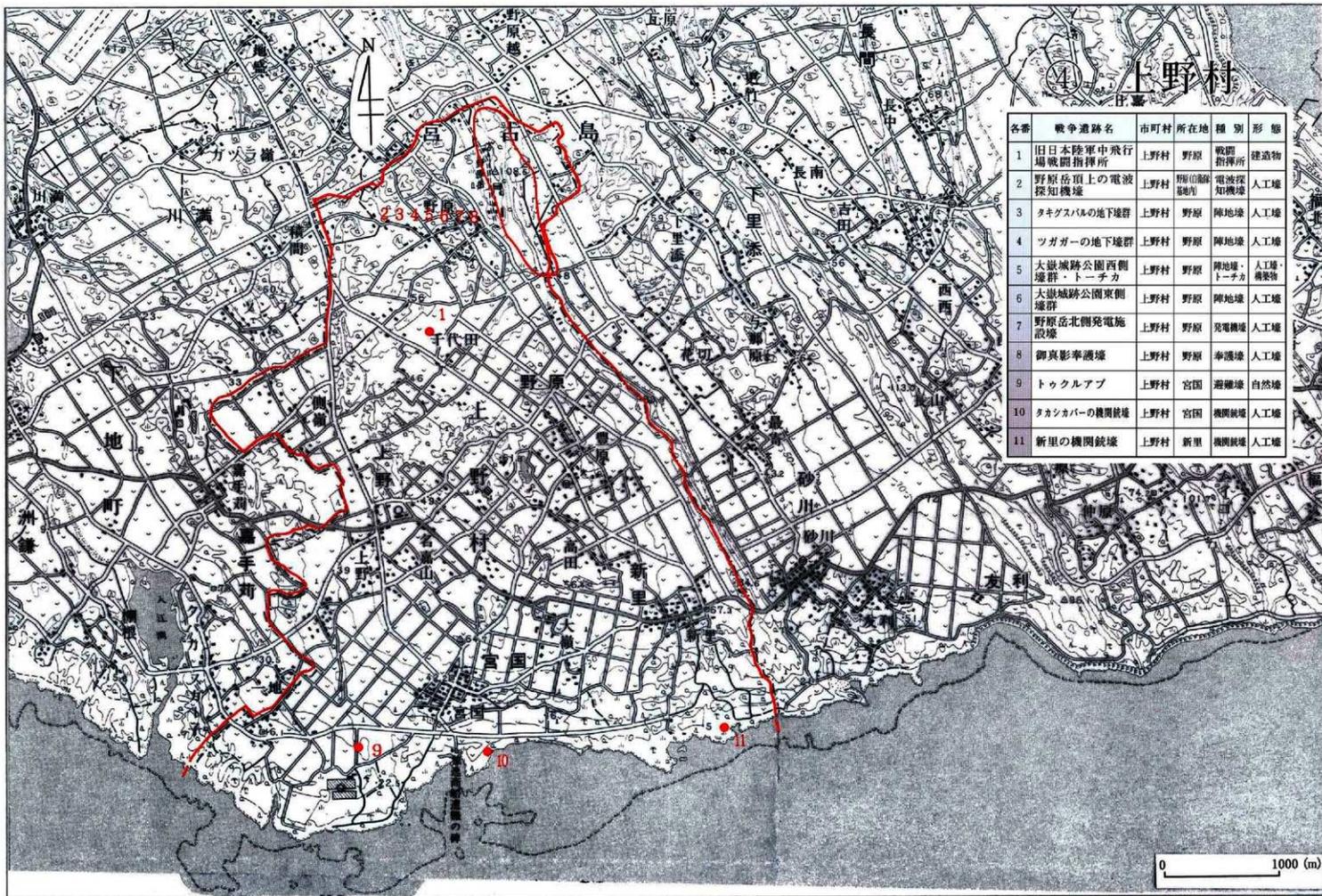


③ 下地町



各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
1	チフサアブ	下地町	米間	遊撃壕	自然壕
2	米間の山砲陣地壕	下地町	米間	山砲壕	人工壕
3	東御山のタコ壺と銃座	下地町	米間	タコ壺・銃座	タコ壺・銃座
4	ツヌジ御獄の忠魂碑	下地町	洲津	記念碑等	建造物

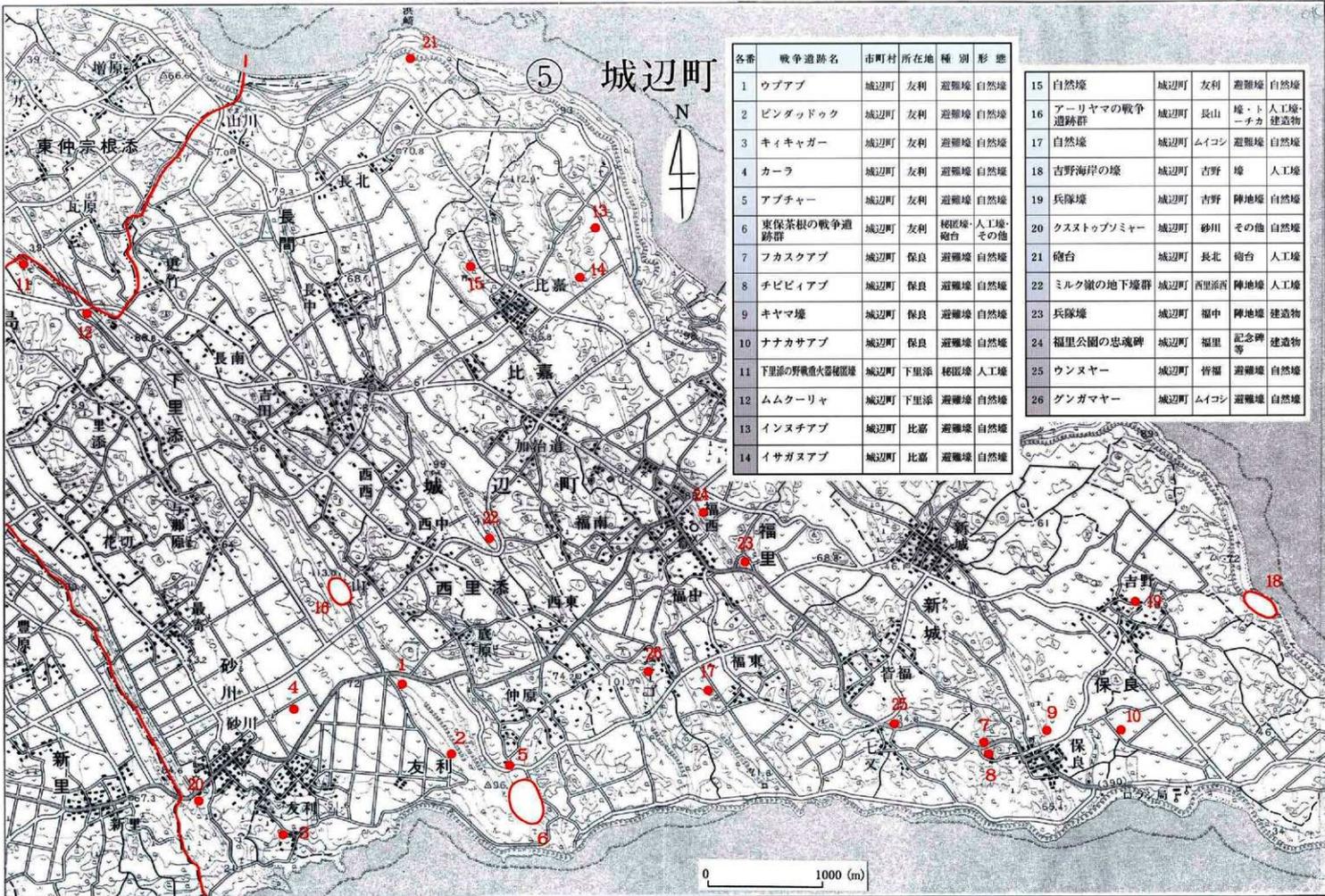
0 1000 (m)



上野村

番号	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
1	旧日本陸軍中飛行場戦闘指揮所	上野村	野原	戦闘指揮所	建造物
2	野原丘頂上の電波探知機壕	上野村	野原山頂	電波探知機壕	人工壕
3	タキグスハルの地下壕群	上野村	野原	陣地壕	人工壕
4	ツガガ-の地下壕群	上野村	野原	陣地壕	人工壕
5	大巖城跡公園西側壕群・トーチカ	上野村	野原	陣地壕・トーチカ	人工壕・構築物
6	大巖城跡公園東側壕群	上野村	野原	陣地壕	人工壕
7	野原丘北側発電施設壕	上野村	野原	発電機壕	人工壕
8	御真影奉護壕	上野村	野原	奉護壕	人工壕
9	トゥクルアブ	上野村	宮国	避難壕	自然壕
10	タカシカバの機関銃壕	上野村	宮国	機関銃壕	人工壕
11	新里の機関銃壕	上野村	新里	機関銃壕	人工壕

0 1000 (m)



⑤ 城辺町

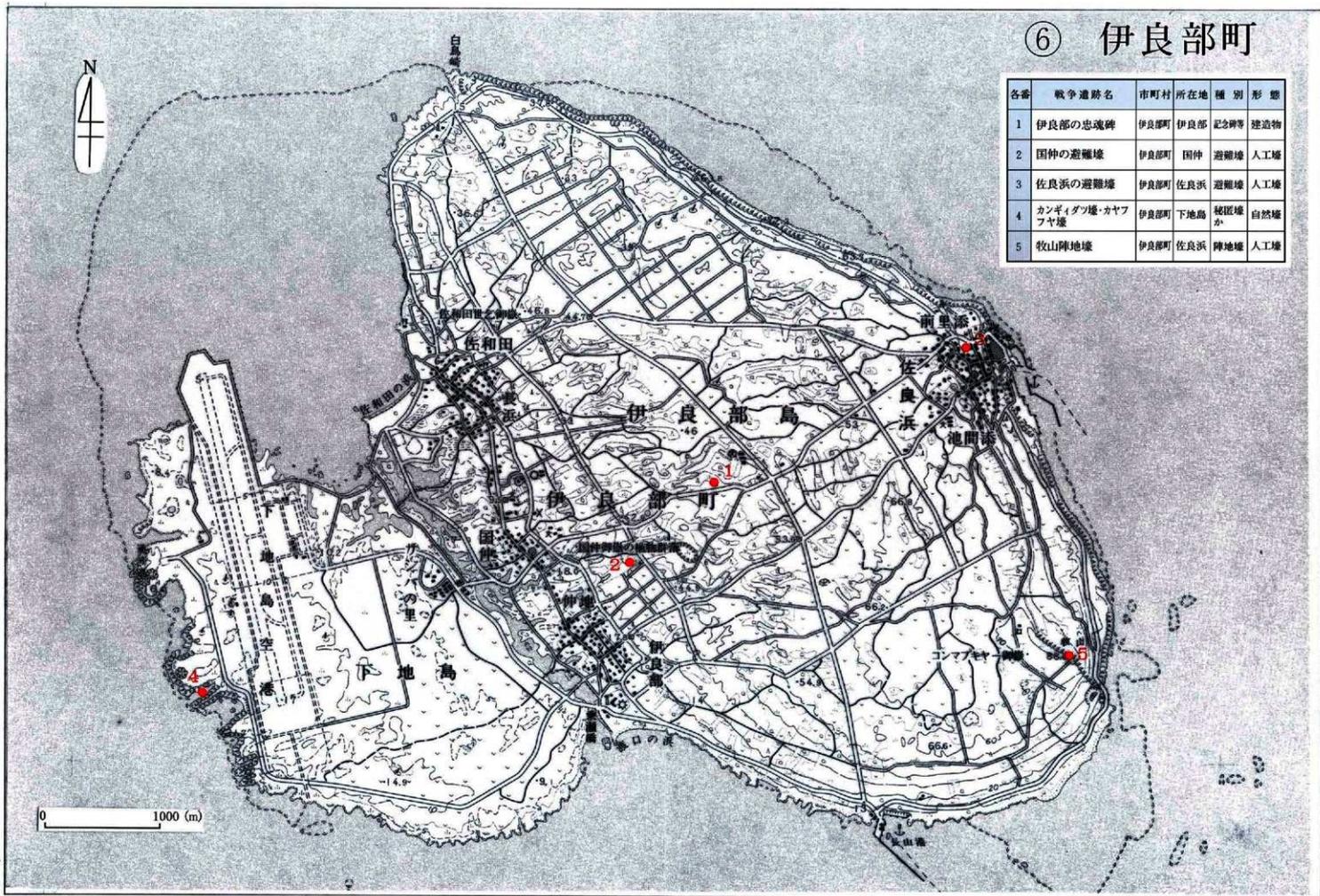
各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
1	ウブアブ	城辺町	友利	避難壕	自然壕
2	ピンタッドック	城辺町	友利	避難壕	自然壕
3	キィキャガー	城辺町	友利	避難壕	自然壕
4	カーラ	城辺町	友利	避難壕	自然壕
5	アブチャー	城辺町	友利	避難壕	自然壕
6	東保茶根の戦争遺跡群	城辺町	友利	秘匿壕・人工壕・砲台・その他	
7	フカスクラブ	城辺町	保良	避難壕	自然壕
8	チビビアブ	城辺町	保良	避難壕	自然壕
9	キヤマ壕	城辺町	保良	避難壕	自然壕
10	ナナカサブ	城辺町	保良	避難壕	自然壕
11	下里添の野戦重火器秘匿壕	城辺町	下里添	秘匿壕	人工壕
12	ムムクーリヤ	城辺町	下里添	避難壕	自然壕
13	インスタブ	城辺町	比嘉	避難壕	自然壕
14	イサガサブ	城辺町	比嘉	避難壕	自然壕

15	自然壕	城辺町	友利	避難壕	自然壕
16	アーリヤマの戦争遺跡群	城辺町	長山	壕・土一ツカ	人工壕・建造物
17	自然壕	城辺町	ムイコシ	避難壕	自然壕
18	吉野海岸の壕	城辺町	吉野	壕	人工壕
19	兵隊壕	城辺町	吉野	陣地壕	自然壕
20	クスストップシヤ	城辺町	砂川	その他	自然壕
21	砲台	城辺町	長北	砲台	人工壕
22	ミルク嶺の地下壕群	城辺町	西里添	陣地壕	人工壕
23	兵隊壕	城辺町	福中	陣地壕	建造物
24	福里公園の忠魂碑	城辺町	福里	記念碑等	建造物
25	ウンヌヤ	城辺町	皆福	避難壕	自然壕
26	グンガマヤ	城辺町	ムイコシ	避難壕	自然壕

0 1000 (m)

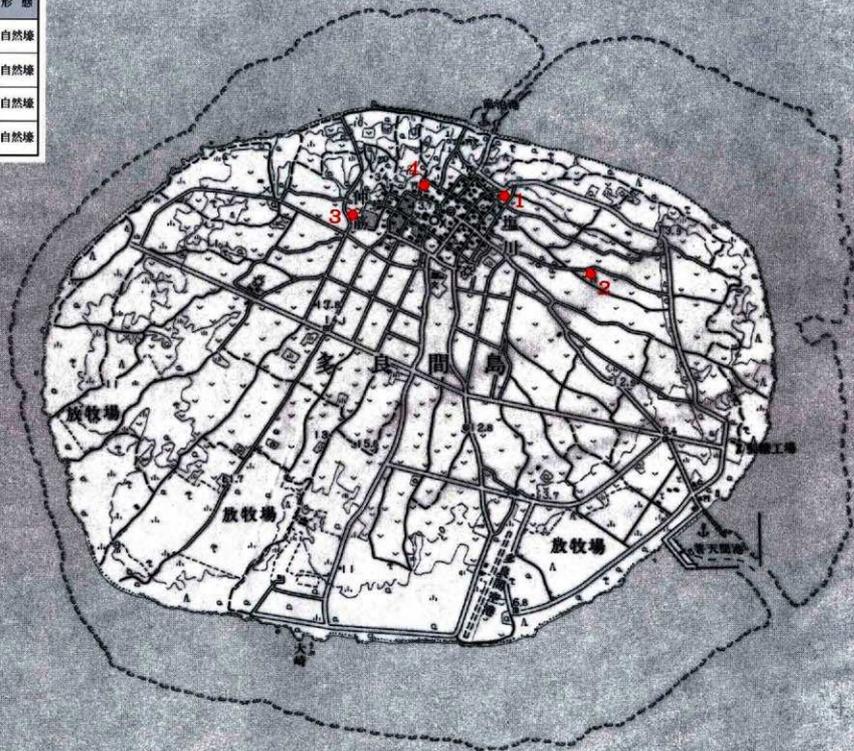
⑥ 伊良部町

各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
1	伊良部の忠魂碑	伊良部町	伊良部	記念碑等	建造物
2	国仲の避難壕	伊良部町	国仲	避難壕	人工壕
3	佐良浜の避難壕	伊良部町	佐良浜	避難壕	人工壕
4	カンゴイダツ塚・カヤフツ穴塚	伊良部町	下地島	秘匿壕か	自然壕
5	牧山陣地壕	伊良部町	佐良浜	陣地壕	人工壕



⑦ 多良間村

各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
1	シュガー・ガー・ウスノカ	多良間村	塩川	避難壕	自然壕
2	塩川御嶽のトンバラ	多良間村	塩川	避難壕	自然壕
3	ヤマトウビイトトンバラ	多良間村	仲筋	避難壕	自然壕
4	アマガー	多良間村	仲筋	御真影奉護壕	自然壕



0 1000 (m)

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第30集

沖縄県戦争遺跡詳細分布調査 (V)

—— 宮古諸島編 ——

発 行 沖縄県立埋蔵文化財センター
編 集 沖縄県立埋蔵文化財センター
〒903-0125 中頭郡西原町字上原193-7
TEL 098 (835) 8751~8752
<http://www.maizou-okinawa.gr.jp/>

印 刷 有限会社 若葉印刷
〒902-0024 沖縄県那覇市古波蔵339
TEL 098 (834) 3429